

536
111



始



エト44-75

死とその神祕

フレイマリオン著・大沼十太郎譯

アルス刊

大正
14.6.27
内交

536-111

譯者の序

本書はフラマリオン氏の名著ランコニー（拙譯「未知の世界へ」）の刊行後に於て尙廣く蒐められた幾多最近の實例、觀察、報告に基づいて更に前研究の範圍を擴大し、例に依つて實證科學の見地から精細にこれを分類し、著者一流の深刻鋭敏な解明を試みたものである。

若し前著「未知の世界へ」がその實證科學の鍵鑰を以つて前人未到の靈界を劃せる神秘の扉を開き得たものと言ひ得べくんば本書は正にその核心に觸れんとして究明の第一歩を踏み入つたものと言ひ得やう。科學の前に神秘はない。超自然はない。

大正十四年二月麻布の寓居にて

譯

者

目次

第一章	最大の問題——それは果して究明され得べき問題か……………	三
第二章	唯物論——不合理な學說……………	六
第三章	人は何であるか。心靈は在るものか……………	一〇
第四章	未知又は多少未知の心靈の超自然的作用……………	一四
第五章	言葉もなく、合圖もなく、而も遠方から作用する意志の力……………	一八
第六章	隔感現象と遠隔の地に於ける靈的傳達……………	二二
第七章	眼に依らない視力。遠感相通現象を除く靈的視力……………	二六
第八章	未來視力——事前の豫見——夢中經驗（豫め夢に見る事實）……………	三〇
第九章	未來の知識……………	三三

死
と
そ
の
神
秘

第一章 最大の問題——それは果して究明され得べき

問題か

生きようか、生くまいか

(シエクスピア)

予が本問題の研究に手を棄めて既に五十餘年、而かもまだ充分満足を感じる程の解決を得てゐないのであるが、今日思索する人々の爲めに、兎に角、予が過去の研究の結果だけを茲に發表する事にした。

科學的實驗方法——それは眞理を覚むる上に唯一の價値ある手段であつて、吾々がこの問題の研究を繼續する以上、この方法は避けることの出来ない、又避けてはならない要求を齎すのである。本書に論ぜられる重大な問題は最も嚴肅な、そして最も複雑な事柄である。即ち小にしては狹隘な小天地に棲息する人類から、大にしては絶對無限の大宇宙に關係した問題である。吾々の青年時代には何物にも肩されぬ自信があつた。前には永い生涯が展がつてゐた。そこで果てしもない種々の問題の研究

を始める。けれども如何に長い生涯も、その光と影と共に夢のやうに過ぎ去て了ふ。所謂、世事は千變するが人生に百年はないのである。故に、若し吾々の生存してゐる間に一つの願望を有つとしたら、假しそれが如何に遅くとも確實に人類の進歩に貢献する事であればならぬ。尠くとも人類の動物的状態から全く脱したものでなければならぬ。一體、人間といふものは随分氣紛れなもので、存外輕信家が多いかと思ふと、懷疑家も少くない。有徳な人があるかと思ふと、一方には犯罪人も出る。超然家がゐるかと思ふと、極めて物好きな世話焼家もある。謂はゆる世は様々、大體として、まだ人間は本當に野性的境遇を脱しては居らぬ。

曩に拙著「生息可能なる世界多々あり」の第一版が発行された時、讀者の中には當然出づべき後編の「靈的存在者數多あり」を期待してゐる人があつた様に思はれた。そして前者の諸問題が続いて刊行された通俗天文學、火星、ユラニ、ステルラ、星の夢等の予の著書で解決されたとしても、後者の諸問題は尙ほ依然未解決のままになつて居る。靈魂は何れの處に生き残つてゐるのであるか、空間か、他の世界か、抑も亦、再び化身して吾が地球の上に戻つて來るのであるか、今、これ等の怖ろしい諸問題は、人類最大の疑問として吾々の前に直面してゐるのである。

銀河の横はつてゐる無限の空間を越えて、飛んで來た原子の中に齎された所の考へる原子、即ちそれが人間となつた事を考へる時、自分は肉體のやうに心靈に於ても何等意味のない拙らぬ物であるまいか、進化の法則は何の高さまで自分を引上げて行くのか、世の中には物理的世界の秩序に相應した道德世界の秩序と云ふものが本當に井然として存在してゐるものであらうかと考へるのは尤な事である。

更に又考へる。心靈は矢つ張り物質より優つてゐるのではないか、吾々の眞の性質とは一體何んなものであらうか、吾々の未來の運命は何うなるのか、吾々は一瞬間輝いて、そして永久に消え去つて了ふ儚かない焰に過ぎないのか、一たびあの世に旅立つた相愛の人々には、如何にしても二度と逢へぬものであらうか、別離は果して永久に續くものか、死は何人も免れ得ないものか、若し何物か、残るとしたら、それは到底釋ることの出來ない、眼にも見えない、そして極めて漠然としてはゐるが、併かも立派に意識され得る人格的要素であらうか、その要素は長い間續けるものか、それとも永久に存在してゐるものであらうかと。

生きようか、生くまいか？ それは凡ての哲學者、思索家、宗教家、そして主義者達に依て繰ねられて來た永い間の重大な宿題であつた。死は生の終局であらうか、或は變形であらうか、生きた有機體が破滅して了つた後、なほ人間が生存して居ると云ふ事に就て、何か確かな證據があるのか、事實

此問題は今日まで科學的觀察の範圍外に置かれてあつた。けれども既に人類は凡ての實驗に依て科學の進歩を實現させて來たのである。然らば何處までもこの實驗主義に則つて一步一步宿題に近づいて行くことが論理に適つた唯一の研究方法ではあるまいか。今、吾々は現在の五感の前に存在する世界とは異なつた他の世界、實證科學的研究方法では、迎も這入る事の出来ない神秘的な世界に直面してゐるのではないかといふ事を考へる時、それが極めて細心に、慎重に、そして正確な觀察の下に深く探究して行つたならば、ある事實が科學的に分析され得るものか、何うか、そしてそれが嚴格な批判の下に實際に承け入れる事が出来るか、否かを確め得ると信じる。吾々には最早、美しい言葉も、形而上學も必要がない。覓むるものは唯た事實だけである。眞理である。換言すれば吾々の運命、吾々の天命、吾々個々の現在とそして未來に關する眞想である。だがこれ等の問題の解明は單に冷たい理性から許りの要求ではない。それは實に吾々滿身の熱望であり、衷心からの憧憬である。

この場合、自分を持ち出すことは、多少自惚れの結果の様にも見える。けれども、それは自分は元々此の問題と離るべからざる因縁を有つてゐる結果であつて、予が本問題の研究を始めた動機は主として悲める人々に應へる爲めであつた。それ等の關係から五十餘年の間には種々の不思議な事件に煩悶してゐる有らる階級の人々から、その解決を求められた夥しい親展書が予の手許に集まつて居る。

予は本書の卷頭に故ら凡庸な序文を書くよりも、正直に事實を叙べてゐるこれ等の書信の若干を茲に掲げる方が却て意義ある事と思ふ。

深く愛し合つてゐた人と未だ死別した事のない人々には、本當に絶望の深みを探つた記憶もなければ、墓場の固く閉された扉に體を打ちつけて自ら傷けるやうな経験もない筈だ。けれども吾々の常に遭遇する恐怖の前には、如何にしても入り込むことの出来ない厚い壁が衝き立つてゐて頑として動かさない。予は何百となく眞面目な訴への手紙を受取つた。そして、それには一々返事を出して置いた。予は又、これ等の秘密を世間に發表する事の可否に就て随分迷つた。長い間躊躇して居つた。言ふまでもなくこれ等の手紙は何れも極めて眞剣な訴へであり非常に熱烈な希望を表はしてゐるもの許りであつた。然るにその問題は間もなく世間一般から著しい注意を以て迎へられるやうになつた。最早一個人の特殊な出來事や秘密ではなくなつた。そこで始めて予の義務が明瞭になつた譯である。故に一面から觀ると本書は慥かにこれ等の人々の感情の表現である、結晶であると言つても差支はないのである。唯だ茲に私信を紹介するに在りて一言斷つて置きたい事がある。それは書信の多數には予として聊か羞赧を感じる賞讃の言葉を與へられた事である。然も予がそれに何等の改削も施さず、故らその全文を掲げたのは、實に筆者の眞摯な告白を尊重する意味からである事を諒解して貰ひたい。

けれども、夫は一私人としての要らぬ遠慮であるかも知れない。人間と云つても無限永却な宇宙の前には一粒の原子に過ぎない事を自覺してゐる天文學者としての立場から、世間が何んと褒めやうと、貶さうと、そんな事は疾の昔に縁を絶つてゐる筈である。事實世間の人々も今日まで然ういふ風に子を考へてゐて呉れた。故に予は一切の非難にも、賞讃にも全然遠方の傍觀者である。

左に掲ぐるのは、一人の狂はん許りの母によつて認められた書信の全文である。それは尠くとも惱んで居る人を救ふ企ての如何に貴い事であるかをよく示してゐる。彼女の治療は最早今日の科學では駄目である。乃ちこれから創造さるべき心靈科學の力に俟たねばならぬ。

我が偉大なフラマリオン様——

私は是非貴方の御膝にお縋りし、貴方のお足に接吻してお願いするところですが、それも叶ひませんから、恠に無分別な振舞の様ですが、突然乍ら手紙を以て御願申上るのです。どうぞ私の心中を御憐察下されまして、恐怖と悲痛から救つて頂きたいのです。

私は寡婦で御座いますが、一人の息子と一人の娘とに慰められて餘生を送つてゐる中に、先頃、たつた一人のこの息子は、三十三年の若い生涯を一期として遂に逝くなりました。この事に

就て是非先生に申上りたいのです。

この子供が五才の時、股關節の疾患を起して色々治療につくしましたが、遂々醫者からも見離されるやうになつたのです。けれども、私共夫婦は子供の病氣を癒してやりたい一心に、マドリツト市の相當な地位を棄て、一切の事を犠牲にしてまで、西班牙のある淋しい片田舎に引込みました。その中、子供はとう／＼跛になつて了ひましたが、それでも命だけは幸ひ助かつたので、せめては彼の子の健かに生長するのを楽しみに暮して居りました。

自分から申すも如何ですが、この子供は極めて濃厚な、伶俐な、そして何事にも正直な、寛大な性質で、それで誰れにでも懐つく愛嬌者で、殊に眉目形さへ人優れてゐたので、皆さんから宛然天使のやうな綺麗な子だと稱へられて居りました。子供が私共の前に座つてゐる時、つくづくかの子を顔を見ては何んで恁んな美しい子が私共に授かつたのであらうと思つた事や、又、何うして造物の神様がこの善良な子供にかゝる悩みを與へて下さるのかと勿體ない事ですが神様をお怨み申した事も度々ありました。十二歳の時、足の方の悩みは一寸癒くなつたやうに思はれましたが、それでも松葉杖をたよりに歩いてゐました。十七才の頃には、片つ方の松葉杖と一本の杖だけで歩行けるやうになつたのです。然るに二十才になると、足の病氣の盛り返しと思はれる膀胱

炎に罹りました。そして、これが新たな苦しみの鎖の始まりであつたのです。その後十三年の間は癒くなつたり、悪かつたり、不安の日を送つてゐました。けれども如何に病が募つた時でも、何んなに苦しい場合でも彼の善良な、そして快活な性質に少しも變りはありません。何處までも神々しい位氣高い子供でした。どうぞ私の言葉を嗤つて下さるな。私は我が子乍ら彼の性質、氣品、行狀、舉止、動作の人並優れた模様が悉く言ひ表はすことは、逆も私の拙ない筆ではその十分の一も出来ない事と思つてゐる位ですから。

過ぐる四年間は割合に小康を保つてゐたのです。殊に昨年などは自分でも必度癒るに違ひないと信じてゐた位良かつたのです。

私が一九〇二年、夫に先立たれてからは、三人の母子は生活の爲めに働かなければならなくなりました。けれども私共は至極圓滿な家庭をつくつて難有い毎日を楽しく暮して居りました。妹は尊敬して居る兄にその身を献げる爲めに、望まれる結婚を斷つてゐたやうな譯です。私は生きてる限り二人の子供を手許に置く事は、親子三人の此上なき幸福であり、自然である様に考へられました。二人の優しい子供等から朝夕慰められて餘生を送つてゐる私は、如何に幸福な者であつたでせう。御察を願ひます。

昨年の八月、息子は、はや三十三才の立派な青年になりました。或人から鑛山に行つて見てはどうかといふ相談があつたのです。元々この事業に興味を有つてゐたので、私共は餘り進まなかつたが、彼の希望で私共も一緒に參る事になりました。聞けば鑛山迄は是非共馬に乗つて行かなければならないとの事でした。息子は膀胱炎の爲めに豫て醫師から固く乗馬を禁じられてゐたので、そんな危険を冒してまで鑛山などに行く必要はないと、私も娘も反對したのですが、大丈夫危険はないと息子が飽くまで保證するので、仕方なく跟いて行きました。

あゝ、何故私共はあの時、強つて途中から歸らなかつたのでせう。果然息子は疲勞の爲めに胃熱を起して床に就きました。田舎の藪醫者達は本當に彼の病根を發見出来なかつたのです。そして彼等は何れも「何んでもない！ 心配は要らぬ」と言つてる中に數ヶ月は過ぎました。斯かる間に膀胱は段々腫れ上つて来て、とう／＼苦しみの中に破れて了ひました。是時の惨じめな苦痛の有様は、地獄の拷問でも恚んなこととはあるまいと思はれました。有名な外科醫が來たのは二十二時間も後の事です。息子は既にすつかり世を去る準備をしてゐたのです。醫師は一應の手術をして呉れましたが、「もう駄目だ！ 長くて二十四時間の壽命だ」と言ひ切りました。なんと無情な宣告ではありませんか、それでも健氣な息子は、苦悶の中にも母や妹の悲しみを察して、何ん

なに病魔に抵抗したでせう。それから十三日間も存命して居りました。あゝ彼の優しい魂！偉大な魂！

息子が臨終の言葉は三十三才の若い者の言葉ではありませんでした。それは聖人の教です、天使の諭しです。偉人の戒めです。あゝ、苦しみに歪められたあの顔！あの世の何かを視てゐるあの眼！苦痛の中にも微笑を堪へてゐるあの口！

息子は私の手を握りながら申しました。「さやうならお母様、懐かしいお母様、私を忘れて下さいますな。おゝ全能の神様よ、あなた御自身のお子供方にさへ多く與へられないものを、數ならぬ賤しい私にその十倍も恵んで下さいました。感謝致します。この上はどうぞ死を、私を愛して下さるなら、神よ私に死を賜へ！」

フラマリオン様、私を憐んで下さい。あなたのお母様の御心になつてお慈悲を垂して下さい。私は悲しさの餘り氣が狂ひさうで御座います。息子と別れてから、はや三十二日にもなりますが、その間、私は夜も碌々寝た事はありません。着のみ着のまま、寢床に身を横たへ、唯だ眼を閉ぢてうつら／＼してゐる間に明方の四時になつて床を離れます。この苦痛の眠りの中に、私は必度一度はある極まつた何とも知れない心象が胸に刻まれます。そして眼を開いても明かにそれが

頭の中に残つてゐて、終日そのために惱まされてゐるのです。一日として恐怖を感じてゐない日はないのです。

天文学者であり、思想家であるフラマリオン様！限りない宇宙の不思議や他の世界の事までもよく知つて居られるフラマリオン様！あの神祕の世界に導いて下さるフラマリオン様！私は偉大な貴方の前に跪いて御願申上ます。どうぞ魂の残つてゐる所を教へて下さい。私は再び息子に會へないでせうか、何んとかして息子と音信を通ずる方法がありますまいか。先生！日夜恐怖に襲はれて居る私をお救ひ下さい。闇の中に彷徨つてゐる私に一緒の燈明を與へて下さい。若し私が死んで息子に會はれるものなら、今すぐ死にたいのです。ですが先生、娘は一人で此の世に残つてゐるのは厭だと申します。どうぞ一諸に連れて行つて呉れと申されるので、私は今死ぬ事でも出来ません。生きて此の苦しみを続けなければなりません。何んと怖ろしい事でせう。あの世の息子と會へるなら、そして今の恐怖を免れ得るなら、私は何んな犠牲も拂ひます。息子のゐない天國には決して行きたくはありません。

天の秘密を知つてお出でになる大先生！靈魂の在處ところを握つて居られる大先生！私がかれ程申上たら必ず私の心を、私の身の上を御察し下される事と存じます。先生！今、あれの魂は何

處に居るのでせう。魂は昔の事を記憶して居つて地上に生き残つて居る私共の事を考へてゐるでせうか、生きてゐる時と同じ様に私共を愛してゐて呉れるでせうか。その魂を何んとかして私共の近くに呼び寄せる事が出来ないものでせうか、先生！ どうぞ教へて下さい。

お許し下さい！ この狂氣じみた私の仕方を、私は今、夢を見てゐるのか、覺めてゐるのか自分でも分りません。唯だ、眞赤に焼けた火箸を傷口に差込まれる様な烈しい痛苦と悲哀を感じて居るのです。

フラマリオン様！ お許し下さいませ、貴方の今、研究して居られる美しい星や太陽には、私のやうな感情や苦痛は有たないでせう。それ等のものに比べると、私の一身などは物の數にも入らない程小さなものです。併し私の今の苦痛は、悲哀は、宇宙の何物よりも大きいと存じます。それは何故でせう。あゝその神秘、その神秘の鍵を私に恵んで下さい。

先生！ 貴方のお母様の御名に依て、もう一度お許し下さい。そして不幸な田舎の女を憐んで下さい。

一九〇七年三月三十日

西班牙、サンタンダー縣、レイノザにて

エヌ、ボツフアード

以上は手紙の全文（冗文の所は處々省略した……譯者）で、一字一句苦惱の文字である。著者が故ら茲にその全文を掲げたのは、かゝる境遇に在る人達の有らゆる恐怖、苦痛を世間の人々に記憶して貰ひたいからである。私は繰返してディオニソスの神々のために辯解して置かなければならない事は、その神々の唯一の意義は、斯様な惱みの雲霧を追拂はんことに悶いて居る人々の大なる悲哀を明かに表はす事にあるのである。

けれども、或る場合に於ては、斯様な悲惨な母性愛にも、絶望の苦悶にも、神に身を捧けて救助を求め熱烈な願にも動かされない、石のやうな冷かな心を持つてゐなければならぬ事がよくあるものである。

僧侶はこの種の訴へを毎日受ける。それは彼等は自分が何んな超自然的な謎にも這入り込んで、それを解決する力を與へられてゐる神の代理者だと考へてゐるからである。彼等は如何なる場合でも型に嵌まつた宗教的慰安を以てこの悲しみに答へるのである。僧侶は常に信仰と啓示とを語る。併し乍ら、信仰はこれを強ふる譯にはいかない。それは又、吾々が考へる様に一般的には行はれてゐない。私自身には信仰はない。けれども僧侶や、僧正や、大僧正は社會的に信仰の必要なものである事を教へて居る。地球上には何百といふ種々な宗教がある。それ等は何れも有益なものであらう。けれども暫

學の見地から無條件に承け入れる事は出来ない。殊に私が今まで述べた様な事件に逢着して、彼等神の代理者達は、全知全能の神が人間を支配してゐるのだと云ふ事を、立派に吾々に得心させる事が出来やうか。科學者は懺悔者の腰掛にも、僧正の椅子にも着くことは許されない。科學者はその識つて居るだけの事を説明するのみである。彼等は凡ゆる物に對して正直である、公平である、獨立的である、又理論的である。科學者の任務は研究に在る。考査に在る、故に天から眞理の啓示を受入れる事は宗教家よりも少ない。これが私の未知の婦人に與へ得る唯一の答である。けれども私は近い中には彼女の息子に再ひ會ふ事が出来る。又親子の間には必ず靈的交渉が存在してゐると云ふ事を彼女に暗示して置いた。私はオーギスト、コムトや、サン、シモンや、アンファンタンの様に新宗教の高僧であると自任してゐるのでは決してない。けれども未來の普遍的宗教は科學、殊に物理學の知識と關聯した天文學の上に基礎を有つてゐるものと云ふ事は疑ひのない事實であらう。

吾々は何處までも慎重な研究を續けて行かうと思ふ。著者は茲に自分を過賞し、尊敬された人の手紙の全文を載せた事に就ての辯解を反覆する。それは自分に都合の悪い敬語や、文句を妄りに抹消する事は、發信者の悲歎、信頼、希望の幾分でも滅殺する惧があつたからである。次に掲ぐるのは娘を亡くした母の手紙である。

先生！ 豫て貴方の御著書に依て御高名をお慕ひして居りました。私は先生から全然未知の者で御座いますが、詳しく私の事情を申上たら必ず私の不幸を憐れみ下されて、慰安の道を示して頂ける事を信じて居ります。

去る九月十九日、私は十六歳になつた許りの娘に先立たれました。娘は思慮の緻密な、感情の至極穠かな、そして心根の正しい、何一つ言ひ分のない子で御座いました。それに表情に満ちた彼女の青い瞳、ぱつちりとして黒い睫毛に縁取られた優さしいその眼、美しい眞直な鼻、幾分大きい方でしたが多分に善良性を表はしてゐるその口、そして百合色をした面長な顔、笑ふ度に刻んだやうな小さな唇、艶々した蔦色のあの見事な髪束の微かに波を打たせて長く垂れたあの立派な姿、そして金の泡のやうに處女の頬を飾つてゐるあの可愛らしい生え際、總々した髪束の束に掩はれてゐる貝殻のやうな小さい耳、朝夕接吻してやつたあの耳垂、今は皆、唯だ想ひ出の種となりました。身心共に何一つ缺點のない、純潔なあの娘が、何うして慘酷な手に奪はれて行つたのでせう。娘の死は私からも一切のものを奪ひ去つて了つたのです。

娘は年に似ず考の深い、物の分つた子でした。生前、人生を超越した最も解し難い問題に就ても二人でよく話し合つた事もありました。吾が子ながら娘は私に取つては貴い信友であつたので

す。何物にも替へ難い可愛い吾が子、吾が友は影も形も見られなくなつたのです。

私は娘が逆も助からないと直覺したその時から、何んな所へでも娘と一緒に、彼女の後を趁ふて私も死んで行かうと、ひそかに決心してゐたのです。けれども、娘の死の前夜、私の胸の底に深く秘めて置いたことが必度彼女の心に通じたのだと思ひます。娘は瘦細つた腕を私にさし伸べて、「お母様！ 私が死んでも、お母さんは決して死んではいけませんよ、お母さんは屹度待つてゐらつしやらないならぬですよ」と申された時には私も愕然びつぱんしました。そして次の日、百合の花のやうな白い娘が最後の接吻を私に與へて、永へに眼を閉ぢて了ふまでは、宛で夢を見てゐたやうに茫つとして何事も纏まつた記憶はなかつたのです。あゝ最後の接吻！ それは娘が命の残りの全部をその中に注ぎ込んだ接吻でした。あゝその瞬間！ その時深く刻まれた痛ましい印象は永遠に私から消え去る事はないでせう。娘の面影は私の眼の前に残つて居ります。私の爲めに生き残つてゐて泣いて下さいと言はれた言葉は、私には一生忘れることの出来ないものになりました。私は今、何物をも呪ふてゐます。自分の生命の百倍も貴い娘を奪つて行つた神様をも恨んでゐます。娘が生さてゐて呉れてこそ私が生き行く事が出来るのです。この上は私は心霊説から慰安を求めたいと存じます。信仰と希望と愛の中に私の住家を求めたいのです。け

れども私にはさうした學問はありません。

私は夫と相談して、彼女の寫眞、巻き毛、遺稿その他殊更ら縁りの物を卓上に集めて、そして私共の切ない念願を込めて、彼女の魂を呼び出さうと努めました。何遍も繰返して行ひました。けれども娘は一度も歸つて來ません。吾が畏敬する先生様！ 私共は何うしても貴方の御助けを願ふより外はありません。娘はまだ生きてゐるのでせうか。もう一度あの愛らしい口から優しい言葉を聽く事が出来ないものでせうか。私は喜んで私の餘命の全部を捧げますから、もう一度娘の靈魂に會はして下さい。

私のこの世での望みの全部は、美しい、愛らしい娘の魂が残つてゐるといふ證據を求めたい一心です。

難有い先生様！ 私は貴方様の御名著を拜讀して、貴方が必ずこの生き残つてゐる憐れな母の御願を聽いて下さる事と信じます。私がこの神秘を知りたいと望むのは決して單なる好奇心からではないのです。實に生命にも替へ難い切なる必要があるからです。茲に私は堪へ切れぬ心願と、全たき信頼を以て先生の御返事をお待ちして居ります。先生の御命令なら私は巴里へでも何處でも参ります。

尊敬する偉大な科擧者様へ謹んで感謝の意を表します。

一八九九年十一月

テイル、スル、バンヌ アール、プリモール

予は右の手紙にも少しの變更を加へてない。予は五十年の間には種々な人から、色々の尊稱や敬語を餘る程貰つて居るので、手紙の中に何んな賞讃の辭があらうと、一向無頓着である。

吾々は科擧者として、自己の天職に忠實であらうとすれば、唯だ知つてゐる事だけの説明でなければならぬ。吾々はその尋ねる人に何んな事情があらうと、一時的の慰安を與へる爲めに何人をも欺く權利はない。予はあの憐れな母の要求に對して絶對に確實な解答が出来なかつた。それは既に二十年前の事であつた。その後も予は本問題の研究を繼續した。即ち本書はその解決の材料を提供する目的を以て出されたのである。

予は未知の通信者からの傷ましい告白を文字通りに寫し出した。それは愛兒を喪つた親や、愛人に別れた人々に取つて「正しき神」なる語は現實に對する侮辱であると思はれないといふ事を表す爲めであつた。吾々は容易にこれ等の人々の不満や反抗を理解する事が出来る。更に予は、一層甚だしい宗教の虚偽的慰安に充たされた書き物や、舊教徒、新教徒、猶太人、唯心論者、自由思想家、

唯物論者、無神論者の種々な手紙を有つてゐる。それ等は何れも世界の組織に於て聰明な原理（即ち神）の存在を否定する目的から、主として吾々自身の周圍に見るところの様々な不正の事實に就て書いたものである。男子は往々懷疑主義によつて、不可避の物として放任する事に依て、そして又、自然は人間の努力に無頓着であると信する事に依て勝手に自分自身を慰めてゐるものである。けれども、女子はさうでない。彼等は自分を諦めない。彼等は無を承け入れやうとはしない。彼等は未知のもので、眞の何物か、其の中に存在してゐると感ずる、そしてそれを知らんと努めてゐるのである。

予は常に殆んど一週間と間がなく、この種の手紙を受取つた。

だが、全智とは一體何であらうか。吾々は常に神は人間と同じ考へを有つてゐる。正義の觀念は即ち神の意思に一致して居る。神の思想は人間のそれよりも無限に優つてはゐるが、その性質に於ては同じものであると信する傾向がある。けれども、それは全然間違つた考へであらう。即ちその間には何うしても遙かに異つた何物か、なければならぬ。昆虫はそれが蛹になる時に、又、新たに得た翅をひろげる爲めに蛹の外皮を破る時、何の趣味も、喜愛も感じまい。人間の思想も、昆虫のそれと著しく異つてゐると同じ程度に、神の思想と人間のそれとの間には、大なる距離がなければならぬ。吾々

は矢張神秘によつて圍まれて居る。吾々の任務はその神秘を研究するに在る。

非道極まる歐洲大戦役は、生きる權利を持って生れ、そして父母が多大の犠牲を拂つて育て、來た若い人々を無慘に殺した。而かも千五百萬と云ふ驚くべき多數の青年を奪ひ去つた。予はこの戦争の間に百を以て數へる手紙を入手した。それは何れも人間の制度の尙ほ野蠻であり、不正である事を訴へたもの、戦争の慘禍を哀んだもの、爲政者の無暴を罵つたもの、怖しい破壊を許した神を呪つたもの許りであつた。殊に、愛人を失つた爲めに自分の全生涯を破壊されて了つた事を狂はん許りに想へて來たものが多數であつた。

吾々の運命に關する一層怖ろしい問題が、更に吾々の前に起つた。それは實際解決の不可能な問題であらうか。吾々人間の間には、せめて一瞬間なりとも惡から離れ得ないものであらうか。何んといふ淺ましい事であらう。吾々の眞心の要求、理解せんと欲する切なる願ひ、そして吾人の前に横たはる愛人の亡骸に對する悲しみから、人間を救はんとして生れたといふ宗教は、今まで吾人と約束した何等の證據を齎した例しはない。神學上の立派な議論も吾々には何物をも與へてない。吾々には言葉は要らぬ。唯だ、實證された事實を求めてゐるのである。死は有ゆる人の思想を支配する複雑な問題であり、凡ての時代の人に共通する最高の問題である。それは吾々が刻々向つて行く當然の終局であ

る。出生と同様に重要な生存上の一法則であるとされてあつた。けれども、吾々には出生が自然であるやうに、死も亦自然であるとは考へられない。

生の長からん事を欲するのは、如何な時代の人でも、何んな種類の人でも、生れ乍らにして有つてゐる人間共通の性質である。けれども、この性質、この個人的熱望の的となつて居る「生命の永續」と云ふ一般的信仰は、不幸にして未だ積極的根據の上には立てられてはゐない。況んや科學の發展とは何の交渉もなかつた。併しこの事は最も説明の價值ある極めて重要な事實である。

此の場合感情を輕視する譯には行かない。けれども、それは零に等しいものである。科學的係數ではない。既に掲げた二通の書信は長い間に予の入手したもの、一部分である事は勿論であるが、一八九九年、予は社會の有らゆる方面に向ひ、自らその事實の調査を開始して以來、予の許に蒐まつたこの研究に關する文書は實に四千百〇六通、それに以前の分五百通を加へなければならぬ。此の事は予の著書ランコニー（譯者曰くアルス刊行拙譯「未知の世界へ」六十九頁）に詳かに載せてある。

前二通の書信に類したものは幾百通とある。併し一々それを茲に紹介してゐるは徒らに讀者の煩を増すに過ぎない事であるから、唯だ、一九〇四年八月十五日に、ラ、ロシユルで受取つた少しく内容の異つた一通の手紙を左に紹介する。例に依て原文のままである。

私は今、兩眼共に白内障たこひで悩んで居ります。けれども、是非私はこの手紙を貴方に書かなければならない事情があるのです。私は何事にも懐疑的な、そして冷評好きな者ですが、併し、事實は飽くまでも信じます。今、私共四人の生命は回復の道のない、無惨な災禍の爲めに破壊されて了ひました。私の娘は一九〇二年頃までは極めて淡白な、愛嬌者で、娘の友達や、その親達は申すに及ばず、ロシフオア全市の評判者でした。然るにその娘は遂にネーオルの精神病院に一生を送る事になつたのです。憐れな母は娘を連れて、巴里にも、ポルドーにも、ソージャンにも行きませんでした。そして種々の専門醫に診て貰つたのですが、彼等は何れも科學の虚偽と無力とを遠慮なく示して呉れました。この一年半は實に私共親子が唯だ彼等の犠牲になつた苦しみの歲月でした。私はいつその事、自殺したらと思つて居ります。私の腦の中で、「お前の娘は氣狂だ」と繰返してゐます。私は今、世の無情を考へたり、生命は人間多數の爲めに存するものだと思つた虚偽な事を考へたりしてゐます。私共は生れるときから先祖の缺點を持つてゐるのです。癱痺された肉體の裏に膠着してゐる人格とは一體何んなものでせうか。肉體は分子の作用に因り、兩親の教育に依り、吾々に強ひられた生活様式に依り、又父母の肉體的及び道德的條件に依つて一つの型に打

込まれた鑄型となつて終生その人格を支配するのではないでせうか。換言すれば人格はその鑄型の爲めに一生奴隸となつて驅使されるのではありますまいか。

毎度、教會の教壇からは随分莫迦氣切つた説教や墮落した話を聽かされてゐます。私は常にそれに反抗して來ました。私は凡ての人に承け入れられる確かな事實を信じてゐたいのです。何でも輕信し易い唯心論者は餘りに愚か過ぎます。彼等は私にピタゴラス、佛陀、アペラール、フェネロンや、ロベスピエールの書物を呉れましたが、それ等は私には極めて非常識な教としか思はれません。寧ろ彼等の言ふ事を眞面目に承入れてゐる人々の心が私には何うしても解し兼ねます。

私は三十三年の間、餘り書物を読んだ事はないのです。唯だ、近頃になつて、自分の今日の煩悶に、聊かでも應へて呉れる物はなからうかと、一、二、三の書物を捜して見ました。私は偶然そこに貴著「未知の世界へ」を見つけたのです。

私は敬虔な心持を以て「未知の世界へ」を読みました。そして、その百五十七頁のマリイ、ドテイロの話、猫は慥かに妖怪を認めたと違ひないと思はれます。それは必度、電氣的の刺戟を受けたのでせう。併し先生、貴方は何故恚うした現象を唯だ臨終の人に就てのみお調べになるので

すか。

死に瀕してゐる人の最終の悲嘆、最後の思想は無意識に出る表現の原因であるといふ事には何の證據があるのでせう。

私は貴方の未知の友です。貴方の御高説に共鳴してゐる一人です。貴方の靈魂の研究に關する結果を眞剣に期待して居る者です。靈魂か、媒介物か、貴方は有數な天文學者として、又二に二を加へれば四であつて、五でない事を立派に主張される數學者として、この問題を科學的に何う御證明なさいますか、要は貴方の權威ある御研究の結論を伺ひたいのです。どうぞ私の申上げた事を貴方の前に燃えてゐる香とのみ思つて下さるな。私共の迷ひを解いて下さるのが貴方の偉大なお役目です。何も御遠慮はありません。貴方の御研究の結果を御發表になるのが貴方の當然な權利です。天職です。私共は百萬言の福音よりも、貴方の一言の御教示を渴望してゐるのです。

(一四六五信)

以上の手紙は政府のある大官から寄せられたもので、讀者は文面の模様で畧ほそれと推察され得る事と思ふ。併し遺憾乍らその姓名を公にすることは出来ない。

同時に讀者は、予の研究の結果が相當の權威を具へるまでは、その發表を見合せてゐた譯も諒解さ

れる事と信ずる。實際この手紙を受取つたのは一九〇四年で、當時は予が一八六一年から始めてゐた著述の最中であつた。斯の種の著作は、一年や二年の短日月の間に纏められるものではない。

實際、予の許に集まつた幾千の照會、質疑に對して予の取扱つて來た始末を一々本書に紹介してゐては、一卷は愚か、十二巻でも完結する事は出来ない。それは凡て解明される時が來るであらうか。中には二十五年も前からの問題であつて、畧ほ解決に近づいてゐるものもある。

多數の讀者は長い間に亘つて、種々の事實や觀察から私の研究に向つてその解決の資料を寄せて呉れた。そして其の解決こそ彼等が非常な信頼の下に期待してゐるものである。吾々の努力が、果してこの死の問題を縊つてゐる長い間の暗雲に一閃の光明を投げ與へる事が出来るであらうか。

子供の時分、學校で哲學や、宗教の話の中に「唯一つの事が必要である」と云ふ事を屢々聽かされた。それは魂を救ふことである。先生は常に吾々にアレクサンダーや、シーザーや、ナポレオンの戦争の話をした後で、必度、「假令、人が全世界を獲たとしても、自分の心靈を喪つては何んにもならぬ」と結んだものである。そして先生は地獄に墮ちた罪の人々が、永却不滅の火焰で惡魔に拷問されてゐる所の繪を吾々に示して、この火は罪の人を燒盡す事なく、永く彼等を燒き苦しめてゐるのであると教へて吾々を戰慄させた。事は何うでも鳥渡、面白い趣向である。兎に角、死後の運命に關する

問題は吾々に最も重大な、最も真面目な、そして最も深刻な問題である事は争はれない事實であらう。生きようか。生くまいか。ハムレットのこの場面は毎日吾等の前に繰返される。深く考ふる人の生涯は死に關する默想である。

若し人間の存在が結局無に歸るものならば、吾々の全生涯は單なる一場の喜劇に過ぎない。

だが、吾々が進んで死の問題に直面するにしても、退いてその考へを避けるにしても、兎に角、死は生命の最大事件である。吾々の前途に必ず横はつてゐる絶壁で、いつかは其の下に落ちる事の絶對に兎れ得ない終點である。故らにその問題を忌避するが如きは稚氣の極である。殊に、この問題は絶對に人智の推察を容さない神秘であると諦らめ、吾々の研究を以て徒らに時間を浪費する物好きな所業と嗤ふものがあるとすれば、それこそ人生を解せぬ痴者の言ひ分であらう。自己さへ分らぬ憶病者の申譯であらう。

死の悲しい光景を描き出してゐるものは、主としてその周圍を取巻いてゐる種々の事物や、喪装や、それを包む宗教的儀式や、最後の審判日や、そして最終の告別哀叫である。若し吾々が天文学や、心理學の研究に傾注すると同じ努力を、吾が地上生活の最後の局面に向けて、その刹那の現象を調べて見たら、後に残された人々の絶望が轉じて未來に輝く希望となるやうな結果を見る事はあるまいか。

暴風雨の後に靜かに虹が現はれるやうに、臨終の悲嘆が讚美にかはる様になりはしまいか。

吾々が自分の運命を考へる時、或は自分の愛人を喪つた時、自づからこの怖ろしい問題に對して解答を求め。吾々は果して再會の可能性を有つてゐるのか、別離は絶對に永久的なものかといふ疑問を、何うしても考へずには居られない。天帝即ち神てふものが現實に存在してゐるのであるか、自然が吾が心に與へた純潔な感情を無視して、不正や、罪惡が尙ほ人間の生涯を支配するものであるか。一體、この自然とは何であらうか。自然なるものに意思があらうか、目的があらうか。無限に小さい吾々の心の中に、大宇宙のそれよりも大きい智識、正義、至善、靈感があり得るのであらうか。この謎に關聯してそこに極めて多くの問題が存在してゐる。

吾々は結局死ぬのである。恁んな確かな豫言はない。この地球がもう百回太陽の周圍を廻つたなら、吾々の親愛な諸君は一人もこの世に残つて居ないのである。

自分と自分の愛する人々の爲めに、吾々は何故に死を恐れなければならぬのか。

「死の恐怖」とは愚かな言ひ分である。吾々は全く死んで了ふか、それとも墓場の彼方で生きて居るのか、いづれか一方が眞實である。若し全く死んで了ふのなら、死について何事も知る筈はない、感ずる道理はない。若し生き續けて行けるといふのなら、そこに始めて問題が生くる。研究の價値が認

められる譯である。

何時かは吾々の肉體の生命が絶える。そこに些の疑ひがない。その時肉體は幾百萬の分子に分解するであらう。そして、それ等の分子は他の植物、動物、人間などの組織に再び結合されるであらう。肉體の復活といふ事は最早今日では何人も信じ得ない教義である。吾々の思想、靈魂の本體が、物質的組織の壊滅した後も尙ほ残存するものならば、生命が永く続く事になるから眞とに喜ばしい事である。若しさうであるとすれば、吾々の意識的生活はこの世に於けるよりも更に優れた他の様式で繼續するであらう。何故かといふと、地球は吾々が直接研究の出来る唯一の惑星であつて、進化は地球の全歴史を通じて明かに示してゐる自然の法則である。故に、この意識的生活こそより以上に優れた至上の生活に相違ないからである。

この問題に關しマークス、アウレリウスは、「死とは何であるか。若し死を圍んでゐる多くの心象を去つて、死そのものだけを考へるならば、死とは唯だ、自然の經過である。自然の經過に涙を澱ぐ人は子供である」と述べてゐる。

フランシス、ベーコンも、「死の儀式は死そのものよりも遙かに恐ろしいものである」と言つて同じ様な考へを表はして居る。

又賢明な羅馬皇帝は、「眞の哲學は平靜な心を以て死を待ち、その来るや今まで構成してゐた諸要素の分解するのを見るだけである。これは自然の成行であつて、自然に従ふ事は決して忌避すべき事ではない」と書いてゐる。

けれども、エピクテツスや、マークス、アウレリウスや、アラビア人のストア哲學も、回々教徒も、佛教徒も、吾々の知らんと欲する問題に何等満足な明答を與へないのである。

自然が悪であるか、善であるかは素自から別問題である。

考への深い人は、自分を省みる時、「自分は一體何うなるのか、全く死滅して了ふのであらうか」と云ふ疑問を懷いて必ずその解決に苦しむ。

併し、恚うした考へは、兎角思想の定まらぬ人々の中に經驗さるゝ幼稚な空想であると認められて居つた。それは何等の理由なしに一概にさう決められてゐたのであつた。けれども、吾々には何うしてもさうは見えぬ。吾々はその所謂幼稚な空想の中にも確かに重大なある事實を認める。死滅して了ふと考へる事は悲しい。吾々は神の一部分である。萬有の中に尙ほ重要な位置を占めてゐると考へる。だが、天文學上の見地から言ふと吾々は問題にならぬ程微々たる價值のないものである。人間全體としてもさうである。吾々は今日に於ては、最早パスカル時代のやうな事は言へない。地球中心説

も、人類中心主義も、何等価値のないものになつた。原子は相續いて失はれ、無限に失はれてゆく。けれども、兎に角、吾々は現實に存在し、考へるのである。そして人間が考へることを始めて以來、引續いて同じ問題を考へて來た。その問題を解決せんとして種々の宗教が起つたのであるが、一つとして成功した宗教はない。

古い時代からの神秘は段々に變つて來た。そして、カルデア人、エジプト人、ギリシヤ人、ローマ人の時代から、中世紀の基督教徒の間に行はれた様な恐ろしい神律法が今尙ほ残つてゐるが、人に似た神や、人喰神は大概姿を隠して了つた。彼等の宗教も無くなつた。けれども、宗教上の大問題は依然として残つてゐる。それは靈魂不滅の條件の研究である。吾人は死と同時に消えて了ふのか、それとも引續いて存在してゐるのか。

フランシス、ベーコンは、ローゼル、ベーコンの様な天才ではないが、極めてポピュラーな有名な學者である。彼は「苟も人間の學問の領域に於ては觀察、經驗及び事實の決定的勝利は、學理に基く科學的實驗の基礎の上に正しく確立さるべきものである」と豫言したのである。彼は斯かる立派な説を持つてゐたに拘らず、唯だ神の事、超自然の事になると、何もかも絶対不可侵の領域としてこれを宗教的權威と信仰の手に委ねて了つたのは彼としては餘りに卑屈の態度であつた。今日ですら相當教

養のある人々の中にも斯の種の考へを固執する者がある。何事でも實驗に提供し得ないといふ理由はない。吾々は學んだ事以外には何んな事も知らない。若し神がそれ等の問題を自己の領分内の事と自負するのが誤つた伴り事だとすれば、科學も亦その諸問題を何の價値なきものであり、神秘なものであると決めて、何等研究の態度に出る事をしないと云ふのも同じく誤つた考へである。

事實、靈魂不滅の問題は未だ積極的に解決されてない許りでなく、屢々虚偽の手段に利用された位で、消極的にも解答を與へられてないのである。

吾々は兎もすれば、死んだ後のスフィンクスの謎は神秘的な事であつて、人間の心は到底この領域に突入る能力はないのだと信じて了ふ傾向があつた。然もこの問題は吾々の生活と最も密接の關係を有つてゐる事である。吾々は何うしても自分の運命に極めて深刻な興味を有する。

研究の力は偉大なものである。死の神秘は從來の考へよりも、やゝ明瞭になつて來た。吾々の更に進むべき光明が前途に見えて來た。五十年前には少しも知られてなかつた或る實驗に依て、吾々の心眼に判然と映つて來た。

天文學上の研究と靈魂の研究とが互に聯絡してゐると云ふ事は何も不可思議な事ではない。物理學的の世界と精神的の世界とは一つである。天文學は常に宗教に關係して居つた。昔の科學が不確實な外

象に基礎を置いたのは間違つてゐた。誤つた昔の信念はそれから生れた結果であつて、神學上の天は即ち天文學上の天である。神の罰は直ちに天から受くるものだと思つてゐたのである。精純な學者の義務は、忠實に眞理を探索する上に存する。

議論の自由な時代には、科學の研究は完全に獨立して、公平に、そして慎重にある問題を取扱ふ事が出来るが、宗教裁判の行はれたかの頑迷な時代に在つては、自由思想を研究した學者は悉く斷頭臺に上げられた。何千と云ふ人々はその思想の爲めに生きながら焚刑に處せられた。羅馬ですらジョルダノ、ブルノーの像は當年の殘虐を偲ばせる。そして又、フローレンスのサボナローヤ、巴里のエチエヌ、ドレーの事を考へると吾人は今尙宗教の頑迷に恐怖と戰慄とを禁じ得ないのである。斯くしてヴァニニもツウルーズで焼殺された、ミケル、セルヴェツスもジュネバでカルヴンの爲めに火炙りにされた。

それは一面から観ると吾々全體が無智であつたのである。事實、有ゆる研究者は箝口されてゐたので、心靈科學の如き實際生活と離るべからざる研究さへ出来なかつた。人々は地球上に住んでゐながら、自分の存在してゐる所も又その意義も知らず、又、不思議に考へる人もなかつた。彼等は唯だ、飲んで、喰つて、眠て繁殖する鳥獸と擇ぶ所がなかつた。彼等の覺むるのはたゞ金錢だけであつた。

予は今日まで、人類の總ての階級、凡ての國々に向つて天文學の基礎的知識の普及に努めて來た。そして彼等の中に自分の棲んで居る世界を理解することに興味を有つてゐる人が何の位居るか、又宇宙萬物創造の事實に關して何れ位の基礎的觀念を有つてゐるかといふ事を調べて見た。その結果、地球上に住む十六億の人の中、約百萬の人が斯の種の興味を有つてゐる事、即ち天文學的の書物を好んで讀む人である事を確めた。そして特に科學に親しみ、常にこの種の新刊書を読んで世界の新發見に注意を拂つてゐる人が約五萬を算する。その中六千人は佛蘭西人である。

そこで、自己の住んで居るこの世界を漠然と知つてゐる人が千六百人に一人、本當に理解してゐる人が十六萬人に一人の割合になる。

今日、宗教學校でも、普通の學校でも、小學校から大學までの天文學上の教育は、殆んど顧みられないと言つてもよい。實證心靈學もさうである。世界人類の一般的無智は猿から生れた時代からの傳統的法則である。

要するに、人類は地球上に於ける悲惨な生活條件、衣食住、それに伴ふ物質的生存條件の過重な負擔に捉へられて、哲學に興味を感じる邊がなかつたといふ事は何等辨解の餘地はない。けれども、又、一方から觀ると、斯様な状態は人々が好んで自らつくつたのである。多くの男女が無益な娛樂に

耽つたり、滿らぬ新聞や、小説を讀んだり、歌留多に日を暮したり、他人の事に要らぬ世話を焼いたり、聖書の譬ひにある様に、己が眼の梁を知らずに人の眼の塵を苦にする所謂身の程知らずな眞似をして見たり、物好きに政治に手を出したり、教會や劇場を遊び廻つたり、贅澤品屋に詰めきつたり。洋服屋や帽子屋を困らせたりすることの出来る無要の時間を有つてゐるからである。

一般的無智は所謂利己主義と云ふ悲惨な個人主義の結果である。靈的生活の必要は殆んど何人にも感ぜられてなかつた。偶まそんな事を考へる人があればそれは寧ろ例外とされて來た。若しこの靈的生活の研究が夙に吾々の興味を惹き、地球上に於ける吾人の意義を教へて居たならば、人は進んでこの研究に没頭してゐたであらう。實際吾々の人間としての生活は極めて曖昧なものと思はれる。

地球上の人々は尙ほ無智である。未だに獸的である。現在ですから權勢が正義となつたり、武力が正義を支へたりしてゐる。各國の政治家の主腦は陸軍大臣で、國帑の十分の九は時々行はれる國際的屠殺に使はれる。それは皆國民が奉納するのである。

而も死は尙ほ人間の運命を支配する。

死は實際の王者である。その王權が先年のやうな兇惡野蠻な暴威を振つた事は史上嘗て例を見ない。死は幾百萬の生命を戰場に奪つた。死の王者は如何にして斯かる多數の運命を死に導いたのか。吾人

の研究せんとするのはこの最後の死に就てゐる。これは吾々の最も注意に値する大問題である。

本書の目的は「生命永續の明確な證據を得る」に在る。従て文學的論文でも、詩句でも、又人を蕩心せしむるやうな學說でも假說でもない。唯だ、觀察に依る事實と、その論理的演繹から生れた結果である。

吾々は全然死滅して了ふのであるか、それは疑問である。然らば死後に残る何物かあるのか。人は子孫が續く、事業が永久に遺る。それが即ち靈魂不滅だなど、途方もない事を言つたり、さう信じてゐる人もあるが、そんな事は單なる冗談に過ぎない。若し吾々が全然死滅して了ふのなら、吾々の折角努力して來た事業は何んにもならない結果になる。そして地球も終りに近づき、人類も纏て絶滅して了ふ。斯くして有らぬものは破壊されて了ふ事になる。

靈魂は肉躰よりも更に生殘るか如何かを知る爲めには、先づ肉體的組織から獨立して、靈魂それ自身の存在を確めなければならぬ。そして、明確な觀察による科學的基礎の上にそれを立証しなければならぬ。今日まですべての時代の神學者達が麗はしい語句や、實體學上の議論でお茶を濁して來た様な事柄は吾人に取つては一顧の價値もない。そして、最初に誤つて一般に承入れられて、それが習慣的に、又傳統的に教へられて來た生理學上の學說の不完全であつた事も深く考慮しなければならぬ。

第二章 唯物論——不合理な學說

吾々は外觀に誑かされてはならぬ

(コハルニクス)

オーギスト、コムトの實證哲學と、その宇宙から天文學、生物學と移つて行く彼の正しい分類法は誰でも知つて居る。又、コムトの後繼者リットレーの事も知つて居る。彼の辭書は大概の圖書館に備付けられてある。彼の著書は到る所に行き涉つて居る。予は又、直接に彼の人格を知つて居る。彼は卓越した學者である。優秀な百科辭典である。そして奥行のある思索家である。そして彼は立派な唯物論者で、無神論者である。けれども、彼の容貌は彼の心の美しさと正に反比例してゐる。彼の顔を見ては誰でも人間の祖先が慥かに猿だと首肯せざるを得ない。彼は稀に見る高尚な、そして寛裕な心の持主であるが、彼の夫人も亦極めて敬虔な信仰家であつた。彼は日曜毎にサンシユルピスへ彌撒に

行く夫人を送つて行くが、それは彼の善良なそして親切な心からで、自身は決して教會の中には這入らなかつた。彼の後繼者である同じく無神論者であり、唯物論者であつたル、ダンテクも、リットレーに劣らぬ立派なそして善良な人であつたが、教會の儀式を以て葬られた。それは彼にとつては實に氣の毒な事であるが、信心家である彼の夫人を苦しめない爲めであつたといふ。理屈は抜きにして、そこに夫婦のこまやかな温情が見られる。婦人はよろしく生涯の伴侶として斯様な夫を擇ぶべきである。彼の「牧師の反對者」であつたジュール、スーリーも同様に牧師等の禮拜式の下に葬られた。この世には眞の論理はない。主義は必ずしもその行爲を支配するものではない。舊教徒であると自稱する者が大の虚言者であつたり、掠奪者であつたりする。唯物論者で極めて品性の高潔な人もある。予は又、偉い學者であつたエルネスト、ルナンは彼の誠實な心からすべての偽善から免れる爲めに、彼が神學研究の結果贏ち得た僧職を抛つた事もよく知つて居る。

これ等の優れた人々の誠實な意見は最も吾人の尊敬に値するのであるが、殊に彼等は他人の意見に傾聽したその宏量に對しても吾人は大に敬意を表さなければならぬ。併し、彼等の意見には吾人の何うしても首肯し得ないものもある。彼等とても何處までもそれを固執してゐるのではない。

予は茲に、リットレーの著書「哲學の見地より觀た科學」に就て少しく研究して見やうと思ふ。吾

人は彼の此の著書を以て、その競争者であるテーヌの説と同様に近代の唯物論的主張の基礎として採る。唯だ、その説に直面することを恐れてはならない。牛の角を捕へることを怖れてはならぬ。

リットレーの著書中、心靈生理學の章に次のやうな事が書いてある。

「既に心靈生理學なる語からして恐らく奇異の感を與へる事と思ふ。それは智的及び道德的能力の研究を意味する普通の心理學と云ふ言葉を用ひた方が可かつたのかも知れない。併し、自分は今まで、心靈生理學と云ふ名稱を何回となく使つて來た。又、それが一般に廣く使用されてゐるので、最早、殊更ら疑義を起す様な曖昧な文字でもなからうと思ふから、引續き此の儘使用して行く考へである。

この語の語源 *psyché* といふ語は、寧ろ形而上學や、神學に適合した言葉であることは事實である。併し乍ら、心靈といふ言葉に「智的及び道德的能力の總體」といふ意味を持たせると、心靈生理學といふ事も言へる譯である。尤も恁んな長い複雑した文句は大抵の場合、適當な簡単な言葉に代へる方が可いのである。

それは然うと、一體心理學なる語は、その用ひ始めた時からして然うではあるが、現在でも神經といふ物質から全く離して考へられた心の學問を意味してゐるのであるから、予はある學問だ

けに特殊な言ひ方を以て、實驗科學の本旨に叛く様な言ひ表し方の言葉を用ひたくはないのである。そして又、用ふべきではないと思ふ。實證的な科學では、人は如何なる性質でも物質に依らないで認識することは出来ない。それは先驗的に獨立した靈的實體などがないといふ先入觀がある爲めではない。寧ろ後驗的に、物質に重さがあつて重力が表はれる、暖かい物體を離れて熱がない。結合せられ得る物質なしに化學的親和力がない。生きた感情と考へるもの、存在しない限り生命がない、感情がない、思想がないといふ理由からである。

本書に生理學と題した事に就て、一寸辯解して置くが、予は初め腦生理學と名づけやうかとも思つて見た。けれども、この題目では予が本書に期した事柄より以上の事に涉るのを惧れたからである。即ち予が本書に取扱はない働きにも腦は皆作用してゐるのである。予は茲には腦の働きの中で、「外界及び予自身に就ての觀念に影響する多くの印象を生ずる」もの、範圍に限つて研究したいと思ふのである。

予が心靈生理學といふ名稱を選んだのは、心理的なる語は「感情と觀念に關する」といふ意味であつて、生理學は即ち頭腦の構造と機能に關係せる感情と觀念との構成と結合の意である。これは敢て科學に新名稱を用ひ様とする銜氣に出たのではない。一は予の著書の題目に明瞭な輪廓

を與へん爲めと、一は讀者達に向て、心靈現象とその連絡及び關係の工合に就ての記述は純粹の心理學に屬する問題で、本書の目的は「ある働きとその結果の研究」に在ると云ふ事を銘記して貰ひたい爲めである。心理學が生得觀念說、殊にロック派心理學を避ける程、益々生理學に接近して來るのである。生理學が自己の範疇を驗べて見たら、假令心理學が高尙な思索に耽る者は俺等の仲間から破門するぞと威嚇したところで仕方がないのである。今日では智的及び道德的現象は神經組織の現象である事、又、人類は何等明瞭に區劃された境目なしに、最小の動物まで擴がつてゐる連環であると云ふ事實には、もはや疑ふ餘地がない。そして、如何なる名の下にそれが働かうとも、叙述、觀察、及び實驗で行く限りは吾々は生理學者である。予は生理學といふも感情や、觀念に關する限り如何なる立派な説も重要な要素として承け入れないと云ふ様な偏狹な生理學を認め得ないのである』と

以上は唯物論的心靈哲學の基礎である。

私は讀者に向て、この論旨を充分に考量されん事を望む。そこで、重さを有する物質なしには重力がない。暖い物體なければ熱がない帶電體あつて始めて電氣が通ずる、結合せられ得る物質なしには化學的親和力が表はれない。そして考へるものの存在しなければ、生命、感情、思想を見出されない。

この論法で行くと、吾々は心靈の存在を承認しなくても可いかも知れない。

然し、この種の論法は「性質」なる語の用ひ方に依るのであつて、同時に次の様な疑問が起る。

思想を以て重力や、熱や、物體の機械的、物理的、及び化學的の親和力に較べる事は、正に相反した二つの物を對照する事であつて、それは心と物との比較である。

人間の意思は子供の時分でさへ人格的である、意識的である。然るに重さ、熱、光、電氣は人格を有たぬ。意識を有たぬ。それは不可避的な、盲目的な、そして自然的な物質的條件の結果である。兩者は恰も晝と夜との違ひである。

科學的の推理自らが屢々根本的な誤りを惹起することがある。例へば熱は必ずしも暖き物體から生ずるのではない。溫度を有つてない運動が熱を作り出す事が出来る。熱は運動で出來たものである。光も亦運動の結果である。電氣の性質は未だ分らない。といふのである。

予は實驗派の首腦にして有名なリットレーが何故に斯かる推理で満足してゐたかを疑ふ。これが單に言葉の遊戯であつて、何等疑問にも何にもならない説であるといふ事に氣が付かなかつたとは、何うしても理解が出来ない。要するに斯様な説に「性質」なる語を弄んだものである。吾々が最初に實證的に證明しなければならぬ事は思想は神經體の所有に係るもので、原理としては矛盾する様に思

はれるが「無意識が意識を創造する」といふ事である。

四四

吾々は木片と、大理石や、金属の破片を比較する様な事はしない。けれども、精神、思想、自由についての情操、善、意思等と、有機的の機能とを精密に對照して見る。テーパーは肝臓が胆汁を分泌する様に、頭脳から思想を作り出すのであると言つた。併し、これは彼の如き理智の人にして尙議論の方向を、先づ豫め自分で決定して、而も夫れを彼の神學者達に劣らぬ盲目さを以て頭からさう決めて掛つた議論ではあるまいか。そして、先入觀念、又は體系的確信に陥つた非科學的な考へ方ではないか。

吾人は研究の著手に當つて、始めから言葉に容易く満足しない様にする事が大切である。一體、物質とは何であるか。一般の考に依ると、それは感覺に依て認識し得る物、見る事、觸れる事、秤る事を得る物である。けれども、人間の中には見る事も、觸れる事もそして秤ることも全然出来ないものがある。人間には物質的の感覺から全く獨立した要素、即ち、考へる、欲する、動く、そして眼なくして物を見、耳なくして聴き、未來を豫想し、未知の事を知覺し、遠隔の地に於ても現はれる人格的、神靈的の原質がある。この眼に見えない、秤る事の出来ない不可解の靈的要素を以て、直ちに腦の本質的作用であると考へるのは何等證明のない空虚な宣言である。それは鹽から砂糖が出来るとか、魚

が地上にも棲む事が出来るかと考へると同様に自己撞着した論法である。吾々は茲に、實際の觀察、即ち實驗した事實の觀察に依つて、人間が種々の本質的能力を有つてゐるばかりでなく、動物的有機體と異つた能力を有つてゐる靈的物體である事を立證しやうと思ふ。そして又、この事實の觀察から、リットレー、ル、ダントテ其他知名の唯物主義派の學者達の用ひたと同一方法に依て、本筋から離れた奇怪な口先き許りの議論を排斥せんとするのである。

コムト、リットレー、ベルテロー等の卓越した思索家ですら、眞實は實際不完全な、そして狭い吾々の感覺の範圍内のみ限られてゐるものである事を、果して想像し得たであらうか。恐らく魚は水の外には何物も無いと信じてゐる事であらう。犬は人の様に視力によらないで嗅覺に依て、感覺印象の分類をする。殊に傳書鳩はその方向を知る感覺が鋭敏である。蟻は觸角に依て外部との接觸を感知するのである。

精神は肉體を支配する。原子が支配するのではない。支配されるのである。この理論は全宇宙——空間に在つて互に引力に依て影響を受けてゐる諸々の世界から、動物植物に至るまで適用される。木の葉は造られるのである。卵は生み出されて後に孵化するのである。この作る事はその性質に於て既に智的である。

四五

普遍的精神は凡ゆるものに在る。それは全世界に充滿してゐる。この精神は腦の介在を必要としてゐない。眼と視力との間の、并に耳と聽力との間の機械的關係は視官と聽官が智的に構造されてあるものと推定しなければ、それを解剖する事は全然出來ない。この結論は植物、動物及び人間の受胎作用の解剖から更に一層明確に立證されるのである。これを人間の場合に見ると、先づ卵子が受精する。それが段々に發育する。そして母の胎盤に依て胎兒が育つて行く、母は妊娠より有機的變化を起して乳が出るやうになる。それから子供が生れる。生れた子は養育されて漸次肉體的にも、心理的にも發達して來る。かくして一箇の人間になるのである、この發達の順序はあらゆる物を組織する順序である。廣大無邊の宇宙に存在する恒星や、惑星の組織も、要するにこの微小分子の組織と同じ法則の下に支配されてゐるのであつて、そこに智的支配力の存在は拒む可らざる事實である事を示すのである。併も、精神は腦から來るのではない。若し神が人間を神の姿に造つたものなら、人間は既にお禮を返した譯である。若し金龜子こがねむしが自分を創造者の姿であると想像したならば、彼等は自分を最も偉いものに思つてゐるに相違ない。事實、ヘブライ人や、基督教徒や、回教徒や、佛教徒の想像した人間に似た神は存在してはないのだ。父なる神とか、エホバとか、ジュピターとかは唯だ象徴的の言葉に過ぎないのである。

人の發生が生理學上の見地から立派に組織立てゐるとしても、神たる母性の見地から觀ると甚だ不完全なものである。何故に子の爲めに獨り母のみに澤山の苦しみがあるのか、何故にあの様な恐ろしい最後の苦痛を與へるのか。教會ではそれ等はイザの罪の罰だと教へてゐる。何んといふ莫迦氣た事であらう。アダムとイヴは嘗て本當に在つた人か、女の動物は凡べてこの苦しみを有つてゐるではないか。自然は女の妊娠中の苦しみや、分娩の残酷な苦しみに対して毫も顧着しない。それは疑もなく感受性の缺陷である。神は決して生物に對して優しくも慈悲深くもないものだ。産婆の方がまだ親切である。吾々は何うしても神を理解する事は出來ない。澤山の證據は悉くそれを示して居る。そして又、吾々の精神のまだ下劣な事を證明してゐる。

精神、智、心的要求等はすべての物にある事は否定出來ない。實驗科學は全宇宙の現象が結局物質と運動の二元論、若くは物質とその性質の一元論に歸する時に行き詰つて了ふ。然るに博物學、植物學、動物生理學、人類學の場合に於ては、物質とその運動以外に、それ等と遙かに異なつた一要素が認められる。それは生命である。生理學者クロード、ベルナードは生命は物質分子の產物ではないと吾々に教へてゐるではないか。更に又、宇宙は自づから力本説を吾々に啓示して居る。即ち原子それ自身が運動を具へてゐるからである。この原動力はあらゆる物質や、人間を組織してゐるので、物質

界にのみ限られてゐるのではない。

『五六年前、予はセンナンに住むヘンリー、フエーバーといふ自然科学者を知つた。彼は最も人格の高い、忠實な學者で、久しい間自から昆虫の生命に就て研究し、極めて不思議な事實を發見したのである。彼の著者「昆虫學の思ひ出」は十卷から成つてゐるもので、殊に彼の死後に於て廣く讀まれた本であるが、それに依ると、昆虫にも微生物にも皆その性質の中に魂を有つてゐるといふのである。例へばスヘックスと云ふ膜翅類の昆虫の一種に砂地に數箇の穴を掘る。そして殺さずに單に薄痺させたる生物をその穴に貯へる。然る後、一つ一つの穴に卵を生む。そこで、犠牲になつた生物は、生きたまゝ、幼虫に食はれてゐる間、ちつとして動けない様にして置かれる。幼虫に取りては新鮮な餌である。子の育つ方法は母虫が悉く豫知して居る。けれども母虫自身ではその事に就ては何にも理解してゐないので、つまり、彼等は凡べて豫知的本能を多分に有つてゐるのである』と。

心理學者ベルグソンは思想を腦の働きとする學說や、又は腦の働きと思想とは並行した等しいものであると見てゐる學說は妥當ではないと言つた。吾々も亦ベルグソンに共鳴する。この學說を唱へる者は、記憶はある種の解剖學的要素に印象されて、それがあつた形となつて腦に蓄積されて居るので、忘れると云ふのは記憶が刻まれて居つた解剖學的要素に損傷を生ずるか又破壊された結果である。そし

て此等の外的對象から作られた印象は感光した乾板又はフィルムの様になつて腦に存在してゐるのだと云ふのである。併しこれは極めて皮相的な比喩である。何故かといふと、若しある對象の視像がその對象に依て腦に刻まれた印象であるとすれば、そこに何千萬と云ふ視像がある譯である。即ち最も簡単な、そして不動な對象でもそれを認識する位置に依て、その形状、その容積、その色彩等を異にするからである。自身が見てゐる間に絶対の不變性を留保された場合、又は自己の眼が少くともその軌道から絶対に逸れずゐるのでなければ、紛らす事の出来ない無數の像が後から後からと續いて自己の網膜に映じて、腦に傳達されるのである。常に人相がよく變り、身體がよく動き、そして衣服や、周囲の模様が會ふ毎によく異なる様な人の視像は如何なる印象を腦に傳達するであらうか。併し、吾々の最初の意識は尙ほ唯一獨特の像、殆んど唯一の像を留保してゐる事は否定出来ない。そして此の物體又は人の不變な像は取りも直さず單なる機械的記述の他にこれとは全く違つた事が起つたことを裏書してゐるのである。聽官の記憶の場合も亦、これと同一であると言ひ得る。異つた人に依て話された同じ言葉、又は同じ人に依て異つた時、違つた文章で述べられた同じ言葉は正確に同一音像を與へる事はない。記憶と寫眞とは全然比較にはならない。單にこの考へからしても言葉の記憶の薄くなるのは、腦の表面に解剖學的に記録された記憶自身の損傷又は破壊に歸する學說に充分の疑義が存

する。

五〇

更にベルグソンの著書によつて病氣中に起る現象をも研究して見やう。

『腦に著しい異状があつて、言葉の記憶が甚しく損ぜられてある時でも、濃い情緒のやうな多少深みのある刺戟に依て、嘗て失はれてゐた記憶を呼び戻す事が屢々ある。若し記憶が腦中に宿つてゐるもので、その腦が損ぜられ、又は破壊されたとしたら果して記憶を呼び戻すことが出来るであらうか。斯様な事實が屢々起ることから見ても、腦は唯だ記憶を呼び戻す役をするだけで、記憶を貯へる所ではないやうに思はる。失語症の患者は自己の意思を表はさんとする言葉を忘れてゐる。彼はその言葉の周りをぐる／＼廻つてゐるのであつて、その欲する言葉を指すに必要なある力が缺けてゐる様に見える。實際、心理學の方では此の力の外的記號を精密に表はされてある。けれども此の場合に於ても記憶は依然存在してゐる様に思はれる。それは失はれたと思はれる言葉と同じ意義の他の多くの言葉を代用すると、その患者はその中の欲した言葉にうまく滑り込む事が出来るからである。

次に、漸進性失語症、即ち段々に言葉を思ひ出す事が困難になつて行く場合に就て考察して見る。この場合には恰も病氣其の物に文法がある様に、言葉が概して規則正しい順序で消えて行くのである。最初に固有名詞を忘れる、次に普通名詞、形容詞と消え去り、最後に動詞さへ忘れて了ふ。それは段層を成してゐる言葉を、疾病が順々に崩して行くもの、様に思はれる。併し、この病氣は種々の原因から起り、様々の形を取つて腦の胃された部分のある點に現はれ、そして方向に關係なく進むのである。それでも、色々の記憶の消失する順序は同じである。若し假りに病氣が直接に記憶を犯してゐるものとすれば、右の様な現象が果して生じ得るであらうか。

然らば記憶が腦に蓄積されて居るのでないとすると、それは一體何處に貯へられてゐるのか、これに就ては肉體以外の他の物の事を取扱ふ場合に素自らこの「何處」の問題に論及するであらうが、寫眞の乾板は箱の中に貯へられ、蓄音機のレコードはラックの中に藏つて置かれる。けれども、眼に見えない漠然とした記憶といふものにも矢張容器いれものが要るのか、何うして夫れがなければならぬのか、記憶は心以外の何處かに存在するのか。けれども人間の精神とは意識それ自身に外ならない。そして意識は先づ第一に記憶を意味する』と。

吾々は茲に、卓越した思索家と共に、すべての事物は、肉體が單に精神に依て使役されてゐると思ふ様に働くものであると云ひ得る。この場合、吾々は肉體と精神とは絶対に離る可らざるもの、同一なものであると想像し得る理由は更にないのである。

五一

働く脳と、感じる、考へる、希望する意識とは別々に存在する。若し脳の働きが意識の全體に相當してゐるものならば、そして又、脳と精神とが等値のものであるならば、意識は脳と運命を共にして、死と共にすべての働きは終つて了まふ筈である。尠くとも經驗はこれに反對し得る何等有力な證據を示してゐない。況して吾々の死後尙ほ存する事を主張する哲學すらも、形而上學の極めて薄弱な基礎の上にこの重大な題目を並べ立て、却て自らその價値を貶してゐるのである。けれども、若し精神生活が肉體的生活を超越してゐるものならば、そして又脳が意識内に起つたものゝ幾小部分を運動に形を變へるだけであるとすればそこに死後の生活は最も可能性を有する事になり、その證明の困難はそれを主張するものよりも、反てそれを否定する者にかゝつて來るといふ妙な結果になる。吾々が死と共に意識も消滅するのではないかと思つて見たのも、唯だ肉體が崩壊すると云ふ事實からの事で、若し意識は少くとも部分的に肉體から獨立してゐると云ふ事が、經驗に依て實際であるとすれば、肉體の破壊と共に意識が消滅するといふ事は何等理由のない考へである。

心理學者ベルグソンは精神の働きについての概念と組織、その計畫と遂行の全體に亘つて立派に認めて居り、その上特に睿智に關する専門的の著書を出して居る人である。而も斯程まで深く考へて居る人にして尙ほ哲學書を構成する物質分子の結合したものゝ分泌の結果から生れたのであると考へてゐる。

るのは、吾々には何うしても解せないのである。個人的智力の働きは既に事實に於て明かである。そこに論議の餘地はない。若し強てその働きを掩はんとせば、眞しやかな、そして、あの組織的な自己暗示に俟つより外はない。

脳は疑ひもなく思想器官である事に於ては何人も異議はない。けれども、以前信ぜられてゐた事と矛盾するのは脳の全部が思想又は生命に必要なものではないといふ點である。

前に述べた記憶の混亂に就て引用した諸例の外に茲にも同じ結論に到着する面白い二、三の例がある。

博學な予の友人エドモンド、ペリエは一九一三年十二月二十二日、科學協會での講演中にロビンソン博士の觀察をも紹介して居る。それは脳が軟塊になつて了つて、全く化濃した腫物に過ぎない状態をなしてゐても、殆んど一年の間は何の苦痛も感ぜず、精神的異狀も表はさずに生活して居つた人に就ての研究であつた。一九一四年七月にはハロポー博士が、ネツケル病院で、或二人の少女に行つた手術の結果を外科學會へ報告されたが、その少女はメトロポリタン鐵道から落ちたのであつて、頭蓋骨を切開した時には、脳の大部分は本當に軟塊になつて了つてゐたのを確めた。そこで、患部を清め、水分を去つて再び傷口を塞いだ。少女はそれで全く癒つて何の異狀もなかつた。一九一七年三月

二十四日には科學協會に於てゲバン博士は負傷兵の手術で腦の部分的截除が少しも智的の働きに故障を及ぼさない事を示した。その他、腦の僅かな部分が残つてゐて、而も精神は依然として完全であつた場合もある。實際、この種の例を擧げると幾らもある。解剖學者が手術した場合、メスの先に靈魂を見出し得ないとすれば、そこに靈魂が存在しないからである。醫者や生理學者が腦そのもの、性質以外に何等靈的能力を認めないと言へば、それは彼等が自己を欺いてゐるのである。人間の中には腦の灰色、又は白色をした物質以外に或るものが存在するのである。

思考の能力は一般に腦の條件による様に思はれるのであつて、その能力は腦と同様に、年を経るに従つて漸次に弱くなつて行くとする説には吾々は反對する。漸次力を失ふといふのは器械である肉體の事で、精神ではないのであるまいか。偉大な精神勞働者の中には死の間際までも、心神が極めて完全な状態の下に働いてゐるものがある。今日の人々は巴里のヴィクトル、ユーゴー、ラマルテ、ルギー、等の文學家、テイエール、ミネー、アンリー、マルタン等の歴史家、そして又、バルテルミ、サン、レール（一八〇五——九五）又はシエヴルイユ（一七八六——一八八九）の様な學者を知つて居る。彼等は皆、非常な老年に至るまで青年時代の如き頗る健全な精神を持つて居つた。思考する人、或る生理學者達は長い間この名稱の下に人類を定義してゐたのである。然うである。

水素、炭素、窒素、酸素などの諸元素の分子が化學的結合したからとて、それが物を考へると云ふ事が果して有り得るのであらうか。

生物學は極く最近の科學である。宿命論的生物學は一種の哲學になつた。此の哲學の領域は心靈的現象は生理的反應の結果であるとして考へるのである。けれども、この生理學的説明は單なる比喩的の言葉に過ぎない。それから推してもこの哲學の價値が窺はれる。人々は言葉の發明を偉大な發見の様
様に思ひ、假設的の叙述を本當の説明だと見てゐるのである。

筋肉運動の純物理化學的起原に就て最近の發見があつても、感覺と生命の原理とは、今日も昔と同様に依然神秘なものとして残されてゐる。けれども、生理學的現象と相並んで、又はその上に、活氣のある、そして自治力を有つてゐる智的原理の存在——この存在を認めて始めて何物も容易に説明され、理解され得る——するといふ事は何人も否めない事實である。

予は前に最もありふれた常識の靈魂表示に就ての例を引用して置いたが、これを以下各章に涉つて代表的に掲ぐる顯著な例に比べると頗る薄弱なものであつたと云ふ事を、特に茲に斷つて置く。

醫學上の見地から考察しても、單にその肉體組織だけでなく、智的原理の方面に對する注意も亦極めて必要な事で、非常に有利な結果を齎すのである。實際、藥で治療する事の出来ない病人が、心理

的療法で癒つた例が幾らもある。催眠術や、暗示による治療法がそれである。又、エピダウルスの殿堂や、エスキュラピウス（希臘の醫の神）崇拜時代から、ラウルデスとその敵手の時代まで、所謂宗教的信仰の奇蹟と稱へる治療法があつた。彼のホモエオパチー療法の如何はしい數粒の丸薬が兎に角ある種の病疾に奇功を奏したではないか。信念は山をも動かすのである。

精神は肉體ではない。それは肉體から出るのではない。肉體と精神とは全然別な物である。人の意思は各個人によつて認識される。意思の善惡、犠牲の精神、勇敢な性格、苦難に對する耐忍力、そして又、かの殉教者達が残酷な拷問に屈せざる強い意思、反抗、信仰、美德と罪惡、友情と憎惡、慈悲と嫉妬——これ等の心理的現象を觀じ來ると、心靈が全く腦から獨立してゐる事の明かな証據ではあるまいか。

世間には物事に就て少しも考へる事をしない人がある。吾々は卒に斯様な人に會ふ。併し、多少考へる一般の人々は飲む事、食ふ事、女の機嫌を取る事より外に、更にもつと重大な或るものが存在してゐる事を知つて居る。彼等は一寸考へて儚かないと感ぜられる世界が、さう果敢なく終るものではない。この世には混亂した影の外には何ものも見事が出来ないが、而かも永遠に自分の生命を托すべき世界のあるべきを、臆氣に想像して居る。そして彼等は一様にその世界に憧れてゐるので、有ら

ゆる宗教は彼等のこの感情を満足させやうと試みたのである。

若し、人體とその自然的機能を解剖して見たなら、肉體が五官に色々な魅力を與へる事は事實であるが、單にその實質だけを考量する時、概してそれは存外つまらぬ物である事を必ず認める。肉體の眞の貴さは、それに宿つてゐる精神、感情、睿智、藝術及科學に對する尊重の念に在る。人の價値は短かい、脆い肉體にあるのではない。自己を表現する心靈——永遠に生きて行くこの生命にあるのである。

更に又、肉體は生氣のない物質ではない。器械人形ではない。生きた有機物である。生物、人間、動物、植物の構成を考へる時、そこに何うしても原子を支配する創造の力、智的原理の存在を認めない譯にはゆかぬ。若し、單に指導のない物質分子の集合したものであるならば、世界は決して進歩してゐない。混沌たる状態が無限に繼續する。そしてその間に何等數學的法則もなく、宇宙の秩序を維持してゆく法則もなかつたであらう。

宇宙機關論者の説に依ると、すべての物は何の意識なく必然的に結合した結果に過ぎない。創造は智的無であつて、その智的無は一時何物かを示して、そして結局單なる考へに終らしむるのであると云ふ。吾々はこれ以上滑稽な、そして吾々の觀察と矛盾した假説を想像する事が出来やうか。

神秘的な自然はすべての物に精神を與へた。併も、自然の中にも悪を含んで居る。若い少女は自分の心を引きつけて自分の妻となつた。彼女は獨りで自分の美しい身體を苦しめた。彼女は人類の絶滅を防ぐ爲めの犠牲となつて、母性としての苦痛を体験した。そして彼女はそこから彼女の幸福を見出さんとしてゐるのである。彼女が妻となるべく自分に寄せた最初の媚は果して何を意味するか。媚とは何んであるか、愛とは何、嬉しい誘惑とは何、心の苦しみとは何、感情とは何、自然の無聲な言葉は明瞭に自分に聞えないものか。二匹の鳥が巢を造るとは何のことか、巢に就て居る母鳥が、轉て父鳥となるべき鳥に養はれてゐるのは何んであらうか。親鳥が巢立つた許りの雛の口に餌を運んで來るのは何事を物語つてゐるのか。牝雞と雛との關係とは一體何んな事であるのか。讀者は卵の中の又は胎兒の心臓の最初の鼓動について考へた事があるか、花の受精を解剖した事があるか。若しそれ等の中に自然に説明されてゐる秩序、意思、計畫、一般的目的、究極性やすべての支配力を有する心に考へつかないならば、そして又、生命の中に世界の組織の至高の目的を發見しないならば、それは白晝太陽を見逃したのと同然であらう。

この神秘的な力は何處に吾々を導いて行く。吾々は何んにも知らない。生命がこの法則を吾々に課す限り、吾々の住む惑星は一時間十萬七千吉米の速力を以て、空間の中を通つて吾人を運んで行く。そ

して其の惑星も亦世界の組織を支配する力と十四種の運動に翫ばされてゐるのである。吾々は又太陽の百萬分の一の容積に過ぎない原子の上に棲むところの考へる原子である。それ程太陽は大きい。然かもその大きな太陽も亦、更に更に巨大な星雲の中の一原子に過ぎない。そしてその星雲も亦他の無数の宇宙に包圍されてゐる一つの宇宙である。絶對無限の廣大、驚くべき膨大な運動、そして想像も及ばぬこの迅い速度！

力は原子に固着してゐるもの様に思はれる。何故かといふと、何處にも運動し得ない原子はないからである。自ら支配力を有つてゐない生物は生活する事は出來ない。恰も廢棄された建物の様に自滅して行く。

ルナンとその親友のベルテローとは、吾々に最も興味のある問題に就てよく議論した。兩人は感情に於て多少の相違があつたが、共に未來の生命に何の希望も有たずに死んだのである。一八九二年八月二日、ベルテローは日に病衰してゆくルナン（一ヶ月後に死んだ）に手紙を送つて、「吾々は孫の成長を見て自分等を慰めやうではないか。それは吾々が科學を以て確め得る吾々の唯一の生存である」と言つた。これから考へても、その精神に於て絶對的の否定を意味してはゐない。そして耶蘇傳の著者ルナンの或る思想と相通じてゐる所がある。

その前日の七月二十日に、ルナンはベルテローに次の手紙を送つた。(一八九八年巴里發行「ルナンとベルテローとの通信」より)

『吾々の生涯中の最も重大な行爲は死である。吾々は一般に嫌忌すべき境遇の下にこの行爲を果たすのである。けれども、幻影を以て吾人を欺く事を要しない吾々の思想學派はこの嚴肅な、眞面目な瞬間に在んで特に大なる利益を有すると信じる。』

今予は著書「イスラエル」の第四巻と第五巻を校正中である。予は是非再びその校正を見たいと思つて居る。若しこの仕事を他人に委せなければならぬとすれば予に取つては極めて苦痛な事である。けれども、予が校正せんとする事の大部分は、予以外のものには永遠に分らない事である。唯、神のみ知り玉ふと言へばさう云ひ得るかも知れない。』と

宛然、昔の神學者のやうな哲學者の言ひ分である。彼は矢張り神の信仰を固執して居る。人はポルテールの様に反牧師主義であり、自然神教の信仰者であるのだ。ルナンも恐らく漠然と心靈の存在を許してゐたらしい。

彼の臨終に立會つた養子のブシャリの話に依ると、ルナンは「何も残りほしくない、何も、何も、何も、」と宣言して眼を閉ぢたさうである。これが彼の最後の瞬間の印象であつたのだ。單りルナン許りではない。他の多くの偉大な人々も亦、靈魂の存在に就ては同じ様な懷疑主義を抱いて居つた。それでも、彼等は矢張り心靈の問題を常に考へてゐたのである。殊にブトレミーの如きは、地球運動の假説程莫迦氣た話はない、無上の滑稽である。そして、思想とは何であるか、心靈とは何を指すのか。そこに理外な物はない。若し心靈が個々の人に存在してゐるものならば、それは肉體と同じく自然的なものであると考へた。要するにこれ等の意見はすべて吾々の無智に基いてゐる事は言ふまでもない。

吾々は最後に力の唯一性と物質の唯一性を認めない譯には行かない。この名稱は一八六五年に科學考察の上に與へたものであつて、一八六六年發行の拙著宇宙年代記中に始めて發表したのである。その當時吾々は全く無智であつた。けれども科學の進歩は却て昔の鍊金術師の考を裏書したやうな結果になつた。電子から成る原子の構成に考へても、今日ですら物質なる語はエネルギーに對する近代の考への中に段々消えて行くやうに思はれる。原子は力の中心である。

そこで、凡ゆるものに力本説は適用される。宇宙力本説は各世界を支配する、ニウトンはこれに引力といふ名を與へた。だが、これ丈の説明では未だ不充分である。若し宇宙に存するものが引力だけだとすると、多くの星は一つの塊になつて了ふ筈である。何故かといふと、速く宇宙創成の時代に於

て既に引力がそれ等を一團としたであらうからである。けれども、宇宙には尙他の物が在る。それは運動である。力本即ち活力は凡ての實在を支配する。進化して來た人間には、靈的物力が常に生的物力に伴つてゐるのである。結局この二物力は全く同一な物である。それは自然の精神である。そして、この精神は物質のない世界に於ては無言である、盲目である。否な一般動物の本能中にさへも何等の働きも、その存在も表はれない事がある。人間多數の仕事に在つても意識されない。唯だ少數の物の場合に始めて明瞭に意識される。

予は一九八八年に發行した拙著「ユラニー」に次の如く書いた。

吾々が物質と呼ぶところの物は、科學的分折に依てそれを捕捉せんとする其刹那に消滅する。吾々は力は活動の本であり、宇宙の大支柱であり、總ての組織の實質的根本である事を知つてゐる。乃ち人間にもその本質的根本靈魂を有つてゐる。宇宙にも吾々の解し難い靈的原則がある。予は又、「自然の力」(一九〇六年發行)の中に次の如く述べた。

「吾々は靈魂の表現に關する事實に顧みて、宇宙についての單純なる機械的説明の極めて不充分であつた事、そして宇宙には表面に現はれた物質以外に必ず何物かの存在してゐる事を認める。世界を支配するものは物質ではない。それは靈的である力本である要素でなければならぬ。」と。

この稿を書いて以來、心靈的表現に關する各種の觀察が著しく増加して、實際上記の事實を充分に證明して余りある程になつた。

絶對無言に、そして極めて強く昆虫の本能を支配してゐる精神力は、彼等の存在とその永續を確證して居る。それは精神の力が鳥の生長や、人間や、その他の高等動物の進化を支配してゐるのと同じである。昆虫が蛹の中は一定の形を成さない軟塊であつて、それから蝶に變化するのも物力の爲である。又、ある媒質的組織から、實體的組織に變はる間のその瞬間的生存も歸する所は物力である。即ち物力が一時的實體化をなすのである。

吾々は「宇宙は力本である」と斷言する。目に見えない思考する力が凡らゆる世界と原子とを支配する。そして物質はそれに従ふのである。

事物の分析は、到る處に於てこの眼に見えない精神の作用を表示して居る。この普遍的精神は凡らゆる物に存して居つて、各分子、各原子を支配する。けれども精神は觸感し得るものではない。稱り得るものではない。無限に小さくして眼に見得るものではない。唯だ彼等は力學的聚合に依てのみ眼に見える物や、生物を組成してゐるのである。この精神は絶對に破壊されない。そして永久的である。

唯物論は極めて缺點の多い、不完全なそして不合理な理論である。それは何物をも満足せしむるまで説明を與へる事は出来ない。ある一定の實體的性質を具へた物質だけを認めるといふ彼等の主張は絶対にその分析を許さぬ一つの假説に過ぎない。實證哲學者等はこの錯誤に捕へられてゐるのである。物質はその本質的性質によつて凡らゆる物を支配するとする假説の、全然眞理でないと云ふ事には幾多の實驗的證據がある。彼等は生物は勿論、物質さへ動かす動的智力を考量してゐないのである。

吾々はジュネー博士と共に、古典派の學者達は少くとも最小から最大を導き出した進化論哲學の一般的難問題を解明する力はないと言ひ得る。

本當に意識してか、或は無意識での事は分らないが、兎に角、唯物論は近來全階級に亘つて擴まつて來た。けれども分析を経ない事物のほんの外観だけの學説である事は前に言つた通りである。

吾々は唯だ、實驗的方法から唯物論を排するのである。そして吾々は古典的唯物論の凡ゆる誤謬を立證しなければならぬ。彼の標準精神生理學も亦遠く事實に反して居る。人間には或る性質を具へてゐる化學的分子以外に確かにある物が存在する。それは物質的でない要素、即ち心靈的原理の存在を信ずる。事實の公平な説明が最も雄辯にそれを吾々に示して居る。それは全然物理的意味を離れて作用する物である。

第三章 人は何であるか、心靈は在るものか

吾々は總ての先入觀念から離れ、全く自由な心になつて眞理を求めなければならぬ。

デカルト

唯物主義の理論が全然證明され得ないものである事は既に述べた。その理論は嘗て考へられてあつた様な爾く堅實な基礎の上に立つてゐるのでは決してないのだ。それは彼等自らが稱へてゐる様に幾何學の定理や、數學的確率に例へる事は出来ない。その代りに吾々が極めて自由に、勝手に凡らゆる方面から取調べ得る問題である。

肉體の破滅した後尙ほ心靈が残存するものであるか何うかを知る前に、先づ心靈なるものが一體在るものか何うかを知る事が先決問題である。既に存在しない物としたならば、それに就て論ずる事は全く愚の極である。思想が腦の作り出す物としたならば腦と共に滅して了ふ譯である。

智識は科學的の確實な觀察と實驗的方法に依て始めて得られるのである。けれども事實、今日まで

の心理學は唯だ言葉の上の問題、理論上の冥想、假説的事柄を取扱つて來たまでであつて、要するに傳統的な考へに過ぎなかつたのである。吾々は此の際、絶対にこの傳統を避けねばならない。吾々は何處までも實際の觀察に依つて心靈の性質を決定し、その能力を究めやうと思ふ。

遺憾乍ら、心靈の能力は今日まで殆んど知られてゐなかつたと云ふ事を認めない譯には行かない。そこで、何うしても新心理學を科學の上に建てられなければならぬ。 *neaplysie* (純正哲學) の語原はその創始者アリストールの分類の中には「肉體の後」と云ふ意味であつた……けれどもそれは屢々忘れられた。

吾々は肉體の破滅后にも尙ほ生き續ける爲めには、精神的に存在するのでなければならぬ。そこで、吾々の心靈とは箇々に存在する物であらうか、吾々は實際に心靈を有つて居るか、更に適確に言へば心靈であるのか、是れは最初に答へられなければならない問題である。最初に決めて掛らなければならぬ點である。

既に述べた通り、唯物論者、實證主義、無神論者、心靈否認論者達は、宇宙には唯だ物質とその物性があるだけで、外には何にも無い。人類のあらゆる事實は、この手取早く分り易い理論で、何もかも説明出来ると思つて居る。併しこれは全然間違つた考である。吾々は之に反對な事柄を證明せねば

ならぬ。

心靈とは何であるか、又この言葉は何處から來たのか、それは何を意味するのか。

今日まで心靈の信仰は純正哲學上の學説や、又はその神聖なる事を要求する神の啓示に基礎を置いたものであつた。けれども、それは何等證明されてはゐない。宗教、信仰、情操、願望、恐怖等は證據にはならぬ。

如何にして心靈の觀念が人間の心に起つたのであるか。

Soul (心靈) といふ語と現代語の中の同意義の語 (例へば Spirit の如き)、又は古語の Anima, Animus (ἄνιμος) といふ精神の意味から來た羅典語)、羅典語の Spiritus、希臘語の ψυχή, πνεύμα 或は希臘語の πνεύμα (氣息) に似た意味サンスクリットの Ānī (靈魂) 等の語はすべて氣息の觀念を表示するのである。そして、Soul 又は Spirit の觀念はこの氣息の觀念の原始的表現であつた事は疑ひない。Psyche (靈魂、精神) といふ語も希臘語の ψυχή (呼吸するの意) から來たものである。

生命と思想の本質を呼吸の現象と同一に視てゐた古代の觀察家は、呼吸を失つた肉體、心靈を取去られた肉體、そして死體の崩壊する否定すべからざる事實と、死者の幻影即ち幽靈に對する信念——死んだ肉體がたとひ如何に分解しても、灰になつても永續する生命についての信念とを強いて一致さ

せなければ満足出来なかつたのである。それ故、彼等は呼吸と心靈は死の瞬間に肉體を棄て、去り、何處かで自身の生命を保つてゐるのであると考へてゐた。

今日でも「最後の息」といふ言葉は死を指すのである。併し、或る人々が假し眼に見えない形を以て生命の永續する事を認めたとしても、他の人々はこれを以て、唯だ後に残れる者の感情や、名残や、愛情の表現に過ぎないものと見る。往昔、人間の種々の群が出来た始めから、人間の信念を二つに分ける所の著しい相反した理論があつた。一は唯心論で、他は唯物論である。けれども兩方共にその根據は等しく皮相的な見解に基いてゐるに過ぎなかつた。

茲に Soul (心靈) と Spirit (精神) の意味を深く驗べなければならぬ。この二つの言葉の間には根本的の差異がある。生きた有機體の性質と、靈的要素とは實質的に異なる物である。

概して人々は、この世界には絶対に争ふの余地なき唯一の實在、即ち對象の實在、物質の實在、更に言ひ換へると、吾々が見たり、觸れたりする事の出来る物又は五官の範圍内に來る物の實在のみと考へ、それを確信してゐる。そして他の凡ての物は、彼等にとつては何もかも抽象であり、空想であり、又無であるのだ。

普通の人々や、學者の多數はこの考へを固執する。併し、彼等にも誤りは免れない。右の場合は正しくそれである。

予は「物理學は、その外觀が殆んど争ふ餘地のない有力な證據を有してゐる時ですら、先づ疑を以て嚴密に試験されなければならない事を吾人に教へるものである」と言明した友人デュランド、グロに同意する。太陽や、全天體が吾人の頭上を廻つて居るのだと考へる。成程一寸見るとこれ以上明白な事があらうか。凡ての時代、凡ての人々の眼は何の疑もなくこれ等の事實を全く確實な事と明言してゐたらうか。否な、もつと仰々しい事が信ぜられてはなかつたか。それは唯だ錯覺に過ぎないのだ。天文學はそれを證明した。

彼等は單に表面上の觀察から推論して、彼等の所謂經驗的事實と稱へる「太陽は光を發する圓盤で、吾々の頭上を東から西へ、日の出から日没まで廻轉するのだ」と教へて來たのである。これが幾千年の間人も吾も何等異議のない事實としての宣言であつた。如何に吾々の學說なるものが、知識の批判に於て皮相的なものであつたか、分る。然らば科學が、「この所謂觀察によつて實證された眞理」なる物を、如何にして大膽にも明白な誤謬であると斷じ得たか、そして現在全世界の人々が何うしてその誤謬を納得するに至つたか。

最も良く理解され可き事——正確に、そして眞實に肯定し得る事實、即ち實際の觀察の結果による

事實といふのは「太陽が圓盤である」云々と云ふ言葉を以て表現さるべき事ではない。それは表現の誤りである。若し本當に實驗者がその經驗によつて知得した事實を嚴正に表さん事を欲するなら、即ち絶對の確實性を示さうとするならば、彼は「吾々が太陽と名つけた物は輝く圓盤の様に見える。そして又太陽は東から西へ動くものと思はれる性質を有つてゐる」と表現すべき所である。況して太陽は球であるから、この圓盤と斷じた事から既に誤つた形容である。

感覺と知覺とを混同してはならぬ。知覺は證明を要する事實である。予は稻妻の閃きを見、大砲の音を聽く、これを最も正確に表せば、予は大砲の音を聽いたと思はれる。予の眼には稻妻の閃きと見えたと言ふべき所である。けれども、生理學者は屢々この區別に無智である。彼等が觀察した事實として興へる事は、嚴正に驗べて見ると、それは屢々推量された事で、本當に觀察された事實ではない。それ等は自分の心の作用を勘定に入れない觀察から速斷された歸納である。「予の眼に映じたものは直徑これこれ位の輝く圓盤の様な物で、日出から日没へかけて空を横切つて動いて行つた」と言はゞそれは眞實の告白である。少くとも物の確實性に關しては何よりも實驗に基かねばならぬと云ふ自分の主義に従つて、飽くまで言明し得る權利を超越しない説明である。けれども、「予は確かに圓盤が空中を横切つて行くのを見た」と言つたなら、それは實感を超越した説明であつて、兎角誤りを惹

き起す恐れがあるばかりでなく、是の種の觀察はすぐその誤謬を證明される。實際斯様な例は茲に一一々述べる必要はあるまい。吾々はある感覺、觀念、情緒を経験する。それは本當に直接な實感である。確實な唯一の知識である。そして絶對に信用のおける價値を有つてゐる事實である。

故に對象から得る觀念は感覺、知覺、概念を意味する。だが、これ等の物は一體何んであらうか。對象その物に附いて居るものか。否な、この感覺、概念は對象に直面して感じる、認める。理解する事に依て生れ來るものである。故に、そこに感じたり、見たり、理解したりする何物かある事を自ら證明してゐるのである。

更に正確に言ふと、感覺、認識、理解はそれ自身に於て絶對的基礎の上に得られた事實、即ち直接の觀察が吾人に與へた唯一の事實を形造つてゐるものである。

この論法の形式は決して昨今に考へられた事ではない。實に一六七四年マルブランシエの議論以來用ひられて來た方法である。吾々は宇宙、物象、生物、力、空間及び時間等は唯だ感覺によつてのみ判斷する。吾々が實在について考へ得る總ての事は、心又は腦の中に存在するのである。けれども、その事から吾々の觀念が實在その物をも形つくと決めて了ふのは不思議な論法である。これ等の印象には原因がある。そしてこの原因こそ吾々の眼、感覺に對して外來的の物である。つまり吾々は入

り來る像を映す鏡である。

パークレー、マルプランシエ、カント、ポアンカレ等の純粹觀念論は、餘りに懷疑主義に陥つたものである。けれども一應彼等の主義に當つて見やう。

皮相的な外觀を置いて、外界は吾人に見える物ではないとせなければならぬと云ふ事は一面から確かに眞理たるを失はない。若し吾々に眼や耳がなかつたなら、世界は全く異なつた物に思はれたであらう。そして吾々の網膜は餘程變つた物に構造されてるかも知れない。視神経は赤の最端から紫の最端までの間、即ち一秒間に三八〇兆から七六六兆までの振動を認むる事が出来るばかりでなく、紫外線を超えた振動をも見る事が出来るかも知れない。或は又、それが電氣の振動や、磁氣波や、現在吾々には未知な隠れた力を見得る神経に置き代へられる事が出来るかも知れない。他の惑星に棲む者の觀る宇宙は、吾々の科學的組織のそれとは全く異なつた物であらう。故に、若し吾々だけの感覺を獨り眞なりと思ふならば、それは餘りに自負に過ぎた誤り方である。眞の自然は全然異つた物である。吾々は未だそれを知らない。けれども、心は當然それを研究すべきである。

予は感じる、予は思ふ——これが現在の確實性を保證する唯一の仕方である。眞の証據である。そして又、この資格を與へられる唯一の價値である。そして、眞の觀察から否定すべからざる確實性を

有する唯一の事實が、歸納推理の方法に依つて第一次的事實として受け入れられ、この根元から生れる第二次の重大な事實は即ち意識となり、思想となつて残る。

この根元は自ら二つの要素に分解される。即ち主體と客體である。換言すれば、感じたり、考へたりするものが主體である。感ぜられたり、考へられたりするものが客體である。十八世紀のパークレー、二十世紀のH、ポアンカレの如く觀念主義の哲學者は極端に先走りして、唯だ考へる主體が存在するのみである。吾々の感覺だけが吾々に經驗されるのである。客體たる外界の事物の存在を條件としないままで考へて居る。

それは餘りに誇張された説である。それは純唯物論に全く正反對をなすものである。而かも尙それよりも誤りが少ない譯ではない。

凡そ眞實であり、斷じて辨駁を許さない事實と云ふのは、吾々が現に考へるものを知る事と、そして吾々は究極の實在や、事物の本質や、外界の本體は唯だ外觀のみしか覗ひ得られない。その他に就ては未だ全然無智であると云ふ事丈である。

吾々は事物の實在が反科學的であると知つたと假定せよ。さすれば吾々の感覺は唯だその事實の一部をのみ表はすものであつて、而かも事實を變形するプリズムを経て來るのである。若し地球が常に

雲で掩はれて居たならば吾々は太陽も、月も、惑星も、恒星も知らないであらう。そして、人間の知識は未だに宇宙の組織を知るに至らずして、種々に途方もない誤解やら、迷信に陥つてた事であらう。けれども、吾々が今、既知の事柄と云つても、未知の事柄に比べると全く話にならぬ程僅少なものである。事實吾々の視神経は一部分を説明して呉れるのに過ぎない。

錯覺は吾々の觀念、感覺、情操、信念の不安定な基礎を成す。そして、最初の根本的錯覺は地球の不動といふ考へとなつて表はれた人々は自分等が宇宙の中心に安定してゐるのであつて、凡て他の物はそれに従屬して居るのだと信じた。天文学が如何にそれを證明しても、吾々は徒らに當てもなくその眞理を探り、それに觸れん事を求めてゐた。何の効果もなかつたのである。風もなく、空はよく澄み渡つて、有らゆる物が平和に満ちてゐる麗しい靜かな夏の夕を想像する。その時、吾々は眩暈する様な速力で天の深みを走つてゐる自動車の上にいるのである。

人類は極て無智な状態にある。そして、自然の組織は吾々が眞理を求むる上に少しの助けも與へないといふ事を覺らない。吾々の感官は總ての物に向て吾々を欺く。唯だ科學的研究のみが吾々の心にある光明を齎らす。

斯様に、吾々の立つて居るこの惑星の恐ろしい運動でさへ、吾々は少しも感じないでゐるのであ

る。それは固着した位置に安定してゐる様に思はれる。上下前後左右何物も動いてない様に考へられる。けれども、吾々を載せた地球といふ大自動車は一時間十萬七千吉羅米の速力で太陽の周りの軌道を疾走してゐるのである。而かもその軌道は正しい曲線ではなく、螺旋狀を成してゐるので、地球はその創成の始めから二度と同じ道を通過した事はない。

同時に地球は二十四時毎に地球の周圍を一廻轉するので、吾々が頭上と思つた所も、十二時間の後には足の下になる譯である。この地球の自轉は巴里を通る緯度では一秒間三百五十米、赤道では四百六十五米の速度で廻る。

地球は常に十四種の運動を繰返して居る。その中の一つの運動さへも吾々には感じない。例へば毎日吾々の生活に直接關係してゐる潮の干満、一日の中に二回まで大陸を三十廻も上下するこの偉大な運動を吾々は知らないでゐるのである。而かも若し潮の干満を測る直接の目標、即ち海岸がなかつたなら、吾々は永久に潮の干満ある事實を認め得ないであらう。

又、吾々は秒時の間も呼吸せずに居られない空氣の重さを感じた事があらうか。人體の表面は常に一六、〇〇〇疋（三千六百八十三貫余）と云ふ強大な空氣の重量を支へてゐるが、それは内部からの壓力によつて平衡されてゐるので、扁平にならずに生きて居られるのである。ガリレー、パスカル、

トリチエリー等の偉い學者の現はれる前までは、誰れも空氣に重量があると考へてゐなかつた。それは強ち昔の人の智慧のない許りではない。自然その物が既に吾々に斯様な事を感じしめない様に出來てゐたのだ。けれども終に科學はそれを證明した。

空氣中には吾々の知らない種々の流れが錯綜して居る。電氣もその一部分である。昔は怖ろしい雷鳴の時でなければ電氣の表現を観る事が出来なかつた。太陽は九千三百萬哩を距れた吾が地球に向つて、絶えず磁力を放射してゐる。地球上の磁針はそれから著しい影響を受けて居るが、吾々の感覺はこの作用を表はすことが出来ない。唯だ二三の極めて敏感な、そして微妙な有機體がこの電氣や、磁氣に類した作用を示す。

吾々が一般に光と稱へる物は、一秒間に三百八十兆から七百六十兆（赤から紫迄）に至る。エーテルの振動數の範圍内の物だけを見る事が出来る。けれども、此の外に、三百八十兆以下の遅い振動數を有つてゐる赤外線や、七百六十兆以上の速い振動數を有つてゐる紫外線も亦、同じく存在して自然の一部を占めて居るが、それは吾々の網膜には映らないのである。

又、吾々の耳には音と呼ぶ物の中、唯だ一秒間三十二振動から最も鋭い氣笛の三萬六千振動に至る範圍内に於ての音響を聞き得るだけである。

吾々の嗅覺は香と呼ぶ物を、極めてそれに近似した物として受入れ、そして香を發散する物の中のあるものをのみ感ずる事が出来るに過ぎない。唯だ動物の嗅覺は人間のそれに比べると著しく異つてゐる。

それ故に、吾々は感覺の範圍の外には自然界には光も音、響も、香もないと考へる。それは唯だ吾々人間の中だけで勝手に決めた事である。換言すれば吾々の印象に應じてこの様な言葉を作り出したのに過ぎない。光は熱と同様運動の一種である。そして、空間には晝間も夜間も同じく光があるといふのは、夜間も晝間と同じ位のエーテル振動が廣大な宇宙に亘つて彌漫して居るといふ事である。音響も運動の一つの變形であつて、吾々の聽官には噪音に過ぎない。香は空氣に存在する微粒子から來るので、それが特別に吾々の嗅神經を刺戟するのである。

吾々地上の生物には肉體の外部に在る世界を知るべく唯だ三つの感覺を有つてゐるだけである。他の二つの味覺と觸覺とは肉體と接觸して始めて作用するのであるから、これは外界の事物に對しては直接役に立たない。従てこの二つは吾々に事實に關する知識を齎す事はない。

吾々の周圍にはエーテルの振動、空氣の振動、力、吾々の知覺する事の出来ない、そして眼に映らないものが在る。是は科學上からも亦絶對合理的な事實である。吾々の周圍には見る事の出来ない物

許りでなく、見る事も觸感することも全然出来ない、少くとも吾々人間には解し難い物の存在する可能性はある。予は斯かる物の絶対存在を主張するのではない。存在するかも知れないと云ふ。この考は事實の發見に先んずる全く科學的な、そして合理的な系説である。

吾々の知覺器官は必ずしも事物の眞想を受け入れない。時には地球の運動、空氣の重量、放光、電氣、磁氣等に關しても全く虚偽の又は誤つた印象を與ふると云ふ事實が、既に一般に認められ、證明されたので、吾々が現に見た事でも、それが必ずしも眞實と考へる譯には行かない。反て見た事實の反對の現象を認めなければならぬ事さへあるのだ。

實際眼に見えない物が吾々の周圍に存在する事を疑ふのは不合理である。微生物が發見される前に吾々はそれに就て考へた事があつたらうか、それは何百萬と群つて居る物であつて、實に有機體の生命の大分を占めてゐるのである。外觀は眞實を示さない。そこに吾々によつて直接に感知される唯一の眞實がある。それは思考である。人間の中に絶対に否定すべからざる眞實な事實は精神の存在である。予は以前の著書に於て既に此の結論に到達してゐる。本書は更にその事實を詳かに證明すべき使命を以て生れたのである。予は茲に、既に拙著「リーメン」及び「自然の力」に於て述べた事を再び繰返す事を許して貰ひたい。それは此際この觀念を呼び起すことが甚だ必要だからである。

吾々が曩に唯心論で、なくて觀念論者であると言つた彼のアンリー・ポアンカレは、彼の常に懷疑的な説にも似ず、佛蘭西の學者で工藝學校の教授であつたボチエの晩年に就て次の様な事を書いた。

「彼を殺した病氣は非常に長引いて、慘酷なものであつた。彼は十二年間も手足の自由を奪はれ寢臺に又はソファハーに横はつた儘屢々苦痛に悩んで居つた。そして危険に瀕した事が毎年幾回もあつた。終に彼はあらゆる自由を失ひ、再び起上る事が出来なくなつた時、彼の寢床には唯だ彼の二つの眼だけが生き残つてゐる様に思はれた。けれども、彼の心靈はこの慘酷な病魔の心なき力よりも強かつた。彼は人々の手に擁せられて、工藝學校や、鑛山學校に行つた。そして少しでも苦痛の和らいで居る時は彼は病を忘れて以前から趣味を有つてゐた仕事を繼續して居つた。斯かる間に段々病衰してゆく彼の身體にも、理性だけは毫も曇りなく輝いてゐた。それは恰度、城壁が刻々敵彈に破壊されて行き乍ら、尙ほ司令官の不抜の勇氣に依て最後まで頑強に敵對する要塞のやうであつた。彼の死の數週間前、彼は新たに考へ出した或る研究に要する數學の書を二三冊持て來て呉れと予に頼んで來た。彼の思想はその最後の日まで死より強かつたのである。」

この記事が、精神主義者でなく、懷疑派の學者に依て書かれた事を考ふる時、吾々は眞理は最後の

勝利者である。星夜の真中に煌いてゐる彼のシリウスの様に、永劫消えることなく燃えてゐると云ふ事の事實を疑ふ譯には行かぬ。

實際、アンリー、ボアンカレーは、外部世界の實在さへも疑ふが、尙ほ精神の存在だけは信じて居ると、個人的に予に話した事が屢々あつた。この考へも餘りに偏してゐる様に思はれる。吾々は何事にも誇張を避けなければならない。

結局、吾々は自分に感じる事をよく知つてゐるのである。予が本書を編み、事實に立脚して眞理を究めてゐる間、正に一切の私心を去り、主義に偏せず、單純にこの著述をなして居るの予はの肉體ではなくして、予の心であると感ずる。予は身體を所有する。けれども、予の身體が予を所有するのではない。吾々の意識は吾々の直接の印象である。その意識は吾々が説明する事が出来、又、説明しなければならぬ吾々の印象の上に立つて居る。印象は吾々の總ての論証の基礎である。

人間の定義は、骨格を包める肉の組織、酸素、水素、窒素、炭素等の分子の結合。六疋の骨、十五疋の蛋白質と纖維素、五十疋の水の割合で構成されてゐる物。神経の集束である等の言葉に依てのみ與へられる事が果して出来やうか。

若し右の定義を持出す位なら、ボナールの定めた「人は器官を使役する智である」の定義の方が餘

程進んで居る。

人は自らそれを知つてゐると否とに拘らず本質的に精神であると宣言したい。人は己れの中に正義の觀念を有つて居ないだらうか。ある過失の爲めに正當に罰せられた場合に、子供は自分の罪がそれに値する事を知らないであらうか。そして又、子供が無實の罪で罰せられた時、彼は其不當の罰に對して反抗しないだらうか。何から道徳的良心が來るのであるか。人の祖先は第三紀、第二紀及び第一紀地質時代の動物である。その動物は爬行動物から漸次猿に進化した。けれどもこの道徳的良心殊に人間の子供が本能的に有つてゐる正義の觀念は、これ等の動物の腦にはなかつた。吾々はこの觀念が、第一次的祖先から第二次的祖先に、そして、それが教育の力で出來たものであると言ひ抜ける事も出來やう。けれども、その教育なるものは一體何處から來たのか。これは實に精神界に屬する問題である。この智的、精神的、道徳的世界と腦の物質の物理化學的作用との間には何等共通の尺度はないのだ。

意思は確かに智能の範疇に屬するエネルギーの一つの形である。今一例を擇る。ナポレオンは世界を征服せんとして、凡らゆる物を彼の野心の犠牲にした。埃及出征からウオーターローの戦に至るまでの彼の行動——些細な彼の動作をも檢べて見よ。如何なる心理學も、化學も、物理學も、機制論

も、彼の人格、觀念の持續、忍耐力、強情を説明する事は出来ない。大脳の働きか？ それだけでは不充分である。脳の中には別に思考するある物が存在する。脳はその道具に過ぎない。見るのは眼ではない。考へるのは脳ではない。

望遠鏡に依る星の研究は、器具や、眼や、脳でするのではない。それは觀測し、發見する天文學者の精神に屬する。人間の意思はそれ自身に於て、眼に見える、觸感される物質的世界と異なつた思考する靈的世界の存在を證明するに充分である。

意思の力はあらゆる物に顯はれて居る。吾々はこれに就て簡単な例を擧げ得る。

予は安樂椅子に腰かけて、兩手を膝の上に置いてゐる。

右手で左手の指を一つづゝ上げて行く。その時指は自然に落ちて元の位置に歸る。

併し、若し予が命ずる時には指は落ちないで、上つた儘になつてゐる。

この指の筋肉に作用するものは何か。それは唯だ意思である。

故に、物質に作用する精神的力が存する。この力は脳と聯絡がある。——それは言葉なくして作用する。けれども矢張それは觀念である。この觀念が物質に作用するのである。內的根原は脳ではない。脳の振動は單にその結果であるに過ぎない。

意思を働かす人は運命の創造者である。

特に人間の思想に就て考察して見やう。

思想は心靈の存在について不斷の證明となる。吾々が反省する時、單に「思ふ」又は「考へる」と言ふ時、或る問題に就て考へる時、抽象的又は概括的の力を働かす時、心靈の存在を確める事が出来る。

人間の有する物の中で、最も貴重な、最も個人的な、そして最も獨立的な物は思想である。その自由は何物の拘束も受けない。物質的な力は肉體を苦しめ、肉體を獄に投げ入れ、又それを驅使する事が出来る。けれども、思想に對しては何物も加へ得ない。如何なることをしても、如何なる事を言つても、思想を制裁する事は出来ない。思想は凡らゆる物を嘲笑し、輕蔑し、そして支配する。それは俗世間的の又は宗教的の偽善から伴りに誘はれた時でも、政治上又は商業上の野心がそれに虚偽の假面をかぶせた時でも、常に之に反抗して、元のまゝの姿を保ちて、その眞に欲する事のみを知つてゐるのは思想である。これは脳と全然獨立して靈魂の存在を示す明確な證據ではなからうか。

思考する力を有する物、それは單に物質でもなければ、分子の集合でもない。脳が感じたり、考へたりするのだと主張するのは頗る莫迦氣た話である。最も滑稽な事である。それは恰度、電報に表は

れた發信者の思想が、電池から生れたものと言ふのと同じ事である。

精神、思想、心の統制力、それ等は物質でも、力でもない。引力に作用されて太陽の周圍を回轉する地球。落下する石。流るゝ水。原子間の結合を弛め又は緊める熱等は一方から觀れば物質である。他方から觀るとエネルギーである。思想、理性、そして或る計畫に伴ふ事物の方向、それ等は全く異なつた原理を啓示する。

バーチルの名著「エニード」の第六卷にある次の名句を知らない人はあるまい。

宇宙に存在するすべての物は、

同じ原理の下に一つに移す事が出来る。

心靈とは、それは生ける物質である。それは實に此の大なる肉體と混合してゐるものである。

詩人は眞理を語つた。宇宙は精神によつて支配される。吾々が人間の中に存在する精神を研究する時、それは肉體的エネルギーでも、物質でもない事を認める。精神はその二つを使役する。時には精神は意思に従つてそれ等を支配する。

人格の存在に關する證明は無限に在る。一々それ等を茲に擧ぐる必要はあるまい。事實、各人は屢々この人格の意義を理會する機會はなかつたらうか。

吾々は毎日、目前にこの證據を有つてゐる。逆境に處する堅忍。貧窮を脱せんとする精勵の示すエネルギー。崇高な目的への献身。國家の安寧に捧ぐる犠牲。勝たんとする意思。宗教又は科學の使徒。信仰の爲めの殉教者。この様な實例はすべて心靈の存在を自から語つて居る立派な證據ではなからうか。人々が考へるやうに、腎臟や、肝臟の分泌物に似た大脳から出る物質的分泌物が智的人格を造り得るものだと、如何にしても考へられない事である。

「動物經濟に及ぼすクロロホルム及びキュレー(南亞の土人が矢鏃に附して動物を射るに用ひる毒素)の影響の研究より見た心靈の實在」に就ての極めて獨創な證明は、一八六八年道德及び政治學協會の通信員ラモン、ド、ラ、サグラ氏に提出された。氏は一八七一年にキューバ島で死んだ人である。

エーテル又はクロロホルムの蒸發した氣體を呼吸すると、一般の感覺は麻痺する。故にこの異常な生理状態に置かれた人間は、最も恐ろしい手術を、少しも感ずる事なしに施される。そしてこの影響を受けた人は、鋭利なメスでその組織や、神経を切り離しても何の感じもない。殊に普通なら苦悶や恐怖の叫びをあげる無惨な裂傷にも、切口にも全然無感覺であるばかりでなく、屢々靈妙な快感がこの不思議な眠りの間に、心靈によつて經驗される。

ラモン、ド、ラ、サグラはこの現象を心靈の存在に關する科學的證明であるとして提出した。心靈

と肉體とは確かに同じ物ではない。それは茲に明かに分離されてゐる通りである。肉體がメスによつて苦められてゐる間に、心靈は一箇の獨立體として思考する事を続ける。こゝに人間全體の二要素は麻酔作用に依て分離される。この篤學な西班牙人は彼の妻に試みたクロロホルムの作用に對して非常に感動した。彼女は意識を喪つた間にも、その思想には何の變動もなかつた。知識にも些の影響を感じなかつた。彼女は外科醫ベルノアルが彼女の肉と神経とをメスで切開してゐる間にも、醫師と平靜に話した。そして寧ろ常よりも氣分が快かつたと彼女の夫に語つた。

吾人は又、ナンシーの學校で、催眠術に依て苦痛を鎮めた實例をも知つて居る。

心靈と肉體との間の區分——否な、その分離——は催眠狀態、睡遊狀態、磁力現象、或は二重人格の狀態に於て、種々の條件の下に觀察された。心靈の表現は全然肉體組織から獨立して居る事を説明するものと思はれた生理學的の假説は、この點に於て全然不充分であつた。吾々の今日まで教へられた生命と思想との概念は將に崩潰せんとしてゐる。

凡らゆる物は人間の心靈が肉體とは全く異なつた實體である事を示す。「心靈」と云ふ事は決してその語源に含むやうな呼吸の意味を有たない。それは純然たる智的體である。實際多數の言葉は段々その語源から遠ざかつて行く。例へば Electricity (電氣) は *Elektron* (琥珀) から來たのであるが、今や

全然意味が違ふ

吾々は自然の物質と何等共通する所のない超自然的能力の存在を證明する事によつて、この人格を實證しやうと思ふ。

第四章 未知又は多少未知の心靈の超自然的作用

予か小兒の時分は小兒相應に語り、小兒相應に考へた。そして成人した時、小兒らしき凡ての物を放棄した。

使徒 ボール

凡そ何んな研究に於ても、吾々が直ぐ眞理に到達するを得るものと夢想するのは寧ろ小兒らしい考へである。吾々には始めから確實な考へはないのだ。殊に、吾々の感覺、吾々の觀察力、吾々の智力は絶對な眞理を発見するには不適當である。科學の中でも最も正確なものは天文學である。精密な觀測に依つて確實の域に達し得られる。天文學は算術、代數、幾何と同様に几帳面な科學である。吾々の棲む惑星即ち地球は太陽の周り、一億四千九百五十萬吉米の軌道を一周するに三百六十五日六時九分九秒を要する。太陽の大きさは地球の百三十萬一千倍、重量に於て三十三萬二千倍である。火星は太陽を中心にして二億二千八百萬吉米の軌道を六百八十六日二十三時三十分四十秒で一周する。そして火星の一日轉に要する時間は二十四時三十七分二十二秒である。之に較べると、物理、化學、動物、植物

地質學等遙に確實味がない。人體生理學や醫學も同様であるが、心理學に至つては更らに甚だしい。諸學校に於て、唯だ標準的な議論の下に假設された從來の心理學教育も餘程改修される必要がある。

心靈の常規的官能——古典教育の對象物であり、そして唯だ慣習的に又不變的に表明されてゐた理會、推理、及び意思——が腦と關係なく存在し、永却不朽なものであると言ふ事の侵す可らざる確かな證明として考へられて居なかつた。そこで吾々は別な方面からこの問題を解決せんとして來たので、これから更にその解決に向て邁進しなければならぬ。人間は凡らゆる物を思索する。思想は一の事實である。この基始の事實を捉へて、現在に於て未知の又は多少未知のものとされてゐる或る心靈官能が、吾人の研究に値する何等かの題材を提供しないものであらうか。そして、これを細心に分析して行く事に依て、今日まで餘りに長い間の人類の無智を啓いて心靈構成の問題に一道の光明を投じ、吾々の極めて狭い知識を聊かなりとも加へ得ないであらうか。そして又、今日まで幾多の人々に依て無益の論議を反覆され、徒らに同一軌道を往來して來たこの未決の大問題が、幸ひに吾人の手に依て解決の曙光を得、茲に、新たに萬人の認容し得る様な新心理學を打立てる事は出來ないものであらうか。人類は何時までも投獄の運命に在る事を恐らく欲しないであらう。

前章述べ來つた所に依て、吾々は今や心靈が肉體を離れて獨立して存在し得るや否やの問題を實驗的に研究すべき立場に在んだ。若し鐵、酸素、水素、ラヂウム等の原子の様に、思索官能を附與された心靈の原子なるものが果して存在するものとせば、それは器官の作用が停止した後に殘存し、而かも有機體的生命の過程に於て腦髓の物質的變化にも、觀念の變化にも何等影響されることさへないに違ひない。茲に「形體のみが死滅する」といふ強い原理が依然として眞理となつて殘る。

既に吾々は心靈的人格存在の可能なる事は生理學的に立證された事を諒解した。吾々は更に進んで腦の物質にも有機的、化學的、機械的結合、即ち本質的である諸官能にも歸する事の出來ない心靈官能の表明に依て、この心靈的人格の存在を證明する事が出来る。

心靈の獨立性に關して特別な證明をなすところの意思は、尙ほ他のこれを立證する幾多の官能(特に精神の獨立獨在性を證すべき心靈作用を指す)と共に後章に研究することにする。そして先づ第一に未だ調査されてゐない、又は未だ本當に了解されてゐない官能、即ちシャルル、リシユールの都合のよい巧妙な表面を繕りて言へば所謂形而上的官能を指摘したいと思ふのである。

例へば、「未知の事柄を認識する。寧ろ豫知する心の力の如き」さうである。

豫感とは何であるか。往々にして非常に確實性を示すこの心靈作用の性質は何であるか。

予は既に久しい以前からこの研究に没頭し、多くの觀察を集めて比較検討し、論議して來た。

諸者の中には、自分が一八九九年に於て心靈の種々な作用や、その表現に關する解剖的研究に著手した事を記憶するゝであらう。そして此の研究の最初の結果は拙著「ランコニー」(アルス發行拙譯)の中に公表して置いた。これは實に二十年前の事である。その後も、自分は尙ほ多數の觀察者から様々の通信を受けた。そして最善の記憶と最全の誠實を以てすら人の回想は、兎角その輪廓を失ひ易く、すべての證明を多少にても曖昧にするものである事を深く承知してゐる自分は、それ等の通信を努めて虚心坦懐に、些の私心を加へず検討する事を以て自分の最大の義務とした。けれども、一見常規を逸した事實、換言すれば故らに奇を銜つた様な事柄はその儘認容する事を避けた。唯だ、一寸考へると莫迦氣な様な事柄でも、一概に拒否する事の出來ないものもある。眞理は兩極端の中間に在る。吾々は眞理は却つて眞の如く見えない事が往々あるといふ事を忘れてはならない。

今、言及した拙著「ランコニー」を讀まれた人は、明確な原因を有つた豫感の例に注意されたであらう。例へば同書一〇六頁(拙譯未知の世界)に掲げた遠く離れてゐた父が臨終に際し、恰もその時何も知らぬその子の大學生が深く悲嘆してゐた例。三一八頁の久しい間會はずにゐて、而かもたつた今思ひ出した許りのある博士に會見した醫學生の例。三二二頁の父が異郷で危篤に瀕してゐた時刻に非

常に不安に悩んでゐた一婦人の例。三二九頁のある一労働者が一種の不安に襲はれ、自分の仕事を罷めて家へ駆けつけて見ると、その時刻に妻が荷馬車に倒されて負傷して居つた例。三三〇頁の遠方の友人を訪ねた人が、荐りに歸心が動くので、友の引留むるのも聽かず、急いで歸つて見ると、小兒が馬睥風に罹つて四人の醫師に取巻かれ、極めて危険の状態にあつた例等がある。以上の諸例に見る豫感とは若し思想の傳達でもなく、ある種の訴への表現でもないとするれば、少くとも靈波の傳達である。吾々は茲にこの靈波の研究をして見やう。

次に掲ぐる豫感には特に注意する價值がある。

内務大臣で閣議の議長であるコンスタン氏は、一日、その夫人と共にジュヴィジイの予の天文臺で會食中に次の出來事を自分に物語つた。

「一八八九年、佛蘭西憲法の改正に就てブロンチス將軍及びその與黨と激烈な議論を戦はした時であつた。或る朝、彼の事務所で、郵便物と共に一冊の書籍を手渡された。彼は急いで閣議に出る時であつたので、それを卓の上に抛り出して、その書類の何んであるかを確める事を夫人に依頼して立ち去つた。恰もその時、夫人は女中に髪を梳かせてゐたので、その書類を膝の上に乗せて開き始めた。夫人は初めは多分從兄から祈禱書を送つて來たのだと思つた。けれども夫人は、三日以前に何か怖ろし

い物の豫感に打たれたさうである。それを思ひ出した彼女は非常に用心して、半ばその書物を開いた時、それは必ず忌むべき物であると考へた。そこで小包を女中に渡して「必度、汚ない物だから入口の室へ持つて行きなさい」と命じた。女中の立去るや否や、夫人は着掛けのまゝ、髪を脊に垂れた儘、入口に走つて来て、「開けるな、觸れるな」と叫んだ。それは何故？

夫人は警保局長のカツセル氏を呼んだ。そしてその物の取調べを頼んだ。彼女は、それが何等かの穩かならぬ秘密が絡つて居ると感じた爲めである。カツセル氏がその書物を振つて見た時幾つかの屑片が卓の上に落ちた。彼はその屑にマッチの火を近づけると、すぐ燃え出した。彼は危険物と認めて縣廳の試験所を持つて行つた。果してその書籍には充分大家屋を破壊するに足るダイナマイトが入れてあつた。これを聞いた夫人は驚きの餘り氣絶して八日間も病んだと云ふ」

以上はコンスタン氏とその夫人が會食中十二人の者に向つてされた物語である。

内務大臣の夫人は危険を豫感した。豫感した許りではない。その危険を甚だしく感じたればこそ彼女は着掛けのまゝ、將に書籍包を開かうとした召使を止める爲めに玄關脇の控室に駆けつけたのである。

この例の如きは吾々普通の視力を以てしては到底見る事の出來ない心靈上の一種の內的幻影を示す

ものではないか。この印象を犬の嗅覺に喻へ得るが、併し兩者の經驗の間には著しい相違がある。この話を聞いた數日後に、予の友人で、警察本部の實驗所長ギラード氏は、特に予の爲めにダイナマイトの分析の結果を報告して呉れた。

コンスタン氏夫人は同席上にて、もう一つ他の豫感の例を話されたが、これも同様注意に値する經驗であつた。

あらゆる事柄を調査し、検討せんとする予の試みに贊助された夫人の主治醫レッセゲ博士は慇々左に掲ぐる通信を送られた。

レッセゲ博士の手紙(第九八〇信)

『コンスタンス夫人が或る豫感に襲はれた結果、藥劑師の送つたある藥の服用を拒んだ問題に就ての貴下の御照會に御答致します。唯だ、私は誰の爲めといふことに關係なく、恰度歴史家があらゆる事柄を叙べる様な考へで書かうと思ひます。

コンスタン夫人が二十三歳の時分、ツールーズに住んで居りましたが、或日彼女はジフテリアに罹り、當時其地に居つたレッセゲ博士を病床に招いでその診察を受けました。博士は鹽酸で夫人の咽喉を洗ふ様にと勧めたので、夫人の母は鹽酸と覺しき一瓶を彼女に與へました。その時患

者は非常に衰弱してゐたのですが、「その藥は鹽酸ではありません、それは私を殺す藥です」と言つて洗ふ事を拒んだのです。そして幾ら勧めても聽き入れません。そこで醫師は彼女を安心させ、又自分もそれを確むる爲めにマッチの棒を小瓶の中に投じて見ると、棒は眞黒に焦けました。それは硫酸であつたのです。

私の記憶に残つてゐる限りではこれ丈です。けれども私の處方箋に對して藥劑師が非常に誤つた處方をしたのを、コンスタン夫人が強い豫感からその服用を拒絶した事丈は今尙よく覺えて居ります。

尙私はこの事に就てより多くの材料を蒐めやうと思ひ、當時の舊いノートなどを調べて見ましたが、外には何も書いてありません。唯だ、それはヂフテリアの場合であつた事だけは分つてゐます。私の處方箋は二瓶要るので、一つは腐蝕劑で、一つは内服劑でした。藥劑師の間違ひは恐らく用法書の混同にあつた様に思はれます。若しコンスタン夫人が何の豫感も起らず、又あつても、それを念頭に置かずにあの腐蝕劑を服用したなら、何んな結果になつたであらうと當時の事を追想しては悚然とすることが屢あります。

先生！ 最も興味の深い貴著「棲息可能なる世界多々あり」を讀んで、私は非常に感動致しま

した。唯物主義から人類の宗教的渴望を救ふ科學的神學の方面に關して私は久しい以前から先生の門弟でした。冀くば私の眞實なる感謝と敬意とを享けられん事を。

一九〇一年三月十六日

ツールーズにて

レツセゲ

(註) 通信の始めに附した番號は予が一八九九年、心靈的現象の研究を始めて以來諸方から報告された通信の順序を示したもので、引照の便宜上特に表はしたのである。中には全然公表しない條件の下に送られたものも多少ある。第四一九信の如きその一例である。

茲に又、疑問の餘地ない豫感の經驗的觀察がある。これは唯物主義者の生理學では到底説明する事は出来ないが、予はこの二件の豫感現象に向て、尙未だ知られてない内的(精神)能力の存在を證明する幾多の同様な現象を附加する事が出来た。これらは深く研究して見ると大に有益な、そして興味のあることであらうと思ふ。

けれども、これ等の現象の多くは、思想の傳達でも、以心傳心的性質のものでもなく、要するに卜筮の一種である。思想の傳達や、以心傳心的作用などの事に就ては、後に特に章を更めて問題にする事として、今、吾々は未知の世界全體の解剖を試みんとして居るのである。

心的幻影に關しては各章に亘つて此等と類似した事柄を研究しなければならぬが、茲では夢中に

起る豫感の様な捕捉し難い現象を後述にして、唯だ目醒めてゐる時の、即ち嚴密な意味での豫感と稱するものに就てのみ研究を進める。

巴里の天文臺長ドロオネー氏は、海上に乗り出せば必ず死を招くだらうとの豫感を得て、絶対に航海を見合せて居た。然るに八月、彼の親戚の一人ミロード氏がやつて来て、一週間位の休息を彼に勧めた。そこで、彼等はシエルブルグに赴いた。そして沖に出て歸路に就いた。歸途、突風に遭ひボートは顛覆して兩人共に溺死して了つた。アルセーヌ、ユーセイイ氏もこれと同様な話を彼の著「告白」中に次のやうに述べて居る。

「彼の妹のセシルは一八七〇年の普魯西軍の侵入を恐れて海邊のある町に避難して居た。ある日、彼女の友の一人が、「外洋に出て船遊びをしようぢやありませんか」と言ひ出した。すると、言下に私の妹は、「海には何うしても出掛けたくありません」と反對した。友達からその譯を訊ねられたので、彼女は、「私がツールンで船に乗らうとする時、一人の伊太利人の女卜者が私に向つてあなたは船に乗つてはいけない、あなたには海は危険ですと注意して呉れました。それでも私はその伊太利人に幾らかの金を遣つて船に乗りました。すると未だ本當に出帆しない中に私は風のために水中に吹き飛ばされましたが、幸ひすぐ救助されたのです。翌日郡長さんの所にその女

のト者が姿を見せました。再び彼女は私の眼を覗き込んで「海は貴女を殺すかも知れませんよ」と言はれました。恚ういふ譯で私は英國に避難する様に誘はれてもそれを拒んで此處に來たのです。」と答へたので、友達も船遊びを止めて陸上の散歩に決めた。

十月十日の事であつた。知事とその夫人、二人の令嬢、二人の姪と私の妹は、パンマルクといふ岬に遊びに出掛けた。パンマルクとは「馬頭」と云ふ意味で、其處は巨大な奇巖怪石が幾つも聳え立ち、その下は底知れぬ深い淵で渦巻を成してゐる。そして怖ろしい激浪の巖に當つて碎けるさま實に物凄いの所であつた。知事は五人の若い女達を連れて「馬頭」の下から荒れ狂ふ怒濤の壯快な光景がよく見える場所に案内した。彼等は岩の上に立つて、恰もオペラへでも行つた様に互に笑ひ興じて居た。彼等が彼處此處と歩き廻つてゐる間、知事は附近のある畫家の家の入口の所で煙草を吸ふて休んで居つた。女達は遠くから自分等の居る場所に知事を促すなどして微塵の不安も感じて居なかつた。

出發の時刻が近づいた。けれども私の妹はこの飽かぬ光景に見蕩れてもう五分だけの猶豫を申し出た。この刹那である。突如深淵から匍ひ上つて來た恐ろしい一と波は、巖上に恐れ戰慄してゐた五人の娘達を呑み込んでしまつた。知事が渦いてゐる海水を凝視した時には最早五人の姿は

見えなかつた。ふと見ると一本の傘が彼の方に漂ふて來た。そして「お母さん」と絹を裂いた様な一聲の叫びが彼の耳に入つただけである。彼は波浪と戦ふやうにして隈なく海上を探し求めた。五人の獲物を浚つて凱歌を揚げた怒濤は影を縮まして、そこには靜かにド、プロホンデイス（海の底から）を歌へる海より外には何物もなかつた。

憎むべき海は再び私の妹の亡骸さへ、一束の髪さへ、一本の傘さへ、扇子さへ、岸の上に打上げて呉れないのだ。唯だ、「母さん」と叫んだ彼女の最後の言葉の外には……

私にこの辛い知らせを齎したのは白鳩であつた。噫あ、思へば巴里籠城の鳩は、未だ曾て吉報を傳へた事はない。」

この種の豫感殆んど偶然とは云へない程數多くあるものだ。吾々がこれ等に就て正確な解明を求めてゐるのも決して物好きな業ではない。かゝる豫感正に吾々の研究せんとする心理的現象の一部を成すものである。吾々は時に偶然の暗合の起るべきを認める。けれど三十回、百回、千回と、さう同じ様な偶然の符合ばかりが反覆されるものではない。かゝる不思議な現象を解剖し研究するのが何んで迷信であらうぞ。

次の物語は極めて平靜な心理状態の人に起つた面白い現象であつて、第一には差し迫つてゐて、而

かも何の徴候もない、全然豫知し得ない不幸から受けた感覺、第二には死の瞬間に於ける靈の表現を明瞭に示して居る事柄である。左にこの通信の全文を掲げる。

(第八一四信)

『それは五年前、私の身に起つた事で、如何に貴下が嚴格に科學的見地からお考へになつても恐らく些の疑問の餘地のない事と存じます。先づ私の身柄から申上ねばなりません。

今、私は三十五歳で、身體も至つて強建で未だ一回も幻想の經驗などはありません。實際、私は常から錯覺とか、豫感とかについては疑心を懐いて居りました。

私は地主で自分の土地の耕作に従事して居ます傍ら政府の土地管理人を勤めて居ります。

一八九四年四月二十日午前七時半に私の母オルガ、ニコライナ、アルボソフは亡くなりました。併し、彼女の死前、何等死の近づいたといふ徴候も、懸念もなかつたのです。母は未だ五十八歳で、別段の異状もなく、元氣で居りました。そして親子共にコルングテブスコフ地方のフヌーコヴォ村の私の地所——現在も其處にゐます——に住んで居りました。

一八九四年四月二十日(母の忌日)は恰度復活祭の一日に當るので、その前日、私は二三の友人を訪問する爲めに出掛けました。その友達といふのは私の宅から二十吉羅米も離れた所に住ん

で居る者で、私は屢々彼等の家で夜を過ごして翌朝歸つたのです。併し、何ういうものかその日に限つて、何とも知れない不可解な豫感が涌いて彼等の家に泊らうとする氣がしないのです。そんな事から皆が熱心に引留めるのも憚はず、その晩は歸つて來ました。途すがら私は何となく不安でした。そして何かの不幸が近づいて居ると云ふ豫感に襲はれてゐました。歸つて見ると、母は例もの通りの元氣で數人の友と骨牌を弄んでゐましたので聊か安心したのです。

常から母は時々激しい頭痛を感じる事があるのです。是夜も母は頭が痛むといふので、尙容子を聴くと少し頭がづき／＼する丈だと答へました。私は常のやうに「御機嫌克く」と挨拶して寢室に引取り、間もなくぐつすり眠つて了ひました。

私の家は割合に廣かつたので、母と私の室は多少距つてゐました。この兩部屋の間には石の壁があつたのです。

翌朝(四月二十日)、私は冷汗でぐつしよりになつて、今見た計りの怖ろしい悪夢に強い印象をうけて眼を醒ました。事實、それは夢ではなくて幻影だつたのです。その時は丁度七時半(すぐ時計を見ました)でした。母が私の床に近付いて來るのを瞭かに認めました。そして私の前額に接吻して「悴よ！ 私は今死ぬんだよ！ お別れだよ！」と言ふのです。

私が飛起きて母の室に行かうとして居ると、俄かに家の中が噪がしくなり、人々の馳け廻る音を聴きました。是時、母の室附の女中が涙を流して私の室に飛び込んで来て息も絶々に、「奥様が只今お亡くなりました」と叫びました。

女中の話に依ると、母が七時頃起きて孫娘の部屋に行き、接吻を與へてから自分の室に歸り、例もの通り聖像の前に跪いて朝のお祈りを始めた時、動脈破裂の爲めに急死したのです。それは正七時半で、私が母の幻を見た瞬間でした。

親愛なる師よ！ これは是非貴方に御知らせしたいと思つた事柄です。若し貴下の御研究の上
に何かの御質問がありましたら何時でも御返事致します。實際この事件は既に貴下へ御報告した
様な氣もします。

露西亞、ブスコフ州コロムにて

アルクセス、アルポーソフ

茲に吾々の知識に向つて説明さるべき二つの苦しい事實がある。それは觀察者の語る物が何であらうと、その人の記憶の如何に依つてその表はし方を異にするかも知れない。或は又外國文字の構成の相違から多少誤て傳へられる事がないでもない。けれども、兩者の何れに拘らず事件は事件として獨存するものである。

先づ第一にこの記事は、科學的に認容する事が出来る。即ち凡ての點に於て良く均衡の保たれた元氣旺盛な人の經驗である。天文學、氣象學、又は化學上の觀察、或は他の實際の觀察と同様な注意を以て考察するのは吾々の義務である。こゝに吾々の研究の立場から検討さるべき二つの顯著な事實があるのだ。

アレキシス、アルポーソフ氏は、一八九四年の當時には未だ三十歳の血氣の人で、五十八歳になる母堂と共に露西亞の自分の邸に住んでゐた。彼は自宅から二十吉羅米程離れた友を訪づれ、そこに一泊して翌日歸宅する積りであつた。その晩、彼は恐怖に堪えない豫感の爲めに心臓まで擾亂され、友の引留むるのも振り切つて、翌朝を待たずに歸つて見たが、家には何の異狀もなく、母は愉快氣に友と骨牌を遊んでゐたのである。

そこで、最初豫感となつて彼を襲ふた隔感的感覺の原因が、抑も何であつたらうといふ事は極めて興味ある問題と思ふ。彼の母が多少頭痛を患へてゐたとは云へ、彼女の全體の健康が、その爲めに著しく毀された譯でもないから、原因が彼の母にあるものとは思はれない。吾人は悲しい訴へが肉體的又は精神的に送り出されて、それが遙か離れた所で、ある何かの形になつて聽かれたと云ふ例を知つて居る。アルポーソフ氏の場合では氏の心中に何等かの直覺があつた様にも思はれる。けれども二者

の間には心靈的相通の存在して居つた事は疑ふ事が出来ない。この場合では不可思議な未來の豫幻が伴つてゐるのだ。アルボート夫人は數時間後には死なねばならぬ人ではあつたが、恐らく彼女は自分の死期の近づいてゐる事は少しも覺つて居まいし、又息子にしても母の死などは夢想もしてゐなかつた事は言ふまでもない。

併し、吾人の内には瞭らかな常規の意識意外の或る物が存する。即ち「意識のない」又は「稍々意識のある」或は「感覺となつて現はれざる程の極めて微弱な或る物」——如何なる名稱を附するにもせよ、恚うした他の何物かゞ存在する事を見逃す譯には行かない。

それは實に、吾人の最も奥の方に存在する自我であつて、物質界を超越し、吾々の肉體の前に永久不變に存在し、而かも肉體とは全く獨立して居るものである。それは吾々の心靈であり、その作用は外觀的科學には解する事の出来ないものである。

次に第二の點を考察して見る。

この話の主人は名譽ある地主で、且つ政府の土地管理人である。彼は現在の境遇に充分満足して居る人である。そして何の煩ひもなく靜かに安き眠りに就いた。翌朝、彼が眼醒めた時、滿身汗で濡れて、恐ろしい夢魔に震へ戦いてゐた。一體それは何の爲であらう。彼の母は二室を距つた彼女の部屋

で死んだ。その母が彼の寢床に来て子の額に接吻して永い別れを告げたのである。

こゝに臨終の母自身の行爲は之を疑ふ事は出来ない。それは彼女の靈がその息子の靈に強く響いて、母の幻像を息子の眼の前に現はしたものと考へるのが至當である。併し、吾々はこの現象からして何等かの極めて軽い實體又は半實體——エーテルに類した物が死女の様装ふて母の部屋を飛び出し、息子の室に來たのだと速断してはならぬ。斯様な解釋は不必要である。けれども彼の母が自分の死を息子に知らした時に、實際自分の姿を現はした事だけは争ふ可らざる事實である。斷じて否定を容さない。

即ち、人體組織中には、心靈、思索する精神、心の意思、愛情、人格等といふ物の存在する事の證據とはならないものであらうか。これ等の觀察は大流星とか、雷とか或は充分に確められた肉體的現象の觀察と同様に確實であり、反駁し難いものである。母が自分自身を息子に感得せしめ、彼女の腦の心靈作用が彼女の像に依て表はされたのは兩者の心靈間に於ける交互作用である。

次に示すものも、前者と極めた類似した點がある。これも吾々の研究の爲めに心靈の超自然的作用を齎して呉れる。

「一八八八年十月四日、私の母はミツスーク、オザークから五哩離れた所の自分の家で、五十八

歳を一期として亡くなりました。その當時私は母の家から二十哩程もあるフォードランドに住んでゐたのです。私は二ヶ月許り母に會はずにゐましたが、その間母は各週一回は必度便りをして呉れました。母が命を落した晩、私共夫婦は一歳になる嬰兒を連れて教會に出来ました。十時頃でした。未だ教會が終らないで、人々が讚美歌を合唱してゐた時、私はなんとなく母に會はねばならない様な感じが強く起つたのです。そしてその中の大變熱苦し相にしてゐた人を見て、今、私の母が息切れの爲め、苦しい呼吸をして居ると云ふ暗示を得ました。ますますそれが明瞭に心に浮んで來るのです。もう私は一時も居たくまらなくなつて、妻にも告げず、嬰兒を隣室の人に頼んで、停車場に馳付けましたが、間に合はなかつたので、線路に沿ふて約七哩も歩き、又別の道に入つて漸く朝の三時に母の宅に着きました。つまり四時間余も通して歩いたのです。

母はたつた今死んだ許りでした。私は母の部屋の扉を叩きましたが返事がないので、勝手に開けて這入りました。是時妹がノックの音に目覺めた所でした。すぐ、「お母さんは」と尋ねますと、妹は平氣で「床に就て居られます」と答へるではありませんか。「お、お母さんは亡くなられたんだよ」と申しました。

私は既に母の死を確信してゐたのです。私共が母の寢床に行くと、母は疑もなく、數時間前に

本當に死んだのです。母が夜前床に就いたのは十時頃で、常よりも機嫌が良かった位で、翌日は妹と一緒に早く起きて、オザークに行かうとさへ約束して、快よく寢に就てたのです。

トーマス、ガリソン」

この話に就て英國心靈學研究協會に於ける調査の結果、妹、妻、並びに近隣の人々に依て立證された所を詳細に發表された。

何等既知の原因もなく、理由もなく、隣席の者に嬰兒を托し、妻にも話さず、折角出席した教會を飛び出し、二十哩の夜道を徒歩して死んだ許りの母の許に馳付けたのである。

瀕死の母の心靈が、息子のそれに作用したといふ事は最早疑ふの余地はない様である。そして、彼の情緒——それは何とも不可解なものではあるが、鬼に角差し迫つた事であると彼を直覺せしめた——を感じたのは本人の心靈であつた、母がこの作用を意識して居たか否かは吾々には勿論分る事ではないが、少くとも母子二人の間に心理的聯通があつたといふ事は拒む事は出來まい。これが吾人の肉體的感覺とは全く獨立した心靈に屬する超自然的作用と呼ばれるものである。

吾々は自由な研究を續けやう。吾々は此の記事を特に悲哀な豫感として分類すべき物であらうか、鬼に角、珍らしい現象である。

吾々はこの種の數百乃至數千の心靈的現象の中から、人間に未知のある力、未解の謎が存する事を立派に證明する材料を得やうとすると、實際選擇にまごつく程澤山ある。例へば茲に比較的最近の一例がある。それは予が本人自身の口から直接聞いた事である。

『巴里に住む一婦人（マダム、マリシャル、キユスター街二十番地十八號居住）が、一九一四年三月二十六日（木曜日）の晩、恐ろしい夢に魘はれて目覺めた時、臃ろな形のない一種の變怪へんけいが彼女の寢床に身を寄せて彼女の腕を掴み、二つの怖ろしい脅迫の中何れかを選べと命じた。それは「汝の夫か、娘か、孰れか一人は死を免れない。何れにする」と云ふのであつた。

「擇ぶんですつて？ それは出来ません。夫も、娘も、どちらも」と彼女は身を震はせながら答へた。すると變怪は、

「そりや駄目だ、是非一人は犠牲にしなければならない。早く擇べ」と彼女に迫つた。

婦人はどちらとも決する事が出来なかつた。唯だ、怖ろしい苦惱に捕はれ、悲哀に跳たくばかりで、實に名狀すべからざる狂亂の状態になつてゐたのである。彼女の夫は當時四十六歳で、充分健康な人であつた。彼はその晩彼女の傍らに寝てゐたのである。婦人と共にこの幻覺について予に話に來た時は、娘は十七歳の美しい少女であつた。婦人はその夫とこの娘に向て等しく強い愛着を有つてゐた事

は言ふまでもない。

けれども、變怪の脅迫は彼女の意思よりも更に強かつた。彼女は遂に一母としての愛は他の何物より強いもの……私は我兒より先に夫を犠牲にしたい」とうっかり獨言を言つて仕舞つた。

婦人はこの夢魘の事は誰にも話すまいと決めてゐた。この事あつて五日後、夫のマリシャル氏は、朝まで何んの異状もなかつたが、急に不快と疲労を感じると云つて彼の勤先の海軍電信局から歸つて來て床に就いた。水曜日に醫師に診て貰つたが、さして病氣の徴候も見えなかつた。醫師は軽い流行性寒胃だと言つた。然るに翌日になると彼の容態は俄に險惡の様が見えて來た。遂に土曜日には心臟が止まつた。迎も望がないと宣告された。夫は既にこの世の人ではなかつたのである。氏はそれまで心臟に故障を感じた事などは嘗て一度も覺えがなかつたと云ふ。

予は故らにマリシャル夫人とその娘に、或は別々に或は一緒に色々尋ねて見て双方の説明を比較し、彼等の不思議な告白の一點疑ふ餘地のないものである事を確めた。

拙著「ランコニー」（未知の世界へ）にもこれと同様な豫告的夢の例を引用してある。忌むべき不吉な現象ではあるが、吾々は如何に之を説明すべきであるか。

それはマリシャル氏が自身の健康状態に聊かの懸念がなかつたにせよ、彼はこの日に當然死すべき

運命であつたと想像するのが最も早い簡単な言ひ方である。吾々が死ぬ時、或る事情の下には單に吾々の未知の病氣の一回の終局であるに過ぎない。たとひ、吾々は己れの健康を確信してゐても、吾々の氣付かない病氣が次第に吾身を衰弱せしめて居るのである。妻の鋭感な副意識が無意識にこの状態を認めてその死を豫感したのかも知れない。吾々の心的人格は現在尙知られてゐないある力を賦與されてあるのだ。

これは無論説明的假説である。單なる假説に過ぎない。

吾々がこの假説を認容するにしても、何故に故らに妖怪の形を以て死を告げたかと云ふ事を考へねばならない。さうでないと言明が成り立たない。

今一つの假説は斯うである。

吾々は兎に角不可解な世界の眞中に住んで居るのであるが、そこには自然を支配する力、例へば引力、電氣、太陽や惑星の磁力等の様な眼に見えない、而かも現實に存在する物があるやうに、生物界にもその發生して居る現象を見たり、自らを表現したりする或る力や、未成の意識を所有する精神とか、思想とかいふ物が存在しないのであらうか。これは大膽な假説ではあるが、今告白された事件を理解する爲めには必要な假説である。つまり眼に見えない或る物が、眼に認められる物となつてマリ

シャル夫人に現はれたのである。謂はゞ夫人が手品師の様に要求された骨牌の一枚を當て出したのである。吾々は常に手品師が手に一ぱいのカードを差し出して自由選擇させるのを見る。併し吾々は他に代るべき札の無い時の外は大抵手品師の欲するカードを擇ぶ。吾々の想像する精神は死を宣告された者は纏て死なねばならぬ」と云ふ事を知つて妻をして自ら夫を擇ばしめた。

予がこの假説を想像してゐる間にも、尙それは不當な考である様にも思はれた。けれども全く許せないものと速断する事も出来ない。この假説から吾々は、彼の守護する天使は眼に見えないが忠實な伴侶であると基督教が教へてゐる事を思出す。それはこの場合に當つて居るか否うかは分らないが、兎に角、吾々の眼前には説明されなければならぬ事實が横はつて居る事は何人も打消す譯には行かない。

吾々はこの實際の觀察に一致する多くの事實の證據に依て、大氣、更に正確に言へばエーテルが未だ發見されない心的要素を含んで居る事を認めてもよくはあるまいか。空氣の化學成分が酸素と窒素である事がやつと十八世紀に發見された。而も當時は空氣の全成分がこれで完全に理解された積りで居つた。然るに最近に至つて未知の捕捉し難い元素——ネオン、トリプトン、アルゴン、クセノン等——が發見された。而もこれ等以外に尙一層分らない微妙な性質の元素が存在するかも知れない。吾

吾人類の心霊は毎秒肉體を離れて行く。併し、その心霊は果して滅するのであるか。吾々の肉體を離れた心霊が減びるといふ證據は何もない。恚うして肉體を離れ行く心霊は實に一日八萬六千乃至十萬内外を算するのである。從て十日にして百萬、百日にして一千萬、一年にして三千六百萬となる。ヱイクトル、ユーゴーの所謂「萬物は精靈に満ちたり」を信するのは恐らく詩人の虚構ではなからう。けれども、この心的要素は吾々の今研究しつゝある現象の説明に重大な關係を有つてゐるものではないからうか。

併し、茲に吾々の取扱つてゐる例としては第一の假説の方が最も眞に近い様に思はれる。殊に若し吾々の精神的實在物が自ら脱出し得るものであつて、夢の中に起る様に肉體から離れて吾々の意識外の形を取つて、しかも吾々と語り合ふ事が出来るものと考へるならば、それは一層眞實らしくなる。だが、これは最初は無意識であつて、目覚めて居た時幻覺となつた夢の場合である。

これから考へても、吾々の現に研究してゐる問題の極めて複雑であるといふ事が分る。予が夥多な例の中から故らこの例を提出したのは、本章の題目である「未知又は多少未知な精神の超自然的作」と云ふ事を事實の上に立證した迄であつて他に目的があるのではない。

この例は予の研究を助くる爲めに送られた報告中第四〇三三號に當るものである。

マリシャル夫人の例に類似した話が「エンヂリー」誌（一八九二年三月號）に、ミノー、サベツチ博士に依ても次の如く述べられてある。

「ニューヨーク州の或地方に、ハイデルベルグ大學に留學して漸く卒業した許りの青年が住んで居た。彼は性來想像力に缺けてゐるだけで、外にこれといふ缺點もなく、脊は高く、身體も至極強健で、常から運動家として名聲があつた位である。彼の得意な學科と云ふのは數學、自然科學、電氣であつた。彼が留學から歸國した當座は別段健康に異狀もなく、母と共に田舎の家になつたのである。或晩、彼は靜かに家に歸り、誰れにも口をきかずに、すぐ床に就いた。翌朝彼はまだ寢床にゐた母の所に來て、靜かに母の顔を撫で下ろして目を覺させ、そして「お母さん！ 私は今、あなたに辛い事を申上ねばなりません。何うぞお氣を慥かに持つて聽いて下さい」と言ひ出した。母は勿論驚いて、何事か起つたのかと訊くと、彼は「お母さん！ 私は間もなく死にますよ」と答へた。この意外な言葉に母は仰天しながらも詳しい譯を話して呉れと迫ると彼は、「昨晚、私が廣場を歩いて居る時、幽霊が現はれて私について歩いて來ました。そして私に、お前は死ぬと告げたのです」と語つた。

そこで母は心痛の餘りすぐ醫師を呼んで一部始終を告げた。醫師は丁寧に彼を診察して見た

が、何の異状も故障も認めなかつたので、「唯だ、悪夢に襲はれたのです。全くの幻覺に過ぎません」と明言し、そして「二度とそんな事を考へない方が良い。數日の後には貴方がたお二人で莫迦氣た恐怖を笑ひなさるでせう」と言つて歸つた。

翌日もこの青年は多少氣分が悪いとて再び醫師を呼びにやつた。醫師は唯だ彼等母子の無意味な恐怖心を嗤ふのみであつた。

三日目に病人の容體は本當に險惡な状態に陥つた。醫師はこの時始めて虫様垂炎と診斷した、そして手術を施されて二日後に、彼は遂に亡き人の數に入つた。この幻影と死の實現との間には五日しか経たなかつたのである』

人々は恚うした話を聽くと、この不思議な事實を單に「幻覺」とか「錯覺」と云ふ言葉で手軽に片付けて了ふ癖がある。彼等は可い加減に押さへつけて置いて、それで問題の解決がついたと考へて居る。如何にも幼稚な事である。

予は茲に、既に蒐集して置いた無數の研究資料に、更に新たに得た種々の珍奇な現象を加へて、そして吾人のこれから探究すべき未知の世界の範圍を示さなければならぬ。次に掲ぐるのは前の例とは全く趣きを異にした、而かも同じ様に不可思議な事實であつて、一九〇〇年九月二十二日コンスタ

ンチノーブルから寄せられたものである。

第九四三信

『足下、多年民衆教育の向上に多大の時間を捧げて、忠實に従事して居られる貴方の科學的御研究に對して敬意を表し、且つ自分の経験した二つの事實を御報告するのが私の義務と存じます。

私の縁戚に當る或る紳士が、ある日コンスタンチノーブルの私の家で、「何となくゼネバにゐる叔母が死んだ様な氣がしてならない」と私に申しました。それは朝の十一時でした。私は「叔母さんは常から病氣なのか」と尋ねますと、「彼女は十年も前にその家族と口論の擧句、別れてゐた筈だが、それ以來音信不通だ」と言ひました。それで私は、彼の懸念が何の意味もない妄想だと打消して、お互にその事に就て話し合つて居ると、彼の家の召使がゼネバからの電報を持って彼を尋ねて來ました。それには叔母が今朝七時に死んだとありました。

矢張り、この紳士ですが、去る七月三十一日の夜、突然何かに驚いて眼を醒し、妻に向て「伊太利王が殺された」と語りました。

妻は勿論それは夢でも見てゐるのだと思つてゐたので、夫の言葉に何の答へもしなかつた相です。翌朝、妻はその夢の事を夫に告げますと、彼は、「それは夢ではない。本當に自分が言つたの

だが、併し何ういふ原因から言つたのか自分でも分らない」と答へました。

その時、彼は窓口から港を眺めて、「警察船が皆旗を揚げてゐる所を見ると、伊太利王が薨去されたのぢやない」と妻に語りました。

それから一時間後に、彼は再び窓の所へ来て港内を見渡すと、警察船はすべて半旗を掲げてゐたので、彼は驚いて引返して来て、「ハンバード王が昨晚暗殺された事は矢張本當だ」と妻に告げました。彼は自分乍らこの奇しき暗合にすつかり驚いてしまつて、豫て精神病を研究してゐた私を訪ねて来て診察を求めたのです。私は種々彼を試して見て、毫も腦の故障を認めないし、またその徴候さへ分らないのでその旨を答へて歸しました。特に本人はすべての點に於て平衡の保たれた、そして、充分信用の出来る人です。

一面識もない貴方に直接御報告する事は失禮と存じますが、不惡御諒察を願ひます。

伊太利王立病院精神病醫

エル、ムー、ゲリー』

この手紙から、多少相異の點はあるが、極めて類似した隔感的現象の二つの例を得た。第一にコンスタンチノープルからゼネバまでは随分遠く隔つてゐる。而かも覺醒中に叔母の死を認めた事。第二には伊太利王の暗殺されたのを知つた事。この二者に對する説明は同一であらうか。第一例に於て

は、恐らく叔母と甥との間に特殊の流れが通つてゐたのであつて、第二例の場合には所謂一般の球狀波に依て傳達されたものと思はれる。だが、これを決定する事は困難である。何故かと云ふと、予は多數の例に向この面白い例を加へる事を得たに就ては博士に感謝するのである。何人もこれ等の事實を否定する權利はあるまい。そして斯かる明確な事例をさへ幻覺と見るならば、それは餘りに無感覺過ぎると言はねばなるまい。恰も正午に太陽の存在を否定するのと同様である。人類は吾々に取つてはまだまだ探索されない神秘である。實際、學校で教へる科學は、今日まで誤つた道を辿つて來た。眞に眞理を求むる者は、是れから發見され、決定され説明さるべき最も重大な靈魂といふもの、未知の力が、本當に存在する事を確信しなければならない。

吾人は虚心坦懐にすべての現象を研究すべきである。これが予の方針である。フランシスク、サーセーは、或日手相術に關する手紙を受取つたとて、それを予に示した。その手紙は一八九九年三月二十二日附のもので、大體次の様な文句であつた。(第八四一信)

「貴下の透徹した判断や、貴下の發表された卓れた方法、及び編年史中に於て、世に與へられた懇切な御忠言に對し、私は何人にも遜らない敬意を表はすものであります。けれども何人も凡ゆる事を知り盡す事は出来ません。卓越した特色と云ふべき常識の持主たる貴下は最初不測不可究

なものとお考へになつた事に尙没頭される様な事はあるまいと存じます。この點に於て彼の眞の科學的識見を有つてゐるフラマリオン氏とは全然正反對であります。彼は何事も検討しないで斥ける事をしません。

A. de M.]

この手紙の後には觀掌術に就ての議論を述べたててゐるのであるが、こゝには觀掌術の事は必要はない。唯だ予が特にこの文句を茲に轉載したにしても、それは吾々は何物を蔑視しない様に充分注意を拂ひ、そして何等の先入觀に妨げられる事なしに、本當に眞理であり、事實であるかを決定すべきであるといふ事を繰返して吾々の腦裏に呼び起さんが爲めである。サーサー氏は實に親切にも予にこの手紙を示して呉れた、それは彼はこれ等の現象を全く信じてゐないからである。

けれども、これ等の現象は數限りなくあつて、吾々には何うしてもそれを輕視する事は出来ない。精神の超自然的作用を論議し、立證する事は必ずしも容易な事ではない。次の書簡は一九二二年一月二十日、セツトから送られた例で、同時にこれは一般の人にそれ等の現象を理解せしむる爲めに、恚うした珍らしい經驗を有つてゐる人々から、一般に募集した方が得策であるといふ事を予に勧めて呉れた物の一つである。(第二二二〇信)

「或る晩、私はセツトのグラン、カフェーを出る時、親友の一人はまだ中に残つてゐた。彼は大

元氣で、懸念すべき容子などは微塵も見えなかつた。それは丁度十二時であつた。私は極めて快い氣分で床に就いた。恰も何事にも安心しきつた人の寝るやうに、充分な休息を得やうと思ふ外には何の不安も、懸念もなく、ぐつすり寢込んで了つた。

午前三時頃、怖ろしい夢に驚されて眼を醒した。そして床の上に座つた。私はこの時、友人の頭蓋骨が開かれ、最後の息を引き取り乍ら私を抱擁して別れの言葉を告げてゐる所を夢に見たのである。兎に角、怖ろしい幻で、今もそれを明瞭に眼に浮べる事が出来る。私は恐怖の餘り、着物をつけ、馳て往來の人通りの賑さで氣を紛らし、あの恐ろしい夢魘を忘れやうと、只管、夜の明けるのを待ち侘びた。その朝七時、私が外出しやうとしてゐると、友人のテオーボンが、彼の友人を訪問中、何んな事情があつたのか分らないが、兎に角、ある事件の後、窓から飛下りて、頭蓋骨を碎いて即死したと云ふ知らせがあつた。

私は今も今とて昨夜の夢の印象がまざ／＼と残つてゐる折も折、符を合はした様なこの知らせを耳にした時は、何んとも言ひ様のない愕きと怖れの爲めに、氣が遠くなつて、今にも氣絶する様な氣持がした。

吾が畏敬する偉大な學者である貴下に向て、私は事實以外の事は何も申上げない。この話も事

實その儘で、些の偽りもないのである。

セツト町公會堂事務員

ルイ、ペリーエ』

一一〇

吾々はこの幻影を何と解釋する。
陳述者の精神がその友の出來事を遠方から見たのであらうか。抑も亦、友自身が現はれてそれを示したのか。

吾々は遠い距離を隔てて視たと云ふ多くの實例を知つて居る。そこで自然第一の説明が起つて來る。

けれども、陳述者はその出來事を見なかつた。彼の眼に映じたものは唯だ頭蓋骨を碎かれて、息も絶え／＼になつてゐた友であつた。

併し、一方から考へると、若しその友が悲劇の瞬間に殺されたものとするれば、彼はこの時、恰も友の事を思つてゐたと想像することが出來まいか。

これは鳥渡考へると有り相もない事の様であるが、事實有り得る事である。友人が三時間前に彼と別れた許りであつた。兎に角、極めて複雑した問題である。

茲に妻がその夫の身に起つた椿事を、遠隔の他に在つて感知した顯著な例がある。これは「生ける

物の幻影」から轉載したもので、フィニステルのユヘルゴートの醫師オリヴィエ博士自身に關する話である。

「一八八一年十月十日、余の家から七哩許り離れた田舎に往診に行つた。夜は大ぶ更けて、その上暗夜であつた。予は薔薇の木で頭上にアーチを成してゐた四路を馬を驅つたのである。四隣は眞暗で、手綱の繰り様がないので、馬の進むに任かせて置いた。丁度九時であつた。突然、馬は四肢を迂らして、口端を地上に打ちつけた。同時に予は馬の頭を越えて向ふ側に投げ出されたのである。その時予は肩骨を碎いた。

この瞬間、家では妻が衣物を脱いで、寢床に就かうとした時であつた。彼女は何事か予の身に起つたと云ふ感じが強烈に湧いて來た。今はもう、じつとして居る事が出來ない。彼女は慌しく下女を呼んで、「早くお出で、大變な事が主人の身に起つた。夫は死んだか、でなければ非常な怪我をしたのだ」と言つた。けれども予の行先が分らないので何うすることも出來なかつた。仕方なしに彼女は、下女を傍に置いて泣いてゐたと云ふ。予が家に着いたのは一時頃であつた。予は召使を呼んで燈火を持ち來らしめ、そして馬の鞍を解かせた。この時、予は「俺は怪我した。肩を動かさない」と言つた。

一一一

妻の豫感はこの、に確められたのである。

一二三

フィニステールの醫　　ア、オリヅイエ」

予の蒐集した資料の中にも、之に類似した例、即ち所を異にして不幸や、出来事を感じた例が少なからずある。更に不思議なのは、實際の出来事よりも四十五分前に豫感した例もある。

茲に、人間の心靈の實在は物質に歸する事の出来ない、そして又、まだく研究の餘地のある心靈の力の作用と云ふ證據に依て明かにされた。人は今尙眞の性質を知らない。人には容易に測り得ない微妙な能力が賦與されてあつて、この能力が人間の進化につれて段々に發達して行く。つまり、古典學派は其進路を誤つて來たのである。

吾々は人體中に於て、單に最も顯著な、最も皮相的な、最も粗雑なもの計りを見、接觸し、解剖し、切開するに過ぎない。吾々はその内部に如何に玄妙極致な所があるかと云ふ事は今尙知らない。而もこの不可解な物こそ吾々の何うしても理解しなければならぬ物である。實驗的心靈の解剖は今日までの形而上學や、それを表はす諸言語に代るべきである。心靈に對する從來の似而非知識は、唯だ、言語の集積に過ぎなかつた。何世紀の間も吾々が満足させられて來た、そして實際何物も教へる所がなかつた單なる言語の下に、幾ばくの眞理が存するかを考へる時、吾々は何うしても今後の研究

方法を変へなければならぬと云ふ事を痛切に感じる。そこで、人間の心靈の力を検討する爲めには心靈の性能を顯示し、その實在を立證された凡らゆる實際的の觀察、次の如き逆説的諸現象の實相を出来る限り精確に考量しなければならぬ。

言語の交換なく、而も遠隔の地に作用する意思の力。

心靈の傳達——隔感。

精神に依る心的幻影——未來の豫幻。

死の瞬間——及び死後に於ける死の表示。

要するに多様な、而も各々獨立した凡ての觀察は、何れも人間内には物質感覺の本性と類を異にする能動的な心的元素の存在する事を立證して居るのである。

吾々は此處に、クリストファー、コロンブスが所謂西印度諸島に到達した發見した世界よりも更に新らしい宏大な世界に乗込まんとしてゐるのである。

催眠術を掛けられた者が、自分の少しも理解しない事を語る時、自分の嘗て知らない家を心で訪問する時、自分の關知した事のない問題を取扱ふ時、未知の國語を容易に話す時、言語に依らないで人の思想を聽取する時、遠隔せる人の思考してゐる事を感じする時、自己の心を遠方に送つて何も知らず

一二三

答もない場面を描寫する時、これ等は皆人間の單なる腦の作用であらうか。

吾々の判断を物質的現象、又は古い生理學に基礎を置く事は斷然止めなければならぬ。だが、一般の人は詮索の價値のない科學を超越した問題にまで先き走りをしたがる傾向がある。吾々は全然未知の事柄に對しては飽くまでもそれを問題にして、何處までも理論の上に立脚して行く事を忘れてはならぬ。

一八六五年頃、磁針の狂ひと太陽の活動との間に何等かの關係があると云ふ意見を持つてゐたのは、佛蘭西では殆んど予一人であつた。天文學者等——中には彼のル、ヴェリエと同様に有名なフェイ氏もある——は予の説が誤つて居ると駁した。彼等は地上の磁氣の狂ひと太陽の活動とが觀測された時偶然に一致してゐたのだと思つたのである。更に物理學者等は「太陽に磁力が有らう筈はない。何故なら鐵棒の磁力は熱せられると無くなるからだ」とさへ公言してゐたのである。

けれども、太陽は六千五百度といふ極めて高い熱を有つてゐるに拘らず磁心である。そして、現在（一九一九年）では、太陽の各黒點の磁力を測定する方法さへ發見された。斯様に科學は變化して行くのである。吾々は何事にも眞理を認め得るに至る迄には前途は尙遠慮である。始終觀察を續けてゐると誰れでも外觀と實際との間の差異が分るものだ。予は今、次の古い記録を見付けた。それは一九

一七年十一月十三日に認められたものである。

『寒い冬の朝、太陽は赤く燃えてゐる。大氣は半ば透明な霧で鎖され、木々の枝には尙ほちらちら緑の葉を残してゐるが、あゝ、美しい冬景色、萬物皆赤に黄に、そして赤裸々に。若し大氣の關係から太陽が常に斯く赤色に見えるものならば、吾々は、これが太陽の自然の色であると信じて居やう。誰も太陽の白きを見たものはない。凡て事理と云ふも、畢竟斯かる事に過ぎないのだ。吾々の印象は吾々の判断の自然の基礎となるのである。』

予は恚んな色に太陽を見て、斯んな考へを浮べた事は今日まで百回にも及ぼう。これが吾々の凡ての感覺の眞理であらう。』

予が茲にこの記録を引用するに當つて思出されるのは、「若し大氣が實際よりも一層不透明であるか、或は常に雲で蔽はれてゐるとすれば、太陽でも、他の天體でも未だ見たものはなく、太陽系は依然未知のまゝであつたらう。そして人類は絶対に眞理に無智であつたらう」といふ事を五十年間に何遍となく繰返した事である。

吾々は異常に精神感應し易い人を何う觀るべきか。實際、この種の人は存外に多いのである。ゲーテとシューマンはその著しい典型と云つてもよい。予は後で二重人格の事を述べる時にゲーテの例に

就て語るが、茲にはシューマンの経験した珍らしい隔感的現象を擧げる。それは彼が一八三三年、クラウウィークに寄せたものである。

「私の今受けた豫感に就て是非貴方に聽いて頂き度いのです。それは三月二十四日から二十七日迄の間私はある作曲に耽つてゐましたが、その間始終私につき纏つて離れませんでした。

私は作曲の或る一節に鳥渡行詰つて居りますと、誰か後ろの方で、腹の底から出る様な聲で、「あゝ困つた」と私の言ふ事を繰返してゐる様に思はれるのです。その作曲中も私は、葬具や、棺や、絶望した人々の顔の幻を見ました。そして作曲が漸く完成してから、その題を何んと附けたものと考へました。ふと心に浮んだのは葬送幻想曲と云ふのでした。自分乍ら途方もない題を撰んだものだと思ひましたが、何んとかなく悲しくなつて涙が出ました。それが何の爲めか自分にも分らなかつたのです。後で、テレゼの手紙を見て始めてそれと領うなづかれました。」

シューマンの義妹は、兄のエドワードが死んだ事を手紙で彼に知らせた。シューマンは初めの題を止めて「夜の曲」と改めた。

豫感は種々の形で現はれる。その例を一々引用する段になると、實際浩瀚な書物を成すであらう。茲に又、海峡の彼方に居る或る有名な婦人の経験した最も珍らしい一例がある。それは彼女がマイ

ヤ氏に告げだ話である。

『私はまだ十六歳の少女の折で軽い麻疹に罹つた時の事です。その時分私は祖父母と一緒に住んでゐました。父母からもう入浴しても可いと言はれるので、私は飛び上らん許りに喜んで、すぐ浴室に行き、着物を脱いで、今、湯に足を入れやうとする途端に、「戸を開けて」と云ふ聲がしました。而もそれが男の聲であつたか、女の聲であつたか分りませんが、兎に角はつきり聞えました。そしてその聲が外からの様でもあり、私自身から出る様にも思はれるのです。私は驚いて邊りを見廻しましたが、勿論誰一人居りません。すると再び「戸を開けて」と聞きました。私は何となく薄氣味悪く感じて來ました。そして「自分の氣の狂ひか、さもなければ病氣に違ひない」と獨言を申しました。けれども、その時は少しも不快な氣分はしないのです。段々氣が落ち着くと、私はそんなものには頓着しまいと決心して、また湯に浸つてゐると、今度は三度目の同じ聲を聞いたのです。私は屹度四度目のが來るに違ひないと思ひ、遂に飛び出して戸を開けてやり、再び湯槽に入らうとする瞬間に私は氣を失つて湯の中に横に倒れました。幸ひにその近くの壁にベルの網がかゝつてゐたので、咄嗟の間にそれを掴むことが出來たのです。女中が參りました時は、私の頭は湯の中に浸つてゐたと申しました。彼女はすぐ私を引上げて湯室から連れ出す時、

私の頭が扉に打ちつけたので始めて正氣に回つたのです。若し扉が締つてゐたら私は確かにそのまゝ溺死したのでせう。』

實に不思議な事である。この聲は何んであつたか、一體何處から發せられたのか、恐らく自分がまだ慥かに病弱であると考へてゐたそのうら若い乙女自身からであつたらう。兎に角、恚うした譯の解らない警告は實に多種多様である。實際吾々人類の心靈は現代の科學では理解の出来ない能力を有つてゐるのである。

然り、吾々の物質的實在の中に隠れてゐる精神的知力は唯だ今日まで吾々の間に周知の幾つかの例の中に表はれてゐるだけで、これさへ近代諸學派の盲目的生理學的懷疑論に依て極めて無雜作に説明されてゐるに過ぎない。こゝに亦、ジャンヌ、ダークの生涯に起つた面白い事件がある。

『ジャンヌが城に入らうとした時、彼女の悪口を吐いた兵士に向て「あゝ、お前さんは神を無視してゐる。自分の死が近づいてゐるのに」と語つた。その晩兵士は溺死した。

ある時、彼女はヴォオクールで、まだ一面識もないボードリクール郷の許へつか／＼進んで行つて、「私は自分の聲で貴方が此處に居る事を知つたのです」と言つた。

又、彼女がシニヨンで王に拜謁を許された時、王は宮臣の服裝をなして三百人の中央に居つた

が、ジャンヌはその中から直ぐ王を見分け出した。更に彼女は自分の使命を王に納得せじむる爲めに、特に個人謁見を乞ひ、王が既に獨りで神に捧げた無言の祈り——それは相續人の争ひに關する事であつた——をその儘王に復唱して王を驚かした。

チャールス、マルテルの槌がサン、カテリーヌ、ドフィルポアの教會に埋められてある事を彼女に告げたのも、オルランで甚だしい疲労の極、ベットに身を投げ出して、サンループ要塞の攻撃などは夢にも知らなかつた時、彼女を目覚ましたのも、一四二九年五月七日ツウルネル攻撃に投槍で傷けられると彼女に豫告したのも、皆彼女の所謂「自分の聲」であつた。

オルランの包圍の際、彼女はグランダルに向ひ、「貴方は三日以内に一滴の血も失はないで死ぬでせう」と豫告した。事實、グランダーはツールネル占領の際、ロアル河に墜落して溺死した。』

彼女自身の聲——それは何處から來るのであらう。彼女自身から發せられるものと見るのが最も至當のやうである。だが、これ等の聲は眼に見えない世界に密接な關係を有つてゐるのだ。

ジャンヌ、ダークは慥に超自然的能力を與へられた敏感な人の罕れた典型である。けれども之に近い人は澤山ある。

これ等心霊の表現は、近頃漸く實驗と云ふ方法に依て研究され始めたに過ぎぬ。こゝに吾々はこの種の現象が殆んど實驗し得るものではなくて、唯だ觀察——吾々の研究の對象範圍を著しく狭める——を爲し得るのみであると云ふ事を再び言はねばならない。又、地球上に於ける有機體の生活狀態は極めて粗雑、不完全なもので、それは常に雲霧で蔽はれて居る國で天文の觀察を試みんとする人の立場と同様な立場に在るのだ。

心霊の問題も物質的存在の問題と同様に、凡ゆる問題の中で、最も興味あり、又最も重要なものである事は否定する譯には行かない。何故ならば、この問題は直接吾々自身に關する事で、吾人の内的性質を明かにし、吾人々類の不滅、絶滅を決する重大問題であるからである。だが、兎に角、地上に於ける吾人の不完全な生活條件は益々この問題の研究を妨げてゐるのである。

次章に於て吾々は心的幻影と未來の出來事に關する豫告的幻影の否定すべからざる實例を研究し、そして又心霊の相通作用に就て、充分に確めやうと思ふ。

未來を精確に豫知する事、或は何百哩、何千哩隔つてゐる所に現に起りつゝある出來事を實感する事は、これ位當てにならないものはないと同時に、又これ以上確かなものはない。

時とは何か、未來とは何うして作られるか。そこに吾々の注意すべき價值ある問題は無限に在る。

従てそれ等の解説が全部完成される事はない。けれども吾々の好奇心はそれは研究する事に依て不斷に新たにされて行くのである。平凡な日常生活は智的動物を満足さす事は出來ない。何故ならば彼等が智的に生活する事はつまり二重生活をする事だからである。けれども彼等は矢張思想に依て生活する事を欲してゐる。吾々は何處までも比較研究を續けて行かう。

コルシカ島のカस्ताに居るサベリーといふ學識ある教師から一九一二年に次の手紙を送られた。

(第二三〇信)

『これ等の問題が讀者に非常な興味を與へる事は勿論です。私は茲に讀者の爲めに自分の考へを述べ、又今迄の様に貴方の御教示を仰ぎ度いと思ひます。

時の性質といふ問題は、解決の極めて困難な事に違ひない。ある人が時の定義を或る有名な數學者に尋ねたら、その數學者は「外の事に就て語らう」として答を避けた相です。けれども、私は更に疑ふ事の出來ない或る不可解な觀察に就てそれを貴方に報告するのが私の義務と存じます。

(一) 或る晩、私の父は友と一緒に歸宅の途中何處からとなく、婦人の泣き叫ぶ聲が聞えて來ました。父と友は屹度誰れか、殺害されたのだと想像したのです。そこで二人はその聲のしたと思はれる家の方へ行つて見ましたが、少しもそんな氣配もないので歸つて來ました。次の晩、同じ

家の前を通ると、前と同じ様な悲嘆の聲を聞きました。今度は本當でした。昨晚まで何の異状もなかつた小兒が晝から突然格魯布を患ひ、たつた今、死んだ許りの所でした。これは私の在動してゐる所の隣郡グイド、ハラソに起つた事です。

(二) 退役陸軍經理官ナボレオニ氏から次の様な經驗談を聽きました。

私共はある眞夜中、沈とした寂しい道^{みち}を歸つて來る途中、二軒の離れた家の前に差しかかる、何か物を叩く様な音が正しく間をおいて聞えました。そして、その音が夜の沈黙を劈いて如何にも物凄く響くのです。二日の後、再びこの家の前を過ぎると、又前の様な音を聞きました。それは村の大工で、彼は昨晚死んだ羊飼の棺に釘を打つてゐたのでした。

(三) コスタのマラスピナ博士が、マツソニ山賊に殺戮された當日、私の叔父コスタ、ミケランゼローは、全身が痲痺してしまつて、恰度、眼に見えない手で掴まれた様になつた相でした。博士はこの叔父の伯父なのです。叔父はまだ存命してゐますが、當時(一八五〇年)はバスチャの中學校の生徒でありました。」

この三つの事件の中、最初の二つは豫感で、最後の一つは感覺に屬するものである。そして後者に就ては拙著ランコニー(アルス發行「未
知の世界へ」)中に數多の實例を載せて置いた。兎に角、現代の科學の力で

は、これ等の現象を説明する事が極めて困難であり、また、容易に得心出來ないものであるが、さりとて反駁する事も出來ない事實である。若し恚うした種々の現象を何處までも深く研究して行くならば、自分の性質にさへ無智な極めて幼稚である吾々は自身の意識に必ずや一閃の光明を與へられる機會に到達するであらうと信ずる。されば吾々は決してこの問題を輕視してはならぬ。

事實、吾々は無線電信の發見に依て、近頃漸く隔感的相通の事實を理解する様になつて來た。然かも豫感の現象に至つては、たとひそれが、一點疑ふの餘地なき事實であつても、尙且、今日、まだ説明の道がないのである。それは主として、吾々が茲にその絶對的の證明を有つてゐる未來の出來事の幻影と、吾々の自由意思の感覺との間に在ると思はれる矛盾撞着に因るのである。

今、姑くこれ等の特殊の問題に觸れずに、唯だ茲に原則的問題として、或る事情の下に未來の出來事が明瞭に見られ、精細に描寫せられるといふ事實は、今後も絶對に疑ふ事が出來ないと云ふ斷定を與へ、次に斯様な觀察の事實は自由意思と一致して行くべきもので、決して其處に矛盾撞着のあるべき筈はないと云ふ事を附け加へて置きたい。時間なるものは吾々の單純に考へる様なものではない。時間とはそれ自身に於て存在してゐるのではない。時間は永却である。不動である。不變である。常に現在である。羅馬法王レオ八世の近親に當る佛蘭西のある大僧正は、或る日子と共にナンシーの庭

國を散策中、この問題に就て予と議論した事があつた。彼は豫感は自由意思と一致する事が出来ない
と主張してゐた。

予は、「貴方は神の存在を信じますか」と彼に尋ねた。そして「貴方は恐らく神の存在を疑はない方
と思ひます。貴方の先輩ヒツボの大僧正や、凡ての神學者はシセロと共に「神は未來を知つて居る」
と云ふ事を信じますね」と念を押すと、彼は「如何にも確かに」と言ふ。再び、「貴方は自由意思を認
め、基督教徒の責任を認めますね」と質すと、彼は「そうとも」と答へた。そこで、予は「然らば豫
感的の事柄を認むる事はその教義と如何なる點に於て相違してゐるのですか」と反問したのである。

時に過去はなく未來もない。唯だ現在があるだけだ。然らば現在とは何時を指すのか。現在の時間
か。さうではない。現在一瞬間の事か、それも當らない。そして一秒でも、十分の一秒でも、百分の
一秒でもないのだ。百萬分の一秒すら電氣學者には随分長い時トキなのだ。唯だ、諸君がそれで可いと認
むるなら、百萬分の一秒、それが現在プレゼントであり、眞の現實である事になるのだ。けれども、諸君は尙そ
れすら眞の現在と思つてはならぬ。

時はそれ自身に於て存在するのではない事は既に言つた通りである。時は唯だ、吾々の心靈の中に
於て、吾々の感覺に依つてのみ測定されるものであるから、事件の連鎖は恰度絶えず展開して來る現

在の様なものである。併し、吾々はこの眼前の推移に注意する爲めに、何等人間の意思の自由な活動
を妨げられる事はない。

けれども尙、非常に複雑した、そして極めて不思議な問題が依然として残つてゐる。この未來の幻
影は特に第八章と第九章に於て證明しやうと思ふ。

予は茲に繰返して言ふが、吾々は唯だ自分等の住んで居る世界の皮相面だけを僅かに知つてゐるの
みで、その内部實在に就ては殆んど推察さへ出來ないのである。事實、それ等の實在と吾々の心靈と
の間には今尙知られてない親和力、關係、交渉が在る。

予は本書の著述に關する書類や原稿の分類中に接手した私信を掲げて本章を結ぶ。發信者は今、土
木技師長として知名な人で、佛蘭西天文學會の終身會員であり、豫て性格の立派な、頭腦の冷靜な何
事にも公平無私な人として定評ある紳士である。

『貴方が未知の自然力に就て特に御熱心に研究されてゐる事を承知して居りますので、私は茲に
何かの御参考とも思ひ、次の二つの事件を、何の説明も、註釋も加へずに、事實そのまゝを申上
ます。一つは昨日、他は一昨年起つた事で、何れも私自身に關するものですから私としては絶對
に保證し得ると云ふ事に深い興味があるのです。』

第一の事件——私は豫て天文觀測用としてルロイ製の電氣時計を有つてゐますが、御承知の通りこの時計は電池装置に依て四年間動くやうになつてゐて、電池の利く間は決して止まる事はありません。私の研究室にあつた此時計も今日迄三年半動いて來ましたが、その間一度も故障もなかつたのです。然るに昨日友人達が私の宅で、この時計の置いてない別な室で音楽を彈奏して居つた時、私は何氣なく自分の時計を見て十二時二十分であつた事に氣が付きしました。單にそれ丈なら何の不思議もないのですが、その瞬間、私は不圖、四年間は持續する事を保證されてゐた電池でも、もう二三ヶ月の壽命しかない様な、そして今の中電池を取換へて置かないと迎も最後迄保てさうにも思はれないと云ふ考へが腦に浮びました。私は何うしてこんな事を不意に考へたのか、自分乍らその原因が解りません。そして、それ以上時計の事は考へなかつたのです。半時間の後、友達が歸つたので、再び研究室に來て、暫く經てから電氣時計を見ると、正に十二時二十分で止まつてゐたのを發見した時は、私は餘りの不思議な符合に唯だ呆然として居りました。電池はまだ使用し盡されてないので、只振子を振るだけで元の様に動きました。繰返して申しますが、過去三年半の間、實際一度も止まつた事のない時計です。」

この出來事は吾々の心靈が現在未知のある力に依り或る事柄を認知するものであると見るのが順當

であらう。さうでないと、觀察者自身がこの不思議な事件に不可解であると同様、恐らく予も觀察者以上に何等の説明は出來ないであらう。吾々は電氣時計の振子がばつたり停つた時、學識ある技師が無意識にこの現象に驚かされ、又無意識に自分の時計を眺めて、全く偶然にも電氣時計の事が頭に浮んだのだと想像する事も出来る。併し、事實さうではない。彼が感知したのは別の室であつた。到底振子の音など聞える筈はない。兎に角、電池がまだ効力を失はないのに時計が止まつたのは如何なる譯であらうか。塵の爲めか、乾燥のためか、抑も亦電氣の鈍つた爲めか、何等かの原因でなければならぬ。けれども、これ等の解釋ではまだ心靈的交渉を説明する事は出來ない。

『第二の事件——一年前の或る日、曉近い頃になつて、うとうとと兎角覺め勝ちな眠りを繰返してゐる時でした。夢の中にチユニスから來た一人の女を見ました。その女と云ふのは、私がチユニスに八年間居る間にたつた二回しか會はない人で、彼女の容姿などは殆んど記憶してゐません。そして私がチユニスを去つてから九年になりますから、十五年間も彼女に會はないのです。それに私は一度も彼女の事を考へた事もなければ、又彼女を思ひ出す様な原因もないから全くの無關心で居りました。而かもその女が突然私の夢の中に現はれたと云ふのは全く不思議でなりません。それから一時間許り經つて事務所に參りますと、更に意外にも所員がこの夢の女の名刺を

私に持つて来たのです。彼女はモロッコへ旅行の途中、臆気ながらもチュニスで私に會つた事を思ひ出して、私が今尙此處に居るか何うかを知る爲めに立寄つたのだと云ふ事が分りました。そしてこの女を乗せたボートが、タンジールに入つた瞬間に私の夢に現はれたのです。彼女が船に居るなどとは私には全然知らう筈はないのでした。

右は貴方の御研究の上に多少の御参考になるか何うかは分かりませんが、唯だこの事實の確かな事だけは絶対に保證致します。

貴方は既に私は科學者であり、従て自分の受けた感覺に就て充分に考量したと云ふ事を御承知と存じます。

二つの中一つでも計算の上から、その確率を見出され、それが全く偶然の符合であらうと云ふ可能性を説明する人があれば、これは眞につまらない事柄になつて了ひます。

一九一八年七月六日タンヂルにて

モロッコ政廳土木局技師長 ポルシエ、パネース

この第二の事件に就ては吾々は先づエーテルの波動から説明しなければならぬが、この事は後章隔感作用の場合に述べやうと思ふ。

要するに、未來の科學は現代の科學に今尙未知で、又今日まで殆んど眞に研究されなかつたところの心靈の能力を、飽くまで説明する事を見めなければならぬ。

次章に研究するものは、心的暗示、隔感、所を異にして起る心の傳達とその意思作用。心靈に因る幻影。未來の幻影である。そして是等の明確なる幾多の證據は明らかに肉體的感覺の力とは獨立して精神の靈的存在を立證するものである。

心靈と肉體とは各々異なる特性を賦與された全く別な實在なのである。

第五章 言葉もなく合圖もなく、而も遠方から作用する意志の力

科學は嚴正なり、苟も科學の名を存する限り、この前に淡然現はれて来る凡ての問題を絶対公平に見ればならない。

(サー、ワイリアム、トムソン)

吾々の心靈の力は種々様々の方向に表明されてゐるが、中でも、かの「言語に依らず、合圖に依らず、而も遠隔の地から働く人間の意思の力」は確かにその顯著なるもの、一つである。」

意思はその本質からいふと、非物質的な官能であつて、吾々が一般に物質と言つてゐる物とは全く異なつたものである。人はその心靈の力を通じて他人の腦に作用を及ぼす事が出来る。劇場に於て、或は教會に於て、自分は他の人から數碼も離れた後方にゐて、前の人をこちらに振り向かせる事が出来る。この場合に於て、彼はこちらで自分が何んな考へを有つてゐて何んな動作をしてゐたかを知らう筈がないのである。恚うした經驗は澤山にある。全くの偶然の場合を除いて、まだ少しも知らない

他人に關する事だけでも信用す可き實例が可成り多く發表されてゐる。

その人が實驗者に常に接してゐる知己の場合には、更に多く起るものである。だが、場合の何れを問はず、距離を隔て、も尙確かに意思の力が働くと云ふ事が證明される。

唯物主義の批評家は、かゝる事は腦の或る未知の感覺の作用であつて、この作用は決して心靈の起因とはならないと言ふかも知れぬ。この反駁論に答へる事は至つて易い。腦は物質的器官であり、更に又、電氣仕掛の様な物である。その器械の背後、即ち腦の後方には人格が存在する。予が演説する時、先づ演説なるものを考へる。それが原因であつて言語はその結果である。この器械即ち氣儘な、氣紛れな、而も一面には推理的な、又反省的な、責任ある精神的人格なるものを賦與されたところの腦を想像すると、自らそこに何うしても一つの假説を呼起す事になる。吾々は先づ、それから證明して掛らなければならぬ。吾々には眞理を理解させるところの吾々自身の感覺といふ物が果して存在しないのであらうか。

五感即ち視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺の作用に於ては振動は外界から來り、視神經、聽神經、嗅神經、觸神經の媒介で腦に傳達される。所が、或る距離を隔て、思想を傳ふる意思の作用は五感とは全く反對に、その振動が腦から外界にあるのである。即ち腦の中には能働的原因——心靈が存在する

のである。

心的暗示に關する著書は今日まで可成り相當な物が出てゐるし、又それを證明するに充分な例も澤山紹介されてある。予自身も亦、ラ、サルペートリエールで行つたシャルコー及びラ、シヤリテで行つたルイ博士等の實驗を始め多數の場合を親しく觀察した。中にも最も驚異を感じたのはハーヴルでやつたピエール、シヤネの實驗であつた。それは當時少しも神経を病んでゐない極めて善良な、そして實直なある農家の主婦に試みたものである。彼はその農家から、七哩も離れた所から、その女に向つて心で命じた事を完全に了解せしめ、その通りに行はしめたのであるが、豫めその事を感知せしむる様な處置は毫も取らなかつた。

意志は人格、個性、精神、心靈を表はすか。これは單に腦の物質に具つた物理化學的の力をのみ認むる解釋よりも更に一層確實な解釋をなしてゐるのではあるまいか。「我」と云ふものが存在するか。この質問をなす事が既に「我」の存在を自から答へてゐるものである。

吾々は茲に心的暗示の實例を綿密に觀察研究して、言語身振りと言つた様なものに依らず、只意志を通して、一人から他の人に傳達される心の命令に依つて人間の人格を明瞭に表現するものであると云ふ事を證明しやうと思ふ。

讀者は次のオコロウイツ博士の有名な實驗の模様を了解したならばこれ等の問題を最も公平に判斷する事が出来やう。

博士は曾てヒステリーの癲癇を患つてゐた一婦人を引取つた事がある。その婦人は長い間の患ひで終には自殺狂の發作を見ると云ふ程度の重態に陥つたのである。

二十七歳になる彼女は、元々強健な質で、體格も立派な、一見して完全な健康體の人である事が分る位である。彼女は快活な、元氣に充ちた氣質の中にも、内には極めて鋭い道德感を有つてゐた。彼女の性格はあくまで眞實で、善良で、献身的な傾向もあつた。彼女は又、珍らしい才媛で、何事にも堪能で相當に觀察力も有つてゐた。そして或る時は餘りに意志が弱くて、端からいら／＼する程優柔不斷な所があるかと思ふと、ある時は意外な決斷を示す事がある。けれども些細な心の疲れや、ほんの何でもない事でも不意な刺戟に遭ふと、それが喜ばしい事であらうが、痛ましい事であらうが、その爲めに直ちに彼女の血管運動に反響して一種の病的發作を惹起し、或は神経の發作的失神状態を招くのであつた。オコロウイツは次の如く書いてゐる。

『或る晩、精神錯亂の發作が止つた後で、患者は靜かに眠りに陥ちた。すると、間もなく俄かに眼を覺まして、彼女の友と私とが傍に居るのを見て、自分一人の看護の爲めに貴方達を疲らして

は濟みませんから、遠慮なく此室を引取つて呉れと言ふのであつた。それが餘りに執拗く彼女が希望するので、私共は強てそれを拒むのも彼女の神経を亢奮させる事と思つたから、仕方なしに二人は立去つた。私は悠つくり階段を下りて來た。患者は四階にゐたのである。その時私は何となく間違ひでも起りはすまいかと云ふ豫感が浮んだので、時折立止つて耳を傾けた。それは彼女が數日前、幾度も自分で吾身を傷けた事があつたからである。私は中庭に來た時、患者の傍を離れてゐる事の可否に就て再び心配になつた。この時上の窓が突然開いた。見上げると患者の體がはや乗り出して居る。私はすぐ彼女が墜ちて來るかも知れないと思はれる場所に馳け寄つた。私は別段にしやうと思つてしたのではないが、唯だ機械的に私の全意志を集注して、墜ちてはいけないと止めた。それは本當に狂氣じみた事である。恰度、今撞いた許りの球の失敗を豫想して、失敗つたと思つた途端に身振りとか、言語に依つて球を止め様とする時の動作を眞似たに過ぎないのである。

だが、不思議な事には、大分身を乗り出した彼女は、この時すつと引退がつた。それから四五回同じ様な事を繰り返して試みた様であつたが、何れも決行するに至らずに、果ては疲れたやうにまだ開いてゐた窓の縁に脊を當て、じつと立ち止つてゐた。

彼女は蔭にゐる私を見る事は出來ない。殊に夜である。この瞬間、患者の友である某嬢が飛び込んで來て彼女の腕を捉へた。私は彼等の揉み合ふ音を聞いて階段を馳せ上つた。患者は私共の見分けもつかず、無頼漢だと感違ひをしてゐた程狂氣して居つた。私は卵巢壓迫を試み、漸く彼女を跪づかせて窓際から引離すことが出來た。彼女は數回私共を打たうとした。けれども辛うじて再び寢臺に戻して終に眠らせたのである。

彼女が催眠状態に入るや否や、先づ「難有う御座いました。お許し下さい」と言ひ出した。それから、

「私は窓から飛び下りやうとすると、その都度自分が下の方から支へられてる様な氣がしました」と告げた。そこで、

「それは一體何ういふ譯ですか」と訊ねると、

「存じません」と答へた。次に又、

「貴方は私の居つた事を知つて居なかつたでせうね」と念を推すと、

「えい、存じて居ります。初め、貴方が本當に立去られた事と思ひましたので、飛び下りやうとしたのです。けれども何うしても貴方が、傍に又は後にお居でになつて、私を飛びおろすまいと

なざる様な気が致しました」と答へた。」

同じく彼女に絡まる今一つの例がある。

「私は一日おきに患者を眠らす事にして、その熟睡を見計つて記録を取つてゐたのです。そして二ヶ月間の経験の結果、私が眞の夢遊状態に引入れやうとして彼女に近づいて行くまでは、彼女は少しも氣を亂す様な事はないと云ふ事が分つた。この日私は二、三の記録を取つた後で、今までの姿勢——私は彼女の後方數碼、彼女の眼の届かぬ所にゐて、ノートを膝の上に乗せ、左手で頭を支へてゐた——を變へないで、ペンを走らせ書く風を装ふて、ひそかに私が心で彼女に與へやうと思つた命令に全意思を集中してゐた。私は心で、

(一)「右の手を擧げなさい」(私は左手を額に當て指の間から患者を見てゐる。)

一分後……何の動作もない。

二分後……右手が震動する。

三分後……震動増加して、患者はその唇を擦つて右手を擧げた。

此の實驗は是れ迄の中で一番私を驚かしたものである事を斷つて置く。予は再び始めた。

(二)「立ち上つて私の所へ來なさい」

彼は眼を擦つて靜かに立ち上り、手を伸ばして重々しげに私の所へやつて來る。私に何んにも

言はずに彼女を元の場所に連れ返る。

(三)「左手の腕環を外して私に手渡しなさい。」

何の動作もない。

暫くして彼女は左手を伸ばし、立ち上つて某嬢の方へ行き、それからピアノの方へ歩いた。この時私は彼女の右腕に觸れ、少しく左腕の方に押した。その間私は自分の與へた心の命令に注意を集中してゐた。彼女はその腕環を脱つて何か考へる様であつたが、終にそれを私に手渡した。

(四)「立ち上つて卓の傍の安樂椅子に來て私の傍にお坐りなさい。」

彼女は立ち上つて眼瞼を擦り、私の方に歩いて來た。そして、

「私は何か他に爲なければならぬ事があります」と言つた。

彼女は何かを探してゐる——卓に觸れて見た——茶のコップを動かした。

彼女は又もこちらの方へ戻り、満足の微笑を浮べつゝ、安樂椅子を掴まへてそれを卓の方へ押し行つた。そして疲れて力なく座つた。」

すべてこれ等の命令は私が心で與へたのであつて、決して身振りや、言葉で表はしたのではない。』

オコロウイツツの著書中には、この種の四十一件の経験が載せてある。

讀者は已に私がランコニー(アルス發行「未
知の世界へ」)の中、ある心靈が他の心靈の上に及ぼした心の作用の章に於て發表した幾多の實例を承知して居られる事と思ふ。

意志の作用や、心の暗示に關する斯かる確かな經驗は、物質や、化學的結合、機械的運動に歸する事は出来ない。それ等の原因は思想であり、心的原因であり、又吾々に未知な形の下に作用する心靈的原理である。彼の無線電話の事を考へよ！

心の暗示に就ての是の種の例は、久しい以前からメスマルに依て研究されて來たが、その前にはファン、ヘルモントが研究して居つたのである。茲に陪審官であり、學者であるザイフェルト氏の述べた顯著な例がある。最初、彼はメスマルを香具師位に見てゐたのであるが、次の事件の真相を了解するに迫んで遂にメスマルの説を認容するに至つた。

一七七五年洪牙利のホレツキー、ド、ホルカ男爵の舊城で行つた事である。メスマルは男爵に催眠術を掛け、その模様を觀ながら他に診察を受けに來た二、三の患者に應接して居つた。ザイフェルト

は何處までも彼を山師だと考へてゐたのである。

或る日、數枚の新聞が來た。その中の一枚にメスマルに關する記事が載せてあつた。それはメスマルが隣室に匿れてゐて、唯だ彼の指を患者の方に向けただけで、その患者に痙攣を起させるといふ事であつた。ザイフェルトはその新聞を手にして城にやつて來た。恰もメスマルが紳士達に取圍まれてゐた所であつた。彼は新聞記事の眞否をメスマルに質した。メスマルは相違ないと斷言した。そこで彼は無遠慮にこの壁一枚を通して作用する感應の實驗を要求した。メスマルは諾した。

「メスマルは壁から數呎離れて立ち、ザイフェルトは觀察者として、實驗者と被實驗者との兩方を視得るやうに半ば開いた扉口の所に身を置いた。

メスマルは先づ人差指を患者の方向と思つた方へ向けて數回矩形の運動を始めた。間もなく患者は噉々言ひ出した。彼は脇腹に手を當て、苦しんでゐる様子が見えた。

ザイフェルトは患者に「何うかしたのですか」と尋ねた。彼は「私は氣分が悪い」と答へた。ザイフェルトは更にその模様を訊くと、「私の體中のすべての物が右から左へ揺れる様に感じます」と言つた。そこで、一々質問する事を避ける爲めにザイフェルトはその患者に向つて「體内の感じをその通りに詳しく話して呉れと望んだ。二、三分の後、メスマルは彼の指で楕圓運動を

始めた。その時患者は「あゝ、何もかも圓くなつて私の周りを廻つてゐる」と叫んだ。

メスマルはすべての動作を止めた。すると殆んど同時に患者は最早何も感じないと言明した。即ち患者の動作の瞬間や、その間隔ばかりでなく、その行爲までも凡てメスマルの患者に施さうとした意志とよく相應して居つた。(オコロウイツツ著「暗示に就て」の中に引用されたカーネル著「フランツ、アントン、メスマル」中の記事)。

予は亡友巴里工藝學校のローシヤス大佐やニースのバルテイ博士その他の實驗者に依て行はれた同様な事例を知つて居る。兎に角、離れた場所に在つて意志の作用する事は、實際この問題を研究した人々に依て證明される様に何等疑ふ餘地は無いのである。

十七世紀の卓越した醫者であり又、有名な幻想者であるファン、ヘルモントは夙にこの問題によく精通し、既にメスマルよりも前に此に關する意見を發表して居る。彼はすべての人は所を異にしてゐても自分と同じ様な人々には自分の意志を感應せしむる事が出来る。唯だこの力は常に「肉」に依て抑へ隠されてゐるものであると信じて居つた。故にその目的を達する爲めには施術者と被術者との間に相通するものが必要である。被術者即ち患者は先づ鋭感でなければならぬ。そして又彼の内的想像の力に依て彼自身から進んで動作を迎へる程に感覺が慣れてゐなければならぬ。此の不可思議な動作

を特に鋭く感得するものは胃腔である。是れ胃の感覺は指とか、眼とかの感覺よりも一層微妙であるからである。時には患者は胃の邊に手を當てる事が堪へられなく感ずる事がある。

彼は尙、次の如く書いて居る。

「私は今まで大なる神秘の扉を開く事を期待してゐた。それは人間にはその意志或は想像の力に依て自己以外のものに作用し、又遙か離れた對象に永續的な感應を印象させる能力である。この神秘的な力——能力こそ理解に困難な肉體の磁性と力、人間の精神力とか、その宇宙支配等の問題を始め種々の問題の上に充分な光明を投ずるものである。」と。

ファンヘルモントは一五七七年から一六四四年迄存命した人である。

一六四一年羅馬で發刊されたキルヘルの著書中にある動物磁氣に關する章を開いて見ると、「同情と反感」「人間同志の磁性作用」及び「音樂の磁性」等の例がある。

斯様な心的經驗は今に始まつた事ではなく、遠くイエス、キリストや、ピタゴラス或はそれ以前に溯るのである。

だが、心の暗示とは何であらうか。

催眠術者は彼等の意志がある「流れ」となつて集中し、その後阿片包の様な風をなして最も近い

方向に放射するのだと信じて居る。この流體は極めて容智で、從順で、一たび流れ出ると正しい道を辿り、角を曲り、目指された人に當る。そして、その目的物を占領してしまひ、充分にその物に浸透した瞬間に睡眠が起るのであつて、相手が遠からうと近からうと、距離はこの作用に毫も關係がないのだ。これは全く明瞭な事であつて、モリエールが、「阿片が人を眠らせるのは、それが眠らせる力を有つてゐるからだ」と云つた古い説明と同様に最早議論の餘地のない事である。

この事に關してオコロウィツツは下のやうに書いて居る。「吾々は先づこの流體の存する事を究め、そして、それが射出される事を明かにし、次にその進むべき道を發見し得る事を確め、然る後、それが目指された人の神經組織の中に正しく止まり得る事を證明しなければならぬ」と。併しこれ等はすべて既に予が一八六五年以前に提案して置いた「心の力」と云ふ説明の中に入れて了つた方が妥當であらうと思ふ。

要するに、それが如何なる傳達の様式を取るにしても、精神が他の精神に働く心の作用に就ては更に疑ふ事は出来ない。

觀念は自ら進んで行くのか。それはエーテルの振動に依て傳へられるのである。吾々は既に觀念がその動的相互作用を到る所に、即ち放射物の様に、有らゆる方向に放射される事を知つて居る。それ

は輸送される物質ではなくて傳播する波動である。そして、作用は一般的ではあるが、唯だその轉換するに適した環境と必要な條件とを見出すまでは先方に感知されないで居るのである。この波動はAなる意志から出るとして、Bなる脳が必要な條件を有つてゐるとする。そこで相通する觀念にはBの中に作用して、Bは催眠術をかけられた様に眠つて了ふのである。

或る人は、作用の範囲内に在る敏感な脳は何の故障もなくすべて感應すべき筈であると言つて反對するかも知れない。けれども事實さうではない。人の脳は常にそれに適應する様に慣らされてゐる譯でもなく、又豫め發信者と交渉があるのではない。つまりこの關係といふのは發信者の動的氣分と、受信者の受け入れる調子とが相通すると云ふ事に存するのである。

心の暗示と思想の傳達とを説明する爲めに、嘗て催眠術者は一つの電流が物質的接觸なしに、他の電流に感應せる様に、又は無線電信の場合のヘルツ波の様に感應作用に依て傳達されるのだと云ふ假説を提出したのである。

遠距離の心の作用は意識される事もあり、されない事もある。

三十年前、心靈學者達が觀察の結果として、恐る／＼持出した提議は、その當時に於ては大に論議の餘地ある問題とされ、而も自らその道の知識を誇つてゐた學者達からは再度ならず懷疑の苦笑を以

て輕蔑されたものであつたが、今日では最早問題ではない。今や吾々は無線電信の發明から、それと同様な傳播の作用さへ見るのである。左に無線電信の作用をその大體に就て述べると、

無線電信の作用は吾々の今まで述べて來た以心傳心的現象などよりも、恐らくもつと不思議な現象であらうと思はれる。吾々は今日強大な發電機によつて饋電された強力な蓄電器の間歇放電によつて起されたヘルツ波を使用する。この波は一秒間三十萬基米の速度で空間に擴がる無線電波は送信装置に聯がつてゐる空中線から放射され、遠距離に在る同じ空中線に依て收容される。空中線は外物よりの電氣的接觸から完全に隔離された一本又は二本の線で出來てゐるもので、それは唯だ送信装置と受信装置とだけが通ずる様になつて居る。

無線電波は吾々には作用しない。吾々の現在有つてゐる感官ではそれ等の波を感じるものはない。故にそれを聽く爲めには特殊の装置が必要である。この装置が即ち檢波器であつて、無線電波は同調管とこの檢波器に依て調節され、受話器に依て吾々の耳に聞えるのである。電波は恰度池に石を投げ込んだ時出來た波の様に、波長と呼ばれてゐる一定の距離を以て擴がつて行き、そして特殊の装置に依て受話器の所で適當に變化される。けれども、受信する方では出來る丈波の強さを大きくし、音を明晰にする爲めには發信装置と調子を合せなければならぬ。無線の

術語を籍りて言へば合調して居る事を必要とする。

この合調は受信所に於て空中線と檢波器との間に受信變壓器を置く事に依て得られるのである。

斯くして技手は受信所の最大波長に一致する位置を求める。同時に異なつた波長を以て通信してゐる他の放送所からの電波を完全に防止する事が出來る。この波長は調整器の位置と蓄電器の容量の如何に従つて受信装置に作用するのである。

種々の波長によつて送り出された色々の通信はすぐ耳に入らないが、同時に空間に傳播して行くのであつて、吾々がそれを受信せんとする爲めには受信装置を調節すれば可いのである。斯くして少しも他の通信に妨げられる事なく二人だけで對話してゐるのと同じである。

最近の無線電信(又今日の無線電話)の發明は、吾々が遠方へ思想を傳達する方法を了解する上に尠なからず助けとなつた。科學は今後更に多くの發見をするであらうし、從て色々の現象に對する説明法も自ら變つて行く事であらうと思はれる。現在に於て説明出來ないからと云つて、すぐそれを否定する事は確かに間違つてゐる。例令今日の物理學で發見されないとしても、人間の意志が遠方に通じて感知させる事が出來る。吾人は既に心靈の存在、そして腦がその活動機關であると云ふ事實を立

派に證明されてゐるのである。

一九一四年から同一八年までの彼の歐洲大戦役の間に、予はジュヴィシーの自分の天文臺から無線電話でエツフェル塔と通話して居つた時、二人の通話者は恰も應接間か、講堂にゐる様に明瞭に話し合つてゐるのを聞いて少なからず驚かされたのである。當時まだ一般に知られてなかつたとは言へ、彼のモールス式電信の様な手数のかゝる廻りくどい通信法ばかり見て來た眼には、何等導線に由らず、エーテルの中を通つて來る電波に依て音聲がはつきり聞えるこの新發見に驚異を感じたのは無理ならぬ事である。この電話は音聲を傳へて來るのではなく、再び音聲に變はる電波である。

そこで、吾々は多少隔つた二人の間の思想の相通が實驗的に確實である事を知つた。

吾々は又、隔感的事實の觀察から遠方に居る瀕死の人の精神が、屢々その精神を向けられた人の腦にある著しい印象を與へ、そしてそれが單に言葉となつて表はれる許りではなく、その人の姿を見せ、又は何かの形状となつて映じ、而かも、時には恐ろしい音までも伴ふ程の強さを以て作用する事があるのを知つた。

これは哲學的思索の上から見て、僅か三十年前には吾々の夢にも豫期しなかつた宇宙の一つの新現象である。

自動力のない物質はエネルギーの眼に見えない放射に依て消滅する。宇宙の生命の中に存在するものはエネルギーであり、エーテルの力であり、運動である。

予はランコニー(アルス刊「未知の世界」三六九頁)に次の様に書いた。

『吾々の心理的力はエーテルの運動を生み出す。そしてこのエーテルの總ての運動の如く、遠方からそれ自身を運び來り、吾々自身の運動に和して腦に認識される様になると云ふ事は最早疑ふの餘地はない。心理的作用がエーテルの運動に變つて了ふ事は、恰度電話に起る現象と似て居る。兩端に在る同一の受電板は音響からでなく、電力で傳へられた特殊の高い音の運動に變はる事がある。併し是は單に壁に過ぎない。』

一人の心が、遠方に居る人の心に通ずる作用、就中死の作用の様な眞摯な場合、特に急死の場合に於ける思想の傳達、精神の暗示、遠距離間の相通は總て是れ、恰も鐵に對する磁氣の作用、海に對する月の影響、電氣に因る音聲の傳達、分光の結果、星の化學的構造に關する知識の革命、又は現代に於ける總ての科學的發見と同様に、奇蹟的なものではない。唯だ心理的相通に關する事は上述せる科學的研究や、發見に比して更に程度が高いのである。そして吾人は今、纔かに其の研究の第一歩を踏み出したに過ぎない。

これは予が一八九九年に書いたのであるが、而かも今日とてこの考へに毫も變りはない。否、無線電信や電話の發明に依つて一層その信念を強められたのである。

意志が單に思想のみを通じて作用した例は、予の同僚であるシユモール氏がその妻君に行つた次の實驗に依て示されてゐる。

「一八八七年七月九日は暖かい、併も風の荒い日でした。私は食堂に吊つたハンモックの上でグルネー氏の書いた或る小冊子を読んでゐました。午後三時頃、私の傍には妻が安樂椅子に横になつてぐつすり寝込んでゐました。この時私は不圖、心の力で彼女を醒まさして見やうと云ふ考へが起つたので、私はこの以心命令に全意志を集注して、ちつと妻を見据えて、心の中で、「起きろ、起きて呉れ」と叫びました。三、四分間経つたが何の反響もありません。妻は依然靜かに眠つてゐました。私は「これが成功したら素破らしいものだがな」と獨語を言ひながら、一度は斷念しましたが、數分の後、もう一度やつて見たのです。矢張り駄目でした。最早實驗の事はすつかり諦らめて了まひ、再び本を読み始めて、後は何も考へてなかつたのです。

十分許り過ぎてから、妻は俄かに眼を擦り乍ら起き上り、如何にも驚いた様な、また幾分煩さ相な顔色をして私を見て、

「何んか御用なの？　なぜ私をお起しになつたの？」と言ひ出したので、私は

「俺は何んにも言はないよ」と答へると、

「いゝえ、被仰いました！　貴方は今まで私を起さうとして私を苦しめて被在したわ！」と彼女は言ふ。

「それは冗談だ、俺は先刻から口を開いた事はないのだもの」と諭すと、それでも彼女は尙、怪訝な顔をして、

「私は本當に夢を見たのかしら？　さうだ、矢つ張り夢を見たんですよ」と漸く覺つたらしい。私は笑ひ乍ら、

「それは面白さうな夢だな、一體何んな夢？」と聴く。すると彼女は、

「私は甚く嫌な夢を見たの！　何んでもクールブアの十字街に居た思ひました。風が強くと空が曇つてたやうでした。不圖、人間の様な形をした物……男だか女だか分らないが、白い布を纏つたものが坂の下へ轉つて行きました。そして一生懸命に起き様としてゐるのですが、中々起きられさうもないので、私は助けてやらうと思ひました。初めは解らないものが私を緊かり掴へてる様に感じました。それが終ひには貴方だつたのです。貴方が私の夢の姿を打消さうと努めて被在

した事が分りました。けれども、私は貴方に逆らつて成るだけ醒めないやうに力んでた事をよく覚えてゐます。私が今起きた時にも矢つ張り貴方の「さあ起きろ」と云ふ聲がまだ響いてゐました」と始めて夢の顛末を告げたのです。

私が實際に心の中で「起きろ」と命じた事を話した時、彼女は驚いてゐました。彼女はその時私がおんな本を読んでゐたかも知りませんし、今まで心靈上の問題に興味を感じた事も、また私からも誰からも嘗て催眠術をかけられた経験はないのです。

ア、シユモール

これに類した観察が予の書類中に尙澤山ある。確かにこの例だけでは凡てのものを説明する事は出来ない。何故に命令と結果との間に十分間の間隔があつたのか、シユモール氏は科學上の見識に富んだ人である。吾々は太陽に關する種々の卓越した観察については氏に負ふ所が甚だ多い。氏は一八八七年に予と協同して佛蘭西天文學協會を創立した一人である。吾々は氏のこの報告を疑ふ餘地はない。さりとて、これを唯だ偶然の暗合に歸して了ふ事も出事ない。

心で見たり、心の中で讀んだりする事は、ドリユーズ。デュボテ。ラフォンテリス。シャルビニヨンなどの著書に出てゐるが、これ等の現象は夢遊患者に屢々起るものである。就中シャルニヨンの

著書に述べてある次の話は最も慥かな事實である。

「吾々は何回も心の中で虚偽の影像を描いた。そして試みた夢遊病者達は皆この影像を見たのである。吾々は心の要求に依て屢々夢遊病者から言葉、合圖、動作を招き出した。又夢遊病者が少しも知らない外國語で質問しても彼等は正しく答へる。併しその答は言葉に就ての知識を示さないで、話す人の思想を讀んで居ると云ふ事を示すのである。故に實驗者が自分に解つてゐない事を質問すると夢遊病者はそれに答へる事は出来ない。

ある人を遠方から眠らせ、これに或る動作を暗示する實驗は既に古への催眠術師に依て何回も試みられて成功したものであつて、如上の場合などは別段不思議な事ではない。

マカリオ博士は、五十年來の予の友人であるがグロミール博士が或る夜、ヒステリックな婦人を催眠術に依て眠らせ、その後で夫君の承諾を得て試みた面白い實驗に就て次の如く述べた。

「一言も話さずに彼女を大洋中に連れ出した——勿論それは心理的に——海が静かであつた間は彼は平氣であつた。けれども、間もなく催眠術師が一度び暴風雨を暗示すると、彼女は刺し通す様な金切聲を擧げて近くに在る物に縋みついた。その時の彼女の聲、涙、表情は眞實の恐怖を示してゐた。そこで、術者は尙ほ心の中で波を漸次静めて元の通りにした。そして船を揺り動かす事

も止めた。彼女は依然喘いで四肢を震はしてゐた。間もなく彼女の心も鎮まつて來た。その時、婦人は「もう決して海へなど連れ出して下さいませぬ」と恨めし相に言つた。そして「それにしても彼の氣の利かない船長は何故私達をブリツチに上げて呉れなかつたでせう」と尙ほ不満の様子であつた。

グロミール氏は彼女の叫び聲には全く驚いたと言つてゐた。彼は前に自分の試みやうとする實驗の性質を噫氣にも出さなかつた相である。』

マカリオは又次の如く述べてゐる。

「この思想の傳達と云ふ不思議な力は、數多の夢遊現象に依て始めて説明され得るのである。若し此の現象を看過する時は、人は依然超自然的作用に歸して了ふ所である。彼の夢遊病者に屢々見る所謂「言葉の賜物」と云ふ事も、この思想の傳達作用から容易に説明される。それは彼等が少しも知らない外國語で話され、その國語で答へるのは夢遊病者の場合と同様相手の言葉を聴くのではない。相手の心を読むからである。故に相手の人が知つて居る限りは、それが希臘語であらうと、羅典語であらうと、亞刺比亞語であらうと答へる者には何の差問もない筈である。つまり彼は自分の國の言葉で話されたと同じ様に理解する事が出来るのだ。實例はこの理解を證明する。

上に紹介したグロミール氏も數回夢遊病者にその知らない國語で質問して見た。最初患者はそれや理解しなかつた。氏は執拗に何回も問を繰返してゐる中に、患者は終にそれが解つて旨くその間に合ふ様に答へた。けれども、氏が知らない國語で話した時には——即ち氏にも意味が解つてない言葉を用ひた時には——夢遊病者は少しも答へなかつた。つまり催眠術を掛ける人が、自分の觀念の添はない言葉を用ひたからである。』と。

予はこの大分議論のあつた知らない言葉を理解するといふ問題に就て、否定すべからざる多くの證據を蒐めた。

中には被験者の見てゐない所で行つた思想傳達の實驗の例もある。それは被験者に隠して繪を描いて、それを寫させたのである。是の種の例は甚だ多い。ランコニー(アルス刊「未知の世界へ」三四四—三四八頁参照)

思想傳達の現象は最早決定的事實となつた。忠實にそして深くこの問題を研究した哲學者にして誰一人これに異議を挿む者はない。既に多くの實驗と確實な證據を有つてゐる斯かる事實に對して今尙否定してゐる人は何れも頑迷な人でなければ淺薄な人達許りである。

隔感的現象は普通の状態の人(即ち官能の疾患も幻覺もない人)に於て、その睡眠中と覺醒中とを問はず、一般に不意に現はれるものであつて、それは離れてゐる所に起つた事件と一致して或は強い

物的印象となり、或は他の何かの印象となつて顯示されるものである。

衝動的印象換言すれば自己の意識に因らない印象を受ける人は、大概普通の状態に在るが、それを送る人は、異常な危険状態——即ち突發的事實、苦悶、氣絶、昏睡、死等——に漸して居るのだと云ふ事實に深く注意しなければならぬ。

上記の觀察から、人間の意志が言葉もなく、又肉體的感覺の介在する事もなくて作用する事を證明する。

物質に及ぼす精神の作用に就ては久しい前から研究されて來たのであるが、中にも血液循環に因る或る疾患——即ち赤斑點、皮膚充血、發泡、出血、出血痕等——が自己暗示によつて作り出された現象はその最も顯著なものである。精神と肉體とは別物である。精神は肉體を支配する。思想又は微妙な觀念すら物質的結果を作る。心的幻想はある條件の下には器官を創成し又は變更する場合があるといふ事は幾多の實例に依て表明されてるのであつて、この根本的事實には最早一點の疑を有つ事が出來ない。そして、これ等の例の中には觀念に依り、信仰に依り、或は單に確信だけに依て皮膚の上に痕をなし、流血さへ見た例は、吾々の既に認めてゐる事である。アツシシの聖フランシスは極めて敬虔な、そして神秘的な靈魂を有つてゐた人であるが、彼は俗塵を避けて深く森林に入り、一心に祈

願をこめた。そして彼は二三人の弟子をつれて森を出て、シリヤ、埃及に巡教し、後、伊太利に歸つた。それから彼は久しい間、斷食苦行を續けてゐたが、その結果、彼は終に全く空想的な幻覺に捕はれて了つた。中でも彼は種々の彩られた翼を有つてゐる天使が彼の前に現はれ、彼を縛つてキリストが磔刑にされた爲めに出來たのと同じ様な傷痕を印したのだと信じてゐた。事實、彼の手足は釘で刺され、彼の脇腹は槍で突かれたやうに穴があいてゐた。そしてその痕は永く消えなかつたといふ。

肉體に働く心靈の靈的作用は茲に十分に證明されてゐる。この事實は極めて重大である。併も唯物論的生理學の見地からすると全然靈的作用を認めない。彼等はこの作用を實際あつた事ではなくて、宗教的傳説であると考へてゐたのである。そして此の説が一二二〇年頃から起つたので、彼等はその頃の人々の輕信に歸してゐる。「誰かそれを見たといふ證人でもあるのか」と言ふのが彼等が否定の唯一の理由であつた。唯だ、修道僧や、熱心な基督教徒だけは何んでも盲目的に受け入れてゐた。

一般に奇蹟的事實と云ふと聖者に歸して居つた。けれども斯かる例は決して聖者丈に獨得なものではない。予は本書の著述に關した研究によつて是の種の奇蹟を有つてゐる多くの人を知つて居る。意志の力、精神の力、心靈の力、自己暗示の力、並びに物質に及ぼす精神の作用の表示等は痕の生理的現象に依て確實な證據を示されてゐる。これ等の現象を否定する人々は唯だ其處に欺偽、迷盲、輕信

等を言出したに過ぎない。この瘰癧は實際に現出する。幻覺によつて苦を受けた人々の掌に、足に、又横腹に本當の穴があけられる。そして磔刑に處せられたキリストの傷に相當する個處から事實出血もする。この例は他にも無數につて、否定し難い證據を提供する。その中、二、三の例を次に示せば、

「一八一二年十月十六日にポーゼン附近のチロルのカルトムで生れたマリア、マールは、アツシシの聖フランシスの様な不思議な少女であつた。彼女が最初の聖餐式を受けたのは十歳の時で、その時分から非常に感情に熱し易い、そして極めて敬神の念の深い女であつた。聖餐の麵包を受ける時にも、神秘的聖光が一時に彼女の前に差して來て、驚きの餘り母の腕に靠れて氣絶して了つた。彼女の信仰は年と共に一層熱烈を加へて來た。遂に童貞の誓を立て、一生を祈禱と敬神に身を捧げた。

その頃、カルトムに尼僧達で聖フランシス修道院が出來た。十八歳の時彼女は其處へ聖テレザにあやかつて、テレザと名告つて入つた。彼女は自ら進んで肉體の苦痛を神に捧げる事が何物よりも幸福であると思つてゐた。神秘的靈感を信じてゐる彼女は、毎日寢臺の脚の所に跪いて、手を握り合せ、天を凝視して、恍惚として、一心に主キリストの事をのみ考へてゐるのであつた。二月二日清めの日の後に、彼女の手足と脇腹に瘰癧が現はれた。家族もそれを見た。懺悔聽聞僧

もそれを見た。醫者もそれを見た。お上からの指圖で教主トレントの大僧正もそれを檢べた。その他多くの人々に依て證明された。毎金曜日には彼女は夢中になつてイエスキリストの事を考へ詰めて、それが熱して來るとこの傷痕から血が吹き出して來るのであつた。

同様な瘰癧の現象は同じチロルにもう一つあつた。それはマリア、ドミニカ、ラツツアリーと云ふ女で、彼女は屢々昏睡状態に入つては色々の幻想に耽り、痙攣を起す事さへあつた。彼女は一八一五年三月十六日、トレントから十時間行程位のカバリー附近のカブリアナ、ド、フィーマに生れ、十九歳の時、キリストの苦難の傷を感じたと云ふ幻想に捕はれ、後間もなくその傷が實際に現はれた。そして、聖フランシスの場合と同じ様に、手足や、脇腹から出血し、また彼女の額には荊の冠の印がついて、そこからも多量の血が流れた。それが金曜日には殊に著しく、彼女の顔は宛然血汐を浴びた様に見えたと云ふ。是は醫師ダイクロシエ氏からの報告である。

又、これと同じ時代の事であるが、「チロルの處女」と言はれたクレセンチャ、ニークルチは一八一六年六月十五日カナに生れて、それからメランヤ、トレントや、或はベロナに住んでゐたが、この女も前に述べた女達と同様な徴候を示し、十九歳の時、六月七日の聖靈降臨祭の日、彼女の手に瘰癧が現はれ、二、三日後には足に、最後には脇腹に現はれて多量の血が流れ出た。こ

れも矢張り金曜日に甚だしかつた。この事實は目撃者であるカニエーのアーベ、ニコラスの著書から引用したのである。

吾々は自己暗示の例を求むるや、直ちに豫期以上多数の報告を得た。幻想の力は殊にカザリン、エムメリツヒの癡痕の例に著しく示されてゐるのであつて、この事實に對しては如何にしても物質に作用する力を認めない譯には行かない。

醫學の大家達は頭から如上の事實を無視した。自然科学の博士達も斷乎としてそれ等の全部を否定した。併かもカザリン、エムメリツヒの癡痕は彼等學者達が講義をした楡の木の子葉と同じ様に確かな事實である。

吾々今、この珍らしい事實を研究して見やう。

『アンニー、カザリン、エムメリツヒは、一七七四年九月八日ウエストフアリアの田舎區ケースフェルトの近傍、フラムスケといふ寒村に生れ、幼少の時から敬神の念の篤い女であつた。或る日彼女は次の如く語つた。

私が五六歳の頃だつたと思ひます。信條第一の「全能の神」と云ふ事に就て深く冥想に耽つてゐました。その時、宇宙創造の幻影が私の心靈の前に現はれたのです。天使の降臨、地の創造、

樂園の創造、アダムとイヴの出現、それからこの二人の不従順——すべて恚うした事實が私に明かに示されました。私は眼の當り見てゐる様な事が、誰れにでも見えるのだと想つて居ました。」と（彼女の幻想は早熟であつた。）

彼女が見た幻像の端緒だと自ら語る所は恚うである。

『それは彼女が尼寺へ入る四年前で、一七九八年即ち彼女が二十四歳の時であつた。アースフェルトのジエスイツト教徒の牧師會館に在る耶穌磔像の前に跪いて、全身の熱情を捧げ一心不亂に祈禱に耽つてゐたが、終には恍惚として快よい幻想に陥つたのである。彼女は言つた。「その時でした。天から私の花嫁が若い人間の姿になり、光彩に包まれて降つて來ました。そして聖櫃を置いて行くのを見ました。その方の左の手には花の冠を持ち、右の手には荊の冠を有つてゐて、私にどちらかを擇べと言ふのです。私は荊の冠を戴きました。その方は私の頭に載せて下さいました。私は自分の両手でそれを深く額に押し込みました。と思ふとその方の姿が消えて、俄に私の頭が激しく痛むのを感じました。間もなく其處に荊で刺された様な傷が出來て、夥しく血が流れ出たのです。」と。それで彼女は其苦惱を秘する爲めに帽子を前額深く引下げて冠つてゐた。

一八〇二年、彼女はドウルメンの尼寺に入り、その時から毎日天に向て恍惚とした憧憬の日を

送つてゐたのである。

一七〇

或る日、彼女の天の花環が現はれ、彼女に十字を切つた。すると、長さは拇指の三倍位で、幅が拇指の半分位の赤い二重の十字が指女の胸にあらはれた。一八二二年十二月二十日彼女はちつと寢臺に休んだまゝ、手を十字架に上つた様に伸べ、顔は火のやうに熱し、恍惚として救世主苦難の時を追想してゐたが、終には熱烈な禱を込めて主キリストと苦痛を共にしたいと願つた。突如、彼女の前に光が現はれた。そして、その真中には十字架にかけられた主キリストが居られたのを見た。救主の五つの傷は太陽の様に輝いた。この時、アンニー、カザリンは身を切らるゝ悲哀を感じた。そして又、眼のあたり神に接した事を限りなく嬉しく思つた。彼女は神の子の傷を吾が身に引受けたいと切りに念じてその傷口に飛び込んだ様に思はれた。すると忽ち五つの傷口から三筋づゝの赤紫色の光が差し出して、それが矢に變つて彼女の手足や、脇腹を刺した。そしてその傷口から血が滴り出た。それ以來彼女はすべての點に於て主キリストと同じ様な苦しみを感ぜ得るやうになつた。

これ等の事實をも否定せんとするのは無謀である。最早不可能である。獨逸の各地方から、その他の國々から多數の人が彼女の傷を確めに態々やつて來た。

この出來事の評判が外國まで擴まつたので、佛蘭西では彼女の居る町に政廳を置いた時、ムンステルの知事が自らこの事實を確むる爲め警部を連れてドウルメンに來た。彼等は生理學上から、又すべての科學上の説明から何うであらうと、兎に角動かす可らざるこの事實を認めない譯には行かなかつた。知事は特に軍隊から八人の専門醫を遣して彼女の傷口を治療せしめた。其結果一時は癒つた様であつたが、次の金曜日になると再び元の通りの傷になつた。

其他、彼の聖テレサ。リツキの聖ゲルトルド。聖リドウイン。匈牙利の聖ヘレン。マントウアの聖オザンヌ。ルヴェインの聖イーダ。ストルムベレーンの聖クリステイネ。十字架の聖ジャンヌ。マルニの聖ルシー。シーナの聖カザリン。コチスのパスチスとクラリツセ。ランコニオヅのカザリン。ヴェロニカ、ギラニ。コロムブシヤノルトマデライネ、ロルゲル。ローゼ、セラ等數へ來ると、この種の象現を示した例は實際枚擧に邊ない程である。けれども、この問題について述ぶる事は本章の目的ではないから、唯だ茲には上に引用した例につけ加へて、現代の學者達の注意を惹いた事件で、一八六九年にリエージ大學のデルブウフ教授によつて研究された白耳義のボアデーヌの有名な聖痕の所有者ルーシー、ラトリーの例だけを述べる事に止めて置かうと思ふ。

ルーシーは一八五〇年一月三十日に生れた女で、幼少から燃えるやうな情熱を有ち、時々夢中にな

一七一

つて冥想に耽り、そして神秘的幻想をする事があつた。彼女が最初に瘰癧を現はしたのは一八六八年四月二十四日で、復活祭後十二日目の金曜日、彼女が十八歳の時であつた。ルーシーはその日の五日前に漸く妙齡に達した許りであつたが、一年以上も前から病身で、同じ年頃の娘の様な元氣は更になかつた。その日、彼女は左の横腹にはじめて瘰癧が出来たのである。そして、次の金曜日には左手に現はれ、第三の金曜日には五つの瘰癧が悉く揃つた。荊の冠の瘰癧から血が出たのはそれから五ヶ月の後である。

思考を以て有機體の物質的作用であるとのみ考へてゐる普通の生理學から見ると、如上の事實は全然反對の立場に在る譯であつて、従て頭の古い學者達は理が非でもそれを否定してゐるのである。中にも一八七七年に、有名な醫師である彼のヘル、ザイルショーの如きはルーシー、ラトリーの瘰癧に就て、「これは詐偽か、奇蹟かのヂレムマに陥つてゐるもので、奇蹟なんといふ曖昧な事を取除いて了へば、後には唯だ詐偽が残るだけだ」とさへ極言してゐる。併し、吾々は自由な科學の見地から、それは決して詐偽でも、神秘でない事を立派に確める事が出来るのである。

著者は多くの春秋を重ねたお蔭で一八五八年のルルドの創造（舊教で祭る聖ルルドの洞窟の起り始め）と時代を同じうする事を得た。予は又、田舎に住んで居る目撃者からP夫人とG中尉（中尉は一

八五七年セント、シルの出身で當時はルルドの歩兵第四十二聯隊に勤めてゐたが、後彼は東京トシヤンに於て大隊長として戦死した人である。）との戀愛物語を聞いた。この話から彼の洞窟の事や、白痴者ベルナデット、スービリーの奇談が生れたのであるが、初のP夫人懺悔問者であるルルドの正直な牧師ペイラマール長老もこの事實を否定したのである。けれども終には此の長老さへ處女マリアの出現を認めなければならぬ様な不思議な結果を齎した。それは予と同年な友人マルタン提督も、海軍大佐のG氏も、又、ベリッツア氏も「ルルドの奇蹟」を確實に知つてゐる人々である。兎に角、この奇蹟は觀念の力や、精神的歡喜や、信仰等から來た最も珍らしい表顯の一つである。

「ルルドの話といふのは、或る美しい婦人が不意に洞窟に現はれて「私は聖靈を宿したマリアである……行いて浴みして草を食べよ」と知覺を失つた子供に幻想を起させ、少女をして確かにマリアを見たといふ確信を與へた事に始まる。」

これと同じ様な事はラ、サレットの寺院にもあつた。一八四六年九月十九日に二人の子供に現はれた聖母といふのが、一八五五年のグループルの裁判所の判決に依つて、マドモアゼル、ド、ラ、メルリエール嬢が故らにこの喜劇を演つたのだと分つても、尙ほこの寺院は二十何年間の間も榮へて居つた。又、ラ、サレットの水は種々病に特效があつた。現に予は一八五四年にラングレで自分の眼に試

して見て知つて居る。

自己催眠に依て演じ出された種々の奇蹟は、今も昔も、耶蘇教徒の間にも、異教徒の間にも等しく観察された事實であつた。吾々は又、昔セーヌ河の水源に於て羅馬人からセカナの女神に贈つたいふ奉納額をデイジョンの博物館で見た。予が最近サン、セーヌ村に行つた時、その村に近い寺にも神に捧げられたといふ同じ様な額を見た。過般セルミン博士がエスクュラピウス（醫の神）の殿堂の廢墟からカワデイス氏が持て來た發掘物の中に、その當時行はれた神秘的治療法の模様が彫刻されてある柱脚を發見したと言つて居る。これは紀元前三世紀又は四世紀時代のものであつて、その記録で見ると、當時は吾々の今日想像してゐた事と全く異つた仕方の様に思はれる。即ちエスクュラピウスに仕へてゐる僧侶達が、その聖殿に於て治療をやつてゐたのではなくて、治療したのは神自らであつた。病人等も神から直接に不思議な手術を受けたのだと確信してゐるのである。例へば胃痛患者がエビダウルスへ來て眠つてゐる間に次のやうな幻影を見たと言つて居る。

「神が連れた來た從者に命じて一人の男をしつかり抑へさせて置いて、その間に神が自ら彼の胃を開いて、痛を切り除き、そして再びその傷口を縫つた後で患者はすぐ癒つた様に思はれた。」と

吾々は常に今日の外科醫がする様な手術を自分の肉體に受けてゐるのだといふ幻影を病人に起させ

てゐるのを到る所で見ると

ルルドへ行く病人は何れも癒つたと云ふ心像を抱いて歸る。けれども事實癒る者は少數である。それは病入の多くはその希望がある形となつて現はれ、それが不思議な力を持つた超自然的のある物が働くと同じ様な働きをする可能性を缺いてゐるからである。換言すれば神秘的な力に適應して作用し得る神経組織を有たないからである。

熱烈な宗教的信念は色々の形を變へる豫言の神であつて、それがアポロとなり、エスクュラピウスとなり、イエスとなり、惡魔となり或は處女マリアともなるので、即ち信仰意識そのもの、先入觀によつて善神にも惡神にもなるのである。

予は上述の様な現象が唯だ自己暗示許りではなくて、時には取りとめのない精神力がその作用を手傳つてゐる事があると云ふ事實を茲に附け加へて置く。

予は尙意志についての研究を續ける。

意志が遠方から言葉に據らず、又電信電話の様な通信に俟たずに、意志自らの力に依て作用すると云ふ事實は最早證明済の事であつて何人も否定する譯には行かない。事實吾々は他の人に向てある事を現はす事が出来る。然らばその動いて輸送されるものは心靈であるのか、抑も亦、腦に眞の幻覺を

起させる作用であらうか、吾々は今この疑問に直面してゐるのである。此際些の先入観念を容れず、虚心坦懐にこれに對するのが吾々研究者の義務である。そこで吾々は以上述べた様な例に依てこの疑問を解決して見やうと思ふ。

予は今日まで右の問題に關係した多くの有益な報告を蒐集したのであるが、中にも特に讀者の感興を惹くと思ふのは印度ポムベ地方の視學官の妻君であるラツセル夫人から知らして來た次の經驗である。

「私は親友と一緒にスコットランドに、母と妹達は獨逸に住んでゐた時でした。私は毎年家族の人達に會ひに獨逸に出かけたのです。然るに己むを得ない差間が出来て二年許りは家族に會はずに居りました。或る時急に國に歸つて見たいと云ふ氣になりました。時は恰度春の初めなので、尤も今までこの季節に歸つた事はありません。俄かの思立ちで豫め手紙で知らしてやる時間はありませんし、又故さら母を驚かす必要もないと思ひましたから電報も打たなかつたのです。不圖、私は全身の力をこめて、妹達の一人に現はれ、私の行く事を覺らして見やうかといふ考へが浮びました。そこで、私は能ふ限りの熱烈さを以て一心に妹の事を考へ、そして私の姿を妹の前に現はしたいと念じてゐました。けれども、この思想を集注してゐたのは十分間以上は續けてゐ

なかつたと思ひます。それは一八五九年四月下旬の土曜日の晚六時頃で、その夜私は汽船リリースに乗つて出發しました。

家に着いたのは次の火曜日の朝六時頃でした。恰度、戸口が既に開いて、部屋まで行かれる様になつてゐたので、誰にも見られないで入つて行きました。その時妹の一人は戸口に背を向けて座つて居ましたが、私の入つて來る足音を聽きつけて私の方を振り向いたのです。すると妹は何故か、宛然死んだ様に蒼青になつて驚いて、手に持つてゐた物を落したのです。私はこの時までまだ一口もききませんでした。彼女の驚き方には反て私の方が愕いてしまひました。聽て私ははじめ「私だよ」と申しました。そして「何故そんなにびつくりするの？」と尋ねますと、妹は「スタンシエン（も一人の妹）が前の土曜日にあなたを見た様に、私も今、あなたを見てゐるのではないかと思つたからです」と答へました。

それで、彼女の言ふところを聽くと、前の土曜日の六時頃、スタンシエンの居る部屋へ私が戸口から入つて來て、それから母の部屋に通ずる扉を開いて入つて行つたといふのです。彼女は間違なく私が來たと思つたので、私の名を呼び乍ら私の後を追ふて母の所へ行きましたが、私の姿が見えないので、すつかり氣抜けがして、ほんやりしてゐた相です。母は何が何やら一向譯が解

らなかつたのですが、兎に角、皆んなでそこら中を捜して見たのだと申しました。

私を見た妹——即ち私の變怪を見た妹——は私の着いた日の朝外へ出て留守でした。私は階段の所に腰かけてゐて、妹が歸つて私を見たら彼女は何んな顔をするであらうといふ好奇心に唆られました。實際妹が歸つて来て、眼をあげて階段の所にゐた私を見つけた時は、私の名を呼んだ儘もう少しで氣絶しさうになりました。妹は前にも後にもまだ一度もそんな變つた物を見た事はないのです。それ以後私は決して二度と斯様な事をするものではないと、つくづくさう思ひました。それは私が家へ着いた許りの時に始めて私を見て驚いた妹は、その時の烈しい衝動から遂に病氣を惹き起したからです。

ジー、エム、ラツセル」

これは生きた人の幻影を取扱つた問題に立戻つて考へて見なければならぬ事であるが、兎に角、この事件に就て英國心靈學研究會の調査と本文の筆者并にそれを證明した家族の名譽とを對照する時、吾人は聊かもこの話の確實性を疑ふ事は出来ない、他の多くの例と同様に遠方に働く意志の作用を立證してゐる事實である。

次に掲ぐる英國リーズのグブリュー、ダットン僧正の證明した事實も亦、本問題に極めて密接な關

係を有つてゐる例である。

「一八六三年六月中旬の或る日の眞晝中、私がハツダースフィールドの表通りを歩いてゐた時でした。私の親友——スタットフォードシャイヤーの彼の家に今、重病で床に就いてゐる筈の人が、此方へやつて来るのを認めました。尤も彼の病氣だといふ事は二、三日前に友人から聞いたのです。

私は不思議な事に思ひ乍らも、彼は存外早く癒つたのだと許り信じてゐたので、彼の近づいて来るのを待つてゐると、聽て彼は私の傍に来て何とも言ひ様のない悲痛な表情で私を眺めてゐました。そして私が握手しやうとして手を差出すと、彼は一寸もそれに氣を觸れずに又何の挨拶もせずにもそのまま歩いて行つて了ひました。この奇態な彼の仕打に尠からず面喰つた私は數秒間は唯だほんやりして立つてゐました。勿論最初から彼と一語も交へないのです。そして彼が音を立て、歩いて行つたか何うか、また、何んな服装をして居つたかはよく覚えて居ません。併し私はその時、「君に頼みたい事が澤山あるのに、君は来て呉れない」といふ彼の言葉だけが明瞭に印象されたのです。

驚きからやつと我に回つた時、私は振り向いて彼を見やうとしましたが、彼の姿はもう消えて

了つたのです。私はすぐ念の爲電報で問合せ見やうかと気が付きました。けれども矢張り自分で行つて彼の生死を確かめた方が間違ひないと考へ直しましたのです。私は何となく彼の死が事實である様な気がしてなりませんでした。翌日、友の家に着いた時には友はまだ生きてはゐるが、半ば意識を失つてゐました。そして、彼は時々私に来て貰ひたいと言つてゐた相ですが到底生前には會へまいと諦めてゐたらしいのです。

尙ほ種々前後の模様を聽いて見ると、前日私が彼の幻影を見た時刻には、彼は眠つてゐたに違ひありません。そして彼は何處かで私と會ふたと信じてゐた相です。その後、彼は六ヶ月許り存命して居りました。

W、E、ダットン』

著者はこの人に他にも幻覺の經驗があつたか何うかを照會したら、唯この一回だけだといふ返事が来た。

上來掲げた磁力、催眠術、心の傳達、自己暗示又は生存者の幻影等の各種の實例は、事實の根本を確め置く必要から引用したものであつて、これ等に就ては後章更に詳しく説明するが、鬼に角、精神が肉體組織の上に作用するといふ事實を立派に確證し、同時に心靈と肉體が全く獨立して存在する事

の結論に吾々を導くのである。

更に實驗に依る研究を續ける。

予は先づ、世間の批判的立場から當然起つて来る反對、即ち科學的實驗方法に對する非難から答へて行かうと思ふ。夢や、豫感は何れでも常に經驗する。併し多くの人は何等の結果も伴はない夢を見る。そして豫感は實現しない。故に適々事實と夢が一致しても、豫感が本當であつても、それは單なる偶然であるとして、換言すれば特に何の價值もない事として考へられるかも知れない。けれども、この反對論が、特殊の感覺、明確な事實、その時の詳しい模様、豫知された變事、或は時々寫眞に映つた様に明瞭に見られた場面等の問題を考へないならば、それは有力な議論とも言へやう。例へば九十四頁に引用したコンスタンス夫人が豫感を受けた結果、幾ら醫師が薦めても鹽酸と間違ひた硫酸を用ゐなかつた事實や、海に溺れたドラウネーや、ユツセー嬢の豫感の場合(九十七頁)や、アルポーソフ夫人の劇的の死や(百頁)。二十八吉米も離れた所で死に瀕して居る母を訪ねて夜中を走つて行つたガリソン氏の場合などには、この反對論は全然適用され得ないのである。吾々の靈的傳達に關する確信は絶對的に特色のある事實それ自身によつて反つて漸次強められて来た。

第六章 隔感現象と遠隔の地に於ける靈的傳達

言葉に非ず！ 事實を！

若し言葉にも、様子にも依らないで働く意志の作用が、心靈の個々の存在の表現であるとするれば、隔感現象や、遠距離に於ける精神的相通も亦同様に心靈の存在を證明するものである。

幾十、幾百、幾千哩の距離を隔て、不意の出来事や、病氣や、死などの事實を、即時に又は突然に知覚する實例は何處にも澤山あつて、今日では心理學的研究が不思議でも何んでもない殆んど通俗的な問題になつた。併も、何世紀の間も常習的に否定し、誤解して來た頑迷な心理學者達は今日も尙残つて居て、依然古い事許り主張して居る。恐らく此處もさうであらう。

予の讀者はよくそれを熟知して居る。この問題に關して予が既往に於て發表した所を再び茲に繰返す事を欲しないが、予は唯だ、以心傳心と云ふ重要な精神現象の在る事を深く銘記して貰へばよい。それは靈の存在を證明するからである。その爲めに、左に二、三の特色ある新らしい事件を讀者の前

に紹介するに止める。

拙著「ランコニー」(邦譯「未知の世界へ」)に紹介した「遠距離の地に起る實際の出来事を夢中に目睹する事」に關する章の中で、予は根據ある實例四十七を擧げて、何人も打消し難い證據を提供した事と信じる。中にも、「夢の中で瀕死の叔父を見、又聲を聞いた著述家ビエール、コニルの有名な經驗」。「マルセーユへ歸航の途中、船の中で頭の血みどろになつた弟の姿を見た船長の話」。「自分の父母を乗せた船を技師バルメロが見た話」。「マルタン、ハルル氏が遠方にゐた未知の若い娘の窓から壁ちたのを見た話」。「醫師クロツケー氏が夢に痾を見て實際にそれを手術した話」等は特に顯著な例である。要するに、これ等の遠感的現象から夢中或は睡眠状態の下に遠距離の物象を確實に見取る事が出来るといふ結論を得た以上、更にそれを敷衍して茲に詳述する必要はない。吾々は又、コンテイ女王が夢の中で別室に寝てゐる王子達の上に將に壁が崩れやうとしてゐる所を見て馳け付け、危境から救ひ出したといふ有名な話を讀んだ。

茲に前述の話を一層確實に裏書する出来事がある。それは起きてゐる人と寝てゐる人の間に起つた極めて珍らしい實例であつて、今はラ、ロシエールに隠居して居る海軍官吏ア、ダルジー氏から、一九〇四年八月に懸々送られた報告である。氏の希望に依て當事者の名前又は秘する事にした。

S夫人は一八八七年には家族と共にウアンデに住んで居た。彼女は前からT氏と許婚であり熱烈な相思の仲であつた。そして二人の間には繁く文通もしてゐた。

「或る夜十一時近く、S夫人は絶望的な聲に目が醒めた。聲はすぐ聴き分けられた。そして顔に息を吹きかけられた様にさへ感じた。彼女はそこに誰かゝゐるとでも思つたのか、機械的に手を伸ばしてその人を探した。

後は何の感じも起らない、また何も見えなかつた。そして何の原因やらも推量が出来なかつた。けれども彼女は何となく怖ろしさに堪へなくなつて、別室に寝てゐた母を起しこの錯覺の話をした。同時に彼女はバスビレネー縣の遠い田舎の方で、恰も今、何等かの不幸な事が起つたやうな強い豫感に打たれた。夜の明けのを待つて彼女は許婚に宛て、手紙を出した。その返事は來なかつた。續いて出した手紙も同様であつた。そして數ヶ月経つても彼から何の便りもなかつた。ある日S夫人は偶然に、その愛人が田舎町に重大な疑獄事件の發生する事を防ぐ爲めに責を一身に引いて即夜投獄されたといふ事を聞いた。そしてこの不幸な男に附いてゐた醫師の話に依ると、萬事休した事を覺悟した彼は極めて絶望的な聲を擧げて彼の許婚の女の名を呼んだといふ事を證言した。

斯くして二人の關係はその儘永久に断たれた。後、T氏は他の女と結婚したが、三、四年前に死んだ。

「アルジー」

この生きた人の間に於ける心靈相通の現象で慎重に觀察された事實は彼のウィルモア夫人が、家で寝てゐる間に航海中の夫を訪ね實際其處に到着した話。「未知の世界へ」四九五頁参照）を始め何百といふ同じ種類の例がある。

著しく距離を隔つた二人の間にも同じ様な遠感的事實の現はれた場合に就ても、注意深い觀察家に依て随分澤山の報告が予の手許に集つてゐる。その中から一、二を次に引用する。

それは現に巴里大使館に勤めてゐるウオアリングトン、ドーソン氏から寄せられた報告で、當時氏は巴里新聞の亞米利加係を担当してゐた。(一九〇一年十二月三日附)

「私は非常に珍らしい遠感現象の例を貴下に御報告する。それは最近私自身に起つた事で、多少なりとも貴下の御研究の参考になる事と思ふ。

去十月八日(火曜日)に私はフェード街十八號の事務所で貴方の若い同僚である婦人天文學者クルンプク嬢の事に就ての記事を書いて居つた。その時、この編輯に必要な以前彼女を訪問した

時の記事がないので一時筆を止めて、色々考へた結果、この記事がウアレンヌ街三十六號にある私の室の机の抽斗にあつた事を想ひ出したので、直ぐそれを取りに歸つた。私は例もの通り帽子を入口の部屋にある卓上に置いて、私の部屋——中二階の上四階目——に上つて行つた。その時私の室は少しも整頓されてゐない、全く打つ棄り放しになつてゐた。尤も初の留守中其處には家政婦が居つた様子も見えるが、彼女は少しも部屋の整頓はして呉れないのだ。「私は駄目だなあ」と獨りで呟いた。それから、母がもう餘程前に巴重に歸る筈であつたといふ事から、母が居つて呉れたら恠んな不爲體な事はなかつたらうと云ふ様な事を考へ乍ら自分の仕事部屋へ行つた。そして、私は暫く書類やランプの載せてある私の机の前に坐つて居た。それは確かに八日の午後二時頃である。クルンプク嬢に關する記事を亞米利加に送つたのも矢張八日であるから上記の日附には無論間違ひはない筈である。

次の週、亞米利加の母から手紙を受取つた。それには意外にも今述べた様な、私の失望した部屋の有様が明瞭にデョーシ、コーファン夫人に見えた事が認めてある。是には私は驚かすには居られなかつた。

母の手紙には紐育の十一月十一日の日附がしてあり、消印も同日であつた。つまり前記の室の問題があつた日から恰度三日目に出したものである事は言ふまでもない。巴里から紐育には早くも八日費かる。海底電信でない限りは三日以内に出来事の分る方法はない。と言つてまさか恠んな事に一語一法二十五サンチムの高い電報料を拂つたと想像する人もあるまい。母はこの手紙を十月十一日の金曜日にコーフアン夫人に會つたと書いてあるから、それは九日になる譯である。そして夫人が紐育の時間で午後二時に私を見やうとしてゐたとすれば、その瞬間に於ける私の巴里に居る動作を見るべきであるのに、午後二時前の私の事を見たといふのは奇妙な現象であると思ふ。

御覽の通りこの手紙はコーファン夫人が私の部屋の事から叙べて居るが、私の部屋はまだ一度も寫眞に撮つた事もなく、殊にコーファン夫人が歐羅巴から歸つて以來始めて母に會つて、その數分後に私の室の説明をしたのだから彼女は室の様などは豫め知つてゐる筈はない。

尙、巴里では中二階以上は改めて一階、二階と數へて行く習慣になつてゐるので、母が四階と言つたのは巴里の流儀であつて、紐育で云ふ七階である。夫人が階と當てた理由もそれで分る。又私は年中その時刻に自分の家へ歸つた事は唯だ一回ある様に覺えて居る。その上、コーファン夫人は亞米利加にはまだ知られてない磁器のストーブが私の室にあると立派に言ひ當てゝ居る。

兎に角、夫人は斯かる遠距離から私の室内の模様を正確に透視したと云ふ事は些の疑ひのない事實である。

私の家族は長い間コーファン夫人と交際して居つた。そして或る時は身内の者に起つた出来事を見て貰つたり、或る時は紙片に何か書いて置いて夫人にそれを當てさせたりして興がつてゐたのであるが、彼女は何時も明確な答を與へた。

フランシス、ウオアリントン、ドーソン」

(其後、夫人は英國の天文學者イザック、ロバーツと結婚した。)

この手紙と共にドーソン氏の母堂からの十月十一日附の手紙も添えてあつた。それにはコーファン夫人の言つた通り、巴里の六階の部屋、ドーソン氏がこの部屋に來た事、召使がゐないので當惑した事。彼が帽子を卓上に置いた事、書類の搜索、書櫃の模様、そして彼がその机の前に座つた事まで詳細に書かれてあつた。

この遠方からの精確な視力は全然自發的なもので、又絶対に争ふ事の出来ない事實である。けれども、唯だ不思議なのは視力が前日に溯つたのであつて、その日の瞬間に行つたのではない事である。即ち時間と空間とに於ける隔感の二重現象を表はして居る。

要するに生きて居る人の間の以心傳心的相通はこの種の現象の経験がない人から想像する様に罕れな事ではない。

茲にも面白い例がある。これは今、英國サレー州のサットンに住んでゐる海軍中佐T、W、アインスバリー氏から一八八二年十二月に送られた書信である。

『私は十三歳の時、ジャバ島の西方バリ島に這入らうとしてゐた船から落ちて、辛くも溺死を免れた事があつた。その時私は暫く海中に沈んだ後で再び水面へ浮び出ると、すぐ「母さん」と呼んだので、救助に來た乗組員達は、當時興がつて私を擲擲つてゐた。數ヶ月の後私が英國に歸つた時、母に向つて、

「私が水中に沈んでる間に貴方達がこの部屋に居るを見ました。お母さんは何か白い物を縫つてゐた。それからエミリーさんも、エリザさんも、エレンさんも皆其處にゐました」と、當時の話をする時、母から

「お母さんもお前が呼ぶのを聞いたよ、それでエミリーに窓の外を見て貰つたのだ」と言はれた。經度の差を考へると私の出来事と、母が私の聲を聞いた時刻とがよく一致して居る。」

尙中佐の他の手紙には更に詳しく説明してある。

「私は母や姉妹達の顔、部屋の様子から家具の模様、それから古いヴェニス風の日除けなども見た。姉が母の側に座つてゐた。」

時間は判然^{はつきり}覚えてないが、早朝の事であつた。前日顛覆した帆船が岸に打上げられたのはよく記憶して居る。士官がその船を曳いて来る様にと命令した事も記憶に残つてゐる。實際危ない所であつたが、私は當時、子供心にそんなに怖ろしい運命が迫つてゐやうとは少しも考へてなかつた。けれども、その時の事は深い印象となつて未だに忘れる事が出来ない。又、水兵が「坊ちゃん！ なぜお前はお母さんをお母さんと呼んだのか？ 悪魔の爪からお母さんに助けて貰へるとでも思つたのかな」とからかひ半分に言はれたのも耳に残つてゐる」

念の爲め中佐の姉妹に照會すると、次の返事があつた。

『私はあの出来事をよく思ひ出せます。私共が座つて靜かに仕事をしてゐた時でした。「お母さん！」と云ふ微かな叫び聲を聞きました。皆んなに聞えたのです。お互に眼を見張つてゐると、又「お母さん」と呼ぶのです。二度目の聲は如何にも恐怖で押へられてる様な、そして苦悶の叫びの様に感じられました。私共は思はず總立になつたのです。母は「戸口へ行つて、何んだか見て来て御覽」と申すので私はすぐ往來へ出て數分間捜して見ましたが何も見えません、微風さへない

い靜かな夜でした。母はこの出来事ですつかり驚いてゐました。』

これ等の生存者の間に起る思想の傳達と云ふ事は日常吾等が経験してゐる様な五官の作用に因て爲さるゝものとは全く違つたものであつて、それは凡ゆる證據が明示してゐる様に其處に働くのは心靈である。

恚うした實例は幾らでも引用する事が出来る。その中には一人の女丈夫が門柵を開かうとして餘りに身を屈け過ぎて馬から落ち、その時の叫び聲が七吉米も離れた遠方の五人に聞えたといふ話もある。

予は親切な婦人達から、キリスト教の教理を無視して、遠距離の靈感とか死の知らせとかと稱へる滑稽な話を眞面目に認めてゐるのは不都合だと云ふ詰問の手紙を受取つた。それは大方坊さん達に吹込まれた結果であるとは想像されるが、中にもサランの婦人の手紙の如きは随分思ひ切つた罵倒を極めたものである。その次に來た手紙（九一三信と九一四信）も同じ郵便で着いたのであるが、この二つは互に矛盾してゐる事があると思へば不思議にも互に補足し合つてゐる所もある。

九一三信は「以心傳心など、云ふ精神現象は凡て虚偽です。斯かる事を眞面目に承け入れてゐる貴方は殆んど狂氣の沙汰であります。私はこの上貴方のランコニー（未知の世界へ）を讀み續ける氣持